

第12回国語ワーキンググループの議題

議題 (1)

取りまとめに向けた検討について

国語WG取りまとめ案

※黄色ハイライトは、前回WGにおける指摘等を踏まえた修正
(軽微あるいは形式的な修正はハイライトせず、溶け込みで修正)

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性

(1) 現状の成果

- ア. 現行の学習指導要領における改善事項
- イ. これまでの成果

(2) 現状の課題

- ア. 学習内容に関する課題
- イ. 系統性に関する課題
- ウ. 指導・環境面に関する課題

(3) 改善の方向性

- ア. 「深い学び」の実現
- イ. 目標及び見方・考え方
- ウ. 内容の改善の在り方について

2. 目標及び見方・考え方の在り方

(1) 目標の在り方

(2) 見方・考え方の在り方

3. 資質・能力の構造化のポイント

(1) 内容の表形式化

(2) 高次の資質・能力の整理

4. 内容の改善の在り方

(1) 内容の充実について

- ア. 「思考力、判断力、表現力等」の整理
- イ. 「知識及び技能」の整理
- ウ. 高等学校における科目構成の見直し

(2) 内容の精選について

- ア. 学習指導要領の内容の精選
- イ. 教科書における内容の精選

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方

(1) 学習の基盤となる資質・能力「言語能力」の育成の在り方

(2) ICTの活用等

(3) 書写

(4) 柔軟な教育課程の編成・実施

(5) 学習評価の在り方

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性①

(1) 現状の成果

A. 現行の学習指導要領における改善事項

- 国語科では全ての学校段階を通じて以下を共通目標として整理した。
 - 国語の特質を理解し適切に使えるようにすること
 - 伝え合う力を高め思考力や想像力を養うこと
 - 国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うこと
- 前回改訂では、情報化やグローバル化の進展など現代的な諸課題を踏まえ、言語活動の充実を通じて思考力、判断力、表現力等の育成を一層重視する観点から、以下の力などを育むための見直しを行った。
 - 相手や目的、場面に応じて、考えを分かりやすく伝える力
 - 他者と協働して考えを深める力
 - 文章を読んで自分の考えをもつ力
 - 情報を的確に捉え批判的に吟味する力
 - 言語文化を継承・発展させる態度
- 全ての学校段階を通じて「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域における系統的指導を進め、学習過程を明確にすることで資質・能力の確実な育成を図った。特に、高等学校では、資質・能力の育成を一層確かなものとするため、科目構成を見直し、以下の科目を新設した。
 - 共通必修科目：「現代の国語」「言語文化」
 - 選択科目：「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」

I. これまでの成果

- これらの改善により、以下の成果が得られた。
 - 話や文章に含まれる情報を理解し、自らの考えを表現する学習活動の充実
 - 伝統的な言語文化に親しむ学習の重視
 - 課題解決的な学習活動の充実
 - 高等学校における各領域の指導改善
- こうした中、PISA調査では、日本の15歳の生徒（義務教育修了段階）の読解力は世界トップクラスを維持している。

※生徒の学力層は幅広い状況にあることに留意が必要。

(2) 現状の課題

A. 学習内容に関する課題

- 生成AIやSNSなどの普及による情報・メディア環境の変化も見据え、生きて働く「知識・技能」の定着に加えて、言葉を手がかりに自分の考えを深め、他者と協働してよりよい社会や文化を創造していくための資質・能力の育成が一層重要となる。
- このような中、全国学力・学習状況調査や学習指導要領実施状況調査等において、以下のような課題が見られる。（P.49～54参考資料参照）

<a.言葉で思考を整理したり深めたりすることに課題>

- 自分の思いや考えに適した言葉を用いて表現すること、話や文章の内容と既有知識等を結び付けて整理し考えることに課題がある。
- また、多様な文章に触れ自らの考えを深める読書習慣の定着や、学習の基盤となる語彙の習得にも課題がある。

<b.目的や場面に応じたコミュニケーションに課題>

- 目的や場面に応じて、話したり聞いたりして考えを整理すること、思いや考えが相手に伝わるように話や文章を構成して表現すること、対話による合意形成や相互理解を図ることなどに課題がある。

<c.目的に応じた文章理解、情報の評価・熟考に課題>

- 目的に応じて文章を読み、自分の考えをもつこと、多様な情報や意見の妥当性・信頼性を確かめることなどに課題がある。
- 情報社会で必要とされる「文章を読む力」や「情報を評価・熟考する力」が十分に身に付いていない。

<d.我が国の言語文化を継承・発展させる態度の形成に課題>

- 我が国の文化としての言語の価値を理解し、言語文化を継承・発展させていく担い手としての自覚をもつことに課題があるとの指摘がある。

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性②

(2) 現状の課題 (続き)

イ. 系統性に関する課題

<a.「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の課題>

- 「思考力、判断力、表現力等」の学習過程が「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」「書くこと」「読むこと」で異なっており、各領域の学習が個別のものと意識され、関連付けて学びを深めることが難しい実態が見受けられる。
- 各領域の言語活動例の種類の示し方が、3領域（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）別に整理されており、各活動で扱っている話や文章の種類を関連付けて学びを深めることが難しい実態や、目的を意識せず文章の種類ごとに活動を細分化し指導する実態が見受けられる。
- 児童生徒がどのような思考・判断・表現をする姿を目指すのかが分かりにくく、一連の流れとして“考えて・判断して・表現する”学びになりにくい。
- どの〔知識及び技能〕を思考・判断・表現の過程で活用することに重きを置くのか、取り立てて学習することに重きを置くのかが明確でないため、具体的な指導がイメージしづらい。さらに、言語文化の継承や価値観の形成そのものを知識・技能として身に付けたり理解したりさせる指導が不十分である。

<b.高等学校の科目編成等の課題>

- 小中学校での学びを発展させ、高等学校へと接続し、大学や社会での実践的な活用につなげていく観点から、高等学校における科目の在り方を再検討することが必要である。
- 選択科目の単位数が多く（全て4単位）、時間割編成上の制約が大きい中、以下の実態も見受けられる。
 - ① 実社会におけるコミュニケーション能力の育成を図る「国語表現」が、大学入試に繋がらない等の理由で、進学希望者が多い高校で選択されにくい。
 - ② 国公立理系では「論理国語」と「古典探究」のみの履修、私立理系では「論理国語」のみの履修にとどまる例が多く、バランスが悪い。
- 現行の必修科目では、各科目の役割や内容が必ずしも十分に整理されていると言えず、明確化した各科目で扱う教材の文章の種類と育成する資質・能力との関連が十分に意識されにくいという指摘がある。

ウ. 指導・環境面に関する課題

<a.言語能力の育成>

- 国語科で育成すべき「読む力」と、各教科で必要とされる「教科書等を読み解く力」の役割分担が十分に整理されていないことにより、各教科における「教科書等を読み解く力」の育成が不十分になっているという指摘がある。
- 読書習慣の形成やメディアリテラシーの向上に向けて、地方財政措置の積極的な活用を図ることにより、図書購入や新聞配備等も含めた学校図書館の機能の充実を一層進めることが重要である。

<b.柔軟な教育課程の編成>

- 柔軟な教育課程編成を促進する方向性を踏まえ、学校の創意工夫ある実践を促す観点から、指導内容等の示し方を検討することが必要である。

<c.学習評価>

- 比較的短い単元で重点化した特定の学習過程に即して総括的評価まで行おうとすることで、「学習改善等に生かす評価」に必要な適時のアセスメントやフィードバックを行いにくくなる状況が見られる。また、単元を終えた後、事実に知識の習得を問うペーパーテストのみで総括的評価を行う実態も散見される。

<d.ICT活用等>

- GIGAスクール構想によりデジタル学習基盤が整備されたが、複数の情報を基にした思考、動画・図表の活用、文字入力など、多様なデジタルツールを生かした指導は、なお試行錯誤が続いている。また、情報過多の時代にあつては、情報を整理し、自分の考えを形成する指導の重要性が一層高まっているという指摘がある。
- ブラウザの検索結果の最上部にAIによる要約が表示される中、その内容を単純にコピー＆ペーストして、十分な思考を働かせていない実態等も散見される。このような中で、収集する情報の信頼性や妥当性を確かめた上で、それらを活用して自ら思考・判断・表現できるように指導することが重要である。

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性③

(3) 改善の方向性

ア. 「深い学び」の実現

- 生成AIが飛躍的に発展するとともに、社会の多様性と分断の危険性の双方が増すことが想定されるこれからの社会においては、自らの考えを言葉にし、論理的かつ説得的に表現し対話する力や、多様な他者の感性や情緒を理解するとともに、それらを通じて自らの思いや経験を効果的に表現する力、他者と協働して考えを深める力など、人間ならではの力の育成が必要である。
- 一方で、児童生徒には、言葉で思考を整理したり深めたりすること、目的や場面に応じて伝え合うこと、多様な情報の妥当性や信頼性を確かめることなどに課題が見られる。また、学習指導要領における〔知識及び技能〕、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容の関連性や系統性が十分に意識されにくく、資質・能力を総合的に育成する学びの実現にも課題が見られる。
- そこで、これからの国語科は、言葉を手掛かりに、相手や状況、目的に応じて、話や文章の内容を理解して自分の考えや思いを広げ深めたり、それらをよりよく表現し、他者と伝え合うことで考えや思いをさらに深めたりする力を育てる教科として再構造化する。
- 具体的には、以下に掲げる小・中・高校を通じた改善を図ることで「深い学び」の実現を目指す。
 - 目標と見方・考え方を小・中・高で一貫して示す
 - 「話や文章の機能」によって、話す・聞く、書く、読むの学びをつなぐ
 - 知識・技能を、各領域の学習の過程で生かし深めるものと各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深めるものに整理する

イ. 目標及び見方・考え方

- 児童生徒が日常生活で培った言葉の経験を基盤に学びを進めるといふ教科の特性を踏まえ、教科としての一貫性と内容の系統性を明確に示す。資質・能力の柱ごとの目標は、小中高の系統性を踏まえつつ、児童生徒の発達段階に応じた力の深まりを明確にする。
- 国語における「見方・考え方」については、激しい変化が止まることがない時代を生きるために、言葉の背後にある意図や文脈を捉え、自らの思考を深めて表現することが、国語科を学ぶ本質的な意義の中核であることを端的に表すよう改善する。

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性④

ウ. 内容の改善の在り方について

- 国語科における深い学びの実現に向けては、個々の学習活動に取り組むことにとどまらず、複数の単元や領域の学びを関連付けながら、思考・判断・表現する学習を充実することが重要である。
- 併せて、〔知識及び技能〕についても、その性質に応じて各領域の学習過程で知識・技能を働かせながら思考・判断・表現の質を高める学びと、言葉や言語文化に関する理解を深める学びを充実する必要がある。
- その際、児童生徒の習熟状況に合わせたきめ細やかな対応が必要であることにも留意する必要がある。

<a.思考力、判断力、表現力等>

- 言葉を手掛かりに、相手や状況、目的に応じて、話や文章の内容を理解して自分の考えや思いを広げ深めたり、それらをよりよく表現し、他者と伝え合うことで考えや思いをさらに深めたりする力の育成には、様々な種類の話や文章を理解したり、自ら表現したりする学習が必要となる。しかし、様々な種類の話や文章を理解したり表現したりする学習を別々に設定して指導しようとする、それらの学習に共通して働く資質・能力が見えづらく、複数の単元や領域の学びを関連付けて深めにくくなる。
- そこで、様々な種類の話や文章が社会の中でどのような機能を果たしているかに着目し、「考えや主張の理由付けと吟味」など、その主な機能を「話や文章の機能」として整理する。その上で、各領域において、「話や文章の機能」ごとに〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項を整理する。
- このことにより、話や文章の種類ごとに理解したり表現したりする学習を個別に完結させるのではなく、例えば「論説を読む」「意見文を書く」「提案のスピーチをする」などの異なる領域の学習を、「考えや主張の理由付けと吟味」という「話や文章の機能」により関連付けた指導計画を構想しやすくする。このような学習の関連付けを通して、各領域で必要となる資質・能力をその特質に応じて働かせるとともに、各領域の学びを相互に関連付けながら深めることができるようにする。

<b.知識及び技能>

- 具体的な指導がイメージしやすいように、以下の二側面で整理する。
 - ①**運用しながら深める側面**（各領域の学習の過程で生かし深める）
各領域の思考・判断・表現の過程で、どの知識・技能を、何のために働かせるのかが明確になるように整理する。これにより、話や文章の構造、表現の仕方などに関する知識・技能を実際の話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの中で結び付けて使い、話や文章の理解を深めたり、考えを整理したり、表現をよりよくしたりする学習の充実を促す。
 - ②**教養として深める側面**
（各領域の学習を支える文化的な知識や態度、教養として深める）
言葉や言語文化に関する知識・技能を、その意義や価値と結び付けて理解できるように整理する。これにより、言葉や文字の仕組みを知ること、古典や読書に親しむこと、文字を整えて書くことなどを、自分の考え方や感じ方、他者との関わり、社会や文化の在り方とのつながりの中で捉え、理解を深める学習の充実を促す。
- 語彙、読書、情報の扱い方、我が国の言語文化に関して更なる改善を図る。

2. 目標及び見方・考え方の在り方

(1) 目標の在り方 補足イメージ①、②-1、②-2参照

- 小中高の目標における柱書の文言を統一し、育成したい資質・能力の趣旨を端的に記載する。
- 資質・能力の3つの柱ごとの目標については、次のように大きな方向性は共通としながら、発達段階に応じて学校種ごとに系統的に書き分ける。

〔知識及び技能〕

国語の特質を理解し適切に使うことと、我が国の言語文化に親しみ理解を深めることについて、学校種に応じた生活の広がりや理解の深まりを踏まえて示す。

〔思考力、判断力、表現力等〕

論理的に思考する力、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力、他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を、教科として一貫して育成する力として小中高で統一して示しつつ、学校種ごとの発達段階に応じて示す。

※高等学校では、小中学校で身に付けた資質・能力を更に高めるとともに、卒業後も続く実社会の場において国語を活用していくことを見通した表現にする。

〔学びに向かう力、人間性等〕

- ① 学習で育みたい学びや生活に向かう態度：小学校では表現や伝え合いの過程に注意を向けること、中学校ではその過程を確かめながら捉え直すこと、高等学校では過程を吟味することに重点を置いて、学校種に応じて系統的に示す。
- ② 学習で育みたい情意・感性：「国語を尊重する態度を養うこと」を基盤として、そのために必要となる言語感覚の高まりや言語文化への関わり方について、学校種に応じて系統的に示す。

(2) 見方・考え方の在り方 補足イメージ①、②-1参照

- 現行の「言葉による見方・考え方」は、「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」としている。
- この趣旨を踏まえつつ、①「教科で扱う事象や対象」、②「教科固有の物事を捉える視点」、③「教科固有の考え方や判断の仕方」がより端的に伝わるよう、見方・考え方の示し方を見直す。

① 「教科で扱う事象や対象」については、日常生活や社会生活における他者との関わりの中で、言葉を通して対象を捉えるという側面をもちつつ、その捉え方や伝え方などを支える言葉そのものの意味や働き、使い方などを吟味しながら思考・判断・表現する資質・能力を育成するという教科特性を踏まえ、「様々な事象を表す言葉を」と示す。なお、「様々な事象」には「心情や考え」などが含まれるが、「見方・考え方」を端的なものにする観点から本則上は追記せず、学習指導要領の解説において丁寧に説明する。

② 「教科固有の物事を捉える視点」については、現行の「言葉による見方・考え方」に含まれている「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目」する側面を位置付け直して端的に示すことが重要であることから、「その（＝様々な事象を表す言葉の）意味や働き、使い方」と示す。「意味や働き、使い方」には、語句や文が表す意味、文や文章の組み立て、内容を相互に関係付ける働き、相手や状況、目的に応じた用い方など、理解や思考、表現に関わる言葉の様々な側面が含まれるが、具体的には学習指導要領の解説で説明する。

③ 「教科固有の考え方や判断の仕方」については、卒業後の人生においても働かせるものとして、「多様な立場や考えを理解して、よりよく伝え合おうとすること」と端的に示す。グローバル化や内なる国際化が進むとともに、アルゴリズムによるネット上での社会の分断の危険性も指摘される中、国内外で異なる価値観を持った人々と、協働して課題解決を進めていくためには、多様な立場や考えを理解し、相手や状況、目的に応じて言葉を丁寧に選びながら、よりよく伝え合うことが重要であり、これらの趣旨を、学習指導要領の解説において説明する。

3. 資質・能力の構造化のポイント

(1) 内容の表形式化 補足イメージ①参照

- 国語科は、思考力・判断力・表現力等の系統性が明確であり、知識及び技能が全体として思考力・判断力・表現力等の深まりを助ける構造をもつ。
- そのため、表形式で示すに当たっては、思考力・判断力・表現力等の深まりを明確にできるよう列として示し、その深まりを知識及び技能が支えながら一体的に育まれていくことを視覚的に示すことにより、学習指導への改善に資することが期待できることから、「並行パターン」で表形式にする。

(2) 高次の資質・能力の整理

補足イメージ①、③-1～③-9参照

- 高次の資質・能力については、発達の段階や校種ごとの目標に応じて、その深まりや広がりが適切に表現されるよう整理する。

<a.思考力、判断力、表現力等の「総合的な発揮」>

複雑な課題の解決に向けて、個別の思考力、判断力、表現力等を組み合わせたり選んだりして総合的に働かせた状態である。国語科では、相手や状況、目的に応じて、思考・判断・表現の力を総合的に発揮し、自分の考えや思いをよりよく伝えたり、理解や解釈したことを踏まえ自分の考えを広げ深めたりすることができるとして、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の領域ごとに示す。高等学校は各科目別に領域ごとに示す。

<b.知識及び技能の「統合的な理解」>

個別の知識や技能が相互に関連付けられて、一般化され、統合的な理解となった状態である。国語科では、知識及び技能を①運用しながら深める側面、②教養として深める側面に整理し直すことから、それぞれの側面について次のような状態として示す。

- ①言葉の様々な意味や働き、使い方に関する知識や技能を使えば、理解・思考・表現の質を高められる。言葉の知識を、相手や状況、目的に応じて使うことで、理解・思考・表現の質が高まることを児童生徒が理解している状態。
- ②言葉や文字の仕組み、読書、伝統的な言語文化を学ぶ意義や価値を児童生徒が理解している状態。

※高次の資質・能力の具体的なイメージはP.22～30のとおりだが、WGでのイメージをもとに、取りまとめの趣旨を踏まえた分かりやすく使いやすい内容となるよう、引き続き文部科学省で検討すべきである。

4. 内容の改善の在り方①

(1) 内容の充実について ※総授業時数を増加させないことが前提

ア. 「思考力、判断力、表現力等」の整理

補足イメージ④、⑤、
⑥-1、⑥-2、⑦参照

- 今般の改訂の全体方針のもと、これからの社会において必要となる資質・能力を育成する観点から、思考力、判断力、表現力等の事項を整理する必要がある。その際には、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとの「総合的な発揮」の観点から、どのような話や文章を扱い、その中でどのような思考・判断・表現をするのかを具体的に分かりやすく示すことが重要である。
- また、実際の授業では、児童生徒が学習活動の目的を意識できるようにするとともに、複数の単元で出合う様々な話や文章を、表面的な形式の違いにとどまらず、社会的な文脈の中で果たす主な機能という観点から俯瞰的に捉えられるようにすることが重要である。
- このため、「話や文章の機能」を軸に事項を整理し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとに示す。その際、学習活動の過程ごとに細分化せず、学習活動全体を通して、ひとまとまりの思考・判断・表現を深めていく姿をイメージできる示し方をする。

※現行では、学習活動の過程が細分化（例えば、「読むこと」においては、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」など）されており、領域ごとに異なっているため、各領域の学習が個別のものと意識されてしまい、関連付けて学びを深めることが難しい実態があった。今次の改訂においては、次のように再整理することによって、複数の領域で各領域で学ぶ内容が活用されるよう促す。

- 話すこと、書くこと：考えの形成／表現・推敲
- 聞くこと、読むこと：構造と内容の理解・解釈／考えの形成
- 話し合うこと：考えの形成（注）

（注）「話し合うこと」は、「話すこと」と「聞くこと」の学習過程がほぼ同時に往還していると考えられるため、詳細な学習過程は示さない。

話や文章の機能（一部抜粋） ※詳細はp.31

【事実や知識の整理と理解（仮称）】

事物や事象の構造・しくみ・意味・特徴・因果関係などを整理し、筋道立てて分かりやすく示すことを通して、理解を促す機能

【考えや主張の理由付けと吟味（仮称）】

考えや主張を、理由や根拠と結び付けて筋道立てて示すことを通して、判断や納得を促し、必要に応じて考えや行動に働きかける機能

【思いや経験の表出と想像（仮称）】

経験や想像した出来事・情景、思いや心情などを多様な表現の工夫によって描き出すことを通して、想像し、感じたり考えたりすることを促す機能

【協働による考えの深化や合意（仮称）】

他者と協働して互いの考えや情報を出し合い、吟味・調整することを通して、理解や考えを深め、必要に応じて合意形成や意思決定に向かうことを促す機能

※ここでの「話や文章の機能」は、児童生徒が学習で扱う話や文章について、その主な機能を示すものであり、実際の話や文章は、それぞれが上記の機能を複合的に果たしている場合も考えられる。

※国際的な言語教育・リテラシー教育の文献等の中には、話や文章（テキスト）を、その主たる目的や社会的機能に応じて、情報を伝え説明するもの（informative/explanatory等）、論証したり説得したりするもの（argumentative/persuasive等）、現実の又は想像上の経験や出来事などを語ったり描いたりするもの（narrative/imaginative等）を中心的な類型として整理する見方を示すものがある。

4. 内容の改善の在り方②

イ. 「知識及び技能」の整理

補足イメージ⑧-1、⑧-2参照

<a.事項のまとまりによる構造的な整理>

- 1（3）ウ（P.7）で示したとおり、具体的な指導がイメージしやすいように、①運用しながら深める側面、②教養として深める側面の2つの側面で整理をする。
- 「統合的な理解」については、この考え方にに基づき、それぞれの側面に位置付ける内容が、対応する「知識及び技能の統合的な理解」につながるものとなるよう、現行の〔知識及び技能〕の内容を、側面①、②のうち、いずれの性質に主に重点を置くかによって再整理する。その上で、側面①を(1)運用しながら深める事項、側面②を(2)教養として深める事項として位置付ける。
 ※この整理は、相互に排他的な分類を行うものではなく、各事項の主たる性質や指導・評価の重点を明確にするためのものである。
- 学習の効果をより一層高めるため、各事項の内容を再整理する。なお、児童生徒の学びを深める授業づくりに役立てるためには、その性質に応じた関係性や小中高の系統性が分かるように示すことが重要である。
- このような観点から、児童生徒の学びを深める授業づくりに役立てるためには、それぞれの内容を互いに独立した個別のものとして示すのではなく、その性質に応じた関係性や小中高の系統性が分かるように示すことが重要である。そこで、上記のような整理を経て位置付ける内容については、「事項のまとまり」を設けて分類し、構造的に示す。

<各事項の内容の再整理に当たっての考え方>

- 現行の〔知識及び技能〕の事項について、その性質に応じて分割又は統合することが有効なものは、複数の事項に分けて示したり、一つの事項としてまとめたりする。（分割・統合）
- 現行では特定の校種・科目のみに示している〔知識及び技能〕の事項であっても、発達段階に応じて複数の領域の学習過程で繰り返し活用することが有効なものは、小・中・高等学校を通じた系統性を整理して位置付け直す。（系統化）
- 現行では〔知識及び技能〕の事項として明示していないものの、複数の領域の〔思考力、判断力、表現力等〕の事項に共通して含まれる内容のうち、それらの思考・判断・表現の前提となり、繰り返し活用することが有効な知識・技能を明確化し、〔知識及び技能〕の事項として系統的に位置付ける。（明確化）

4. 内容の改善の在り方③

<b.前回改訂からの課題の改善>

- 前回改訂で改善・充実を図った語彙、読書、情報の扱い方、我が国の言語文化に関する授業改善は、全国の学校現場において進められているが、道半ばである。そこで、1.(2)ア(P.4)で示した課題を踏まえ、更なる改善に向けて次のような整理を行う。

➤ 語彙

生成AIが発展する中、人間ならではの実感を持った理解や思考、表現を支える語感を磨き、語彙を豊かにするための学習として、以下の二つの方向性の学習が相互に影響し合って深まるようにする。

- ・ 文脈の中で語句を「使い」ながら、主に語感を磨く学習の充実
- ・ 語句の意味や、語句同士の関係を理解しながら、主に語彙を豊かにする学習の充実

➤ 読書

大きな課題となっている読書習慣の形成については、読書を通して楽しみながら多様な考え方に触れ、自らの考えを広げたり深めたりする経験を重ねることが重要である。そのためには、授業内外をつなぎながら、自立的な読書へと移行していく学習の積み重ねが図られるよう、以下の二つの観点から改善する。

- ・ 読書へのきっかけの創出や動機づけを高める機会の充実
- ・ 自立的な読書への移行を支える学習の充実

その際、司書教諭、学校司書等と連携しながら学校図書館の機能の充実やその計画的な利活用等による学校の教育活動全体における読書環境の整備を併せて進めていくことが重要である。

➤ 情報の扱い方

話や文章に含まれる情報の扱い方については、性質の異なる二つの力（情報と情報との関係を吟味し整理する力、情報の信頼性や妥当性を見極める力）を、発達段階に応じて系統的に示す。

※現在、「総合的な学習の時間・情報の領域（仮称）」、「情報・技術科（仮称）」において、他教科等との内容の整理も含めた情報の扱いに関する内容の位置付け方を検討しているところであり、今後、告示文や解説の検討において扱いを整理していくことが必要。

➤ 我が国の言語文化に関する指導

言語文化の継承・発展については、特に高等学校段階の古典学習に関して、古典を身近で親しみのあるものと捉え、主体的に関心をもつことを重視し、言語文化への理解を深めるため、以下の三つの方向性の学習を充実させる。

- ・ 小中と高等学校の学びの接続強化
- ・ 文語文法及び口語訳への指導の偏りの見直し
- ・ 言語文化への理解を深める学習の充実

<c.知識・技能を円滑に活用するための具体的な手立ての検討>

- 話したり聞いたり、書いたり読んだりする際に、効果的に知識・技能を活用するための具体的な学習方略について、認知心理学などの知見を踏まえ、今後の告示文及び指導要領解説の作成過程において整理して示すことを検討する。

（例えば、文章を読む際に、文章の種類に応じた基本的な構成や展開、段落や場面の捉え方に関する知識・技能等、文章の内容を適切に捉えるために必要となる知識・技能を教育内容として具体的に示すとともに、指導上の留意事項においても詳述する。）

4. 内容の改善の在り方④

ウ. 高等学校における科目構成の見直し 補足イメージ⑨⑩参照

- これからの社会においては、人間ならではの言語能力の育成が必要である（P.6 1.（3）ア）。このような状況を踏まえ、生徒が身に付けるべき資質・能力の明確化を図った現行の基本的な枠組みは維持しつつ、より一層バランスよく今後の社会で必要な力を育成する観点から、論理的思考力、感性・情緒の両面について、二項対立に陥らず、統合的かつ効果的に育成する方向で見直しを行う。

＜必修科目＞

- 現行の枠組みを維持しつつ、科目の特質に即し学習内容を目標で明確に示すことで、指導の更なる充実を図る。
- 実社会で必要な論理的思考力やコミュニケーション能力を中心に育成する科目の「現代の国語Ⅰ」（仮称）、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を中心に育成する科目の「言語文化Ⅰ」（仮称）の二科目を必修科目とする。
- 科目の特質を目標で明確に示し、どの資質・能力の育成に重きを置いているかによって科目を分けているということを明示し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導の充実、言語文化を継承する態度の育成等、各科目での課題改善を引き続き図る。

＜選択科目＞

- 論理的思考力、感性・情緒の両面をバランスよく育成する機会を確保するため、現行の選択科目（「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」）の中から標準的な内容を抽出し組み合わせた、4単位の標準科目を2科目、現行の選択科目の中から発展的な内容を抽出した2単位の発展科目を4科目新設する。
- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を偏りなく学び、主として実社会で必要な論理的思考力やコミュニケーション能力を育成する4単位科目の「現代の国語Ⅱ」（仮称）、古典と近代以降の文章を我が国の言語文化として学び、主として多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する4単位科目の「言語文化Ⅱ」（仮称）を大多数の生徒の履修を想定した選択科目として新設することで、学びの偏りを解消し、資質・能力をバランスよく育成する。
- また、標準的な科目の履修を前提に、より発展的に内容を焦点化して学ぶ選択科目である「論説と批評」（仮称）、「対話と表現」（仮称）、「文学と創作」（仮称）、「古典と文化」（仮称）を2単位で新設することで、生徒の多様な興味・関心、進路選択に応じる科目構成とする。
- 必修科目、選択科目共に、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の資質・能力を「話や文章の機能」によって焦点化して整理する。これにより、小・中学校における学びが基盤となって高等学校への学びに接続していることを明確にするとともに、育成する資質・能力と教材とする文章の種類との関係を明確にし、各科目の趣旨に沿った学びを充実する。
- 各科目の履修順序について、必修科目を1・2年次で分割履修するような場合、2年次目においては、必修科目と選択科目の標準科目を同時に履修できることとする。また、選択科目の標準科目と発展科目についても、必修科目と同様に整理する。

4. 内容の改善の在り方⑤

- 各科目における教材の扱いについて、教材の選定に当たっては、当該科目の趣旨（どのような資質・能力を主に育成しようとしているのか）を踏まえ、基本的な教材を定めるとともに、それ以外の教材については趣旨に合致するかどうかで判断することが重要であるという整理とする。

- 例えば、論理的思考力の育成に重きを置く科目で扱う教材では、論説文や批評文などを中心としつつ、科目の趣旨に合致する活用の仕方であれば文学作品等を扱うことも可能とする。
- 多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力の育成に重きを置く科目も同様に、主に文学作品や古典を中心としつつ、それらに関する論説文や批評文等を扱うことも可能とする。
- 実用文については、「話や文章の機能」に即して指導に適切な文章と判断されるもの（報道文や広告、それらに関する論説文や批評文など）を中心に扱うことを明記する方向とする。

- 「思考力、判断力、表現力等」については、現行では、領域別の学習過程に沿って細分化した事項と、話や文章の種類ごとの言語活動例とを別々に示している。このような細分化による示し方を見直し、「考えや主張の理由付けと吟味」などの「話や文章の機能」を軸として、扱う話や文章の種類と、学習過程で働かせる思考・判断・表現の要素とを一体的に整理して示す。

（例）「書くこと」の領域の場合、「話や文章の機能」のうち「考えや主張の理由付けと吟味」に位置付ける事項では、例えば「意見を述べる文章」という文章の種類と、主張を明確にする、根拠を検討する、論理の展開を考える、表現を工夫するなどの思考・判断・表現の要素を一体的に整理し、一つの事項として示す。

- 「知識及び技能」については、現行の内容を、それぞれの知識・技能の性質や働きを踏まえて見直し、二つの側面に即して重点化して整理する。その際、内容の重なりや指導上の重点が見えにくい部分は、必要に応じて分割・統合し、個別の知識・技能を相互に独立した細切れの内容として扱うのではなく、それぞれの性質や働き、その系統性が明確になるよう内容を精選する。

（例）現行では、「漢字の読みと書き」と「漢字の偏やつくり、由来や特質」は別の内容として示されているが、これらの内容を統合し、文章を読んだり書いたりする際の基盤となる知識・技能として、漢字の構成や意味などと関連付けながら漢字の読み方と書き方を理解し、身に付けられるよう、一つの事項として整理して示す。

（2）内容の精選について

ア. 学習指導要領の内容の精選

- 高次の資質・能力で示す視点を活用しながら、内容面について、以下のように精選を促進する。その際、小学校から高等学校までの学びをつなげ、学年が上がるにつれてより広い話題や、より複雑な文章や資料を扱ったり、より社会的な場面で、国語の力を自分で使ったりできるように系統化して整理することが重要である。

4. 内容の改善の在り方

イ. 教科書における内容の精選

<a.教材等の精選・再構成>

- 現行教科書においても、各教科書発行者の考え方にに基づき、複数の領域を関連付ける構成が部分的に取り入れられている。一方、その関連付けの観点や示し方は、教材等のまとまりや発行者によって異なり、年間を通した学習のつながりが必ずしも明確になっているとは限らない。そこで、こうした既存の構成のよさを生かしつつ、「話や文章の機能」を軸にして相互に関連する教材等を統合的に扱い、精選・再構成することが考えられる。

(例)「論説を読む」「意見文を書く」「提案のスピーチをする」という学習は、領域や具体的な学習活動は異なるが、いずれも「考えや主張の理由付けと吟味」という機能に関わるものとして関連付けて配置することができる。このことにより、主張と根拠との関係など、既に学んだ知識・技能を想起しやすくなり、異なる領域の学習で繰り返し運用しながら、理解を深めやすくなることが期待される。

- その際、同じ「話や文章の機能」に関わる教材等の役割を明確にし、内容の重なりを整理することで、各領域の思考・判断・表現と、それに関連する知識・技能とを効果的に働かせる学習を充実させながら、教科書の内容を精選することが期待される。

<b.「基幹教材」と「関連教材」の明確化>

- 各教材等の役割や扱いの軽重を明確にし、身に付けるべき資質・能力の育成を主として担う「基幹教材」を明確にした上で、各校の教育課程や児童生徒の状況に応じて弾力的に活用できる「関連教材」を位置付けることが考えられる。

(例)「文章の構成や論理の展開を的確に捉える力」の育成をねらいとした場合、主張と根拠との関係、段落相互のつながりや論理の展開が比較的明確な論説等の文章を「基幹教材」として位置付け、同じテーマで構成が異なる論説等の文章や、より複雑な構成・展開をもつ論説等の文章などを、「関連教材」として位置付けることができる。このことにより、「基幹教材」で育成した資質・能力を、「関連教材」で繰り返し働かせて定着を図ったり、発展的に活用して高めたりするなど、学習をより効果的にすることが期待される。

- このように、教材の位置付けを明確に示すことで、学校や児童生徒の状況に応じた指導の重点化が可能になる。また、教育課程の柔軟化の仕組みの下、調整授業時数制度を活用した時数の増減や、高校における単位数の増減を行う場合等においては、当該学年・科目で育成すべき資質・能力と必要な学習内容を確実に保障した上で、「関連教材」の活用程度を調整することにより、効果的な指導が期待できると考えられる。

<c.系統性の明確化による教材の整理>

- 小中高を通じて学びの系統性を明らかにすることで、他校種・他学年との内容の重なりを精査し、それぞれの役割や発展の関係を整理することを促す。なお、繰り返し取り上げることが必要な学習内容については、異なる視点から学ぶことのできる教材を配置するなど、既習事項を活用・発展させる教材の掲載が考えられる。

(例)小学校で行っている学習活動（スピーチをすることや、手紙を書くこと等）と類似した学習活動が中学校や高等学校の教科書においても掲載されている。これらについては、相手や目的、状況、扱う内容、構成や表現の複雑さなどに発達段階に応じた違いが設けられている場合もあるが、既習の学習内容との関係や、各段階で何をどのように活用・発展させるのが、必ずしも明確に示されているとは限らない。

- 上記a～cの取組を教科書発行者に対して促すことにより、教科書の精選を推進する。
- なお、これらの教科書の精選に伴って、教材等に関わる学習の手引きや活動例などについては、内容の理解を促す発問や活動のみに偏重することなく、「話や文章の機能」を踏まえ、育成を目指す資質・能力に即して、各教材等の役割や学習の重点を明確にするとともに、内容の必要性を精査した上で、より効果的に設定することが考えられる。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方①

(1) 学習の基盤となる資質・能力「言語能力」の育成の在り方

補足イメージ⑪⑫参照

<a.教科等横断的な言語能力の育成>

- 教科等横断的な言語能力の育成に向けては、次の三つの柱を一体的に充実させていくことが重要である。
 - 言語環境の整備
 - 国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、言語能力を高めるための学習活動の充実
 - 読書活動の充実

<b.人間ならではの言語能力の育成>

- AIによる言語生成が可能となり、それをSNS等で容易に発信可能な時代だからこそ、言葉の意味を理解し、自らの意思や考えを形成・表現したり、他者の経験・感情を理解したりするといった人間ならではの言語能力を育成することが必要である。

<c.教科書等を読み解く力の確実な育成>

- 各教科等の学習活動の充実を支える「教科書等を読み解く力」の確実な育成に向けては、各教科固有の言語能力に加え、各教科固有の用語や概念の理解などの相乗効果を図ることが重要である。
- その際、基盤となる言語能力の育成の視点から、国語科に限らず各教科等の学習の基盤となる語句に対する児童生徒の理解を促すため、①日常的に用いられる語句、②同じ語でも教科によって意味や使い方が違う語句、③教科特有の意味をもつ語句に関する課題を今後整理し、教科書の改善及び多様な教材開発を促す取組をおこなうことが必要である。

※「教科書等を読み解く力」の育成には、各教科固有の専門的な用語や教科書の構造等の理解、既有的知識等も重要であることに留意

※外国籍・特別な支援を要するなど、多様な背景をもつ児童生徒が学びやすいよう学校全体で配慮・支援する視点を重視

※中等教育では、学習する内容が高度化・抽象化し、各教科等固有の見方・考え方や語彙、表現方法・様式等を用いた思考・判断・表現が不可欠となることから、各教科等の内容に関連付けた指導が一層重要になると考えられる。(数と式による証明、音楽や美術の専門的な用語を用いた鑑賞、理科での専門的な実験の記録や報告、道徳的価値の理解を深める議論など)

- これらのことから、国語科の学びと各教科等の学習活動の充実との関係を整理することにより、教育課程全体を通じた言語能力の育成を一層推進する。

(2) ICTの活用等

- 国語科においては、現在においても、話や文章から取り出した情報や既有的知識、事実等を構造的に整理し、その関係を明確にして考えをまとめたり深めたりする学習に取り組んでいる。一方で、生成AIの飛躍的な発展に伴い、日々の情報収集もインターネットやSNSが中心となり、報道を含む多面的・多角的な情報収集が行われなくなっている。
- このような中、生成AIを含むICTの活用については、発達段階を踏まえつつ、児童生徒が学習の目的に応じて情報や生成AIの出力を比較・吟味し、自ら考え、判断し、表現した内容を自らの言葉で説明し責任を持つことができるようにすることを基本とし、一層効果的に利活用することが重要である。
- その際、評価においては、収集した情報の信頼性や妥当性を確かめた上で、それらを活用して自ら思考・判断・表現できているかという観点により一層重視することを当面の基本的考え方とする。

※更なる技術の進展等、情報技術の変動性や陳腐化の可能性を踏まえた対応を行う必要があることにも留意。

- なお、ローマ字の学習は、現行どおり国語科において小学校第3学年で行うこととしつつ、ローマ字入力によるタイピングについては、「総合的な学習の時間・情報の領域（仮称）」を中心に学習を行うこととする。(このような学習を通じて、児童のローマ字の更なる習熟が図られることが見込まれる。)
- また、ICTの活用は、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことといった活動において、児童生徒の特性に応じた学習を展開する上で有効である。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方②

(3) 書写

- 書写については、デジタル学習基盤の下でタイピング等による文字入力が増える中であっても、文字を正しく認識し、正確に書く力を身に付けるとともに、我が国の文字文化について実感を伴って理解を深める観点は重要であることから、小中学校段階における書写の指導を引き続き重視する。その際、書字能力は全ての学びを支える基礎であり、その確実な定着が不可欠であることから、とりわけ小学校では、手書きによる書写の丁寧な指導を推進する。
- 文字を手で書いて学ぶことの指導に当たっては、字形や点画、筆順、文字の組立て方などに注意しながら、文字を正しく認識し、整えて書く力を育てるものであることを踏まえる必要がある。その際、以下の点について留意が必要である。
 - 未知語や新出漢字の習得、漢字の成り立ちや文字のもつ意味・文化性への関心と関連付けるなど、各学習内容を結び付けて指導すること。
 - 特に書字に困難さがある児童生徒（※）については、デジタル学習基盤の活用や代替措置の積極的な提供を含め、一人一人の特性を踏まえて指導を行う必要があることを明確にすること。
 - 書写における評価対象としての「文字を整えて書く力」と、表現の手段としての筆記は適切に区別し、評価に当たっては、課題のねらいに照らして何を評価するのかを明確にすること。

※上記以外にも、学習面や行動面で困難を有する児童生徒がいることを踏まえた対応が必要。

(参考)

小中学校全体（約892万人）のうち、学習面又は行動面で著しい困難を有する児童生徒は、約8.8%。（令和4年度通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果）

(4) 柔軟な教育課程の編成・実施

＜義務教育段階における調整授業時数の活用＞

- 教育課程企画特別部会の論点整理では、多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程編成を促進するため、児童生徒や地域の実態を踏まえて、義務教育段階の教育課程の柔軟化が提言されている。そのうち学校として編成する教育課程の柔軟化（調整授業時数制度）については、国語科も時数の調整を可能とする方向で検討されている。
- 調整授業時数の活用により実施する「裁量的な時間」については、以下の2類型が示されている。
 - ✓ 「裁量的な時間（学習枠）」＝学習指導要領に定める教科等に該当しないものの、児童生徒の資質・能力の育成に特に資する効果的な教育プログラム等
 - ✓ 「裁量的な時間（研究・研修等枠）」＝教育の質の向上を目的とした授業や指導の改善に直結する組織的な研究・研修等
- これらの活用により、国語科に資する取組としては、例えば次のような取組が考えられるところであり、地域や学校、児童生徒の特性に応じた多様な教育活動の展開が期待される。

（学習枠の活用例）

- ・ 総合的な学習の時間の探究学習において、調べたことや自分の考え等を話したり聞いたり、書いたり読んだりする場面で、国語科で学習したことを生かして実践的に取り組む等、合科的・関連的な指導（例えば、地域の方言について、文献による調査や地域の方々へのインタビュー等を通じた探究により、そのよさや意義について理解を深める学習。）
- ・ 国語への興味・関心をより高めたり、基礎学力を保障したり、自己調整のスキルを高めたりする観点から、学習でよく用いる語句に関する理解を深めるための学習プログラム、辞書を用いた語彙指導プログラム、認知心理学の知見に基づき読解力を向上させるプログラム、学校全体で取り組む読書活動の推進の一環として行う書評合戦（ビブリオバトル）や読書会等、表現力やコミュニケーション力を高めるためのプログラム（演劇、伝統芸能、文芸創作に関する活動、show & tell等）の取組が行われることも考えられる。

（研究・研修等枠の活用例）

- ・ 国語科の単元構想づくりや実践的な授業・教材研究、学校種をまたいだ国語教育の研究・協議
- こうした取組については、既に教育課程特例校やサキドリ研究校において先行的に取り組まれていることから、好事例について国が収集・周知することが期待される。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方③

<義務教育段階における学年区分を超えた教育課程の編成・実施>

- 論点整理では、学習内容の学年区分について以下のとおり提言されている。
 - 教科の系統性や発達段階を踏まえた指導内容を確保する役割を果たしており、教科書作成などの観点からも、引き続き一定の記載は必要
 - その上で、児童生徒の実態に応じて必要があると判断する場合は、学年区分に囚われず柔軟に教育課程の編成・実施が可能であることを明確化すべき
- これを受けた総則・評価特別部会では、以下の方向で検討がされている。
 - 想定する指導学年を明示する場合は○学年相当という形で示す
 - 学年区分を示す場合であっても、児童生徒の実態に応じて必要があると学校が判断する場合は、学年区分にとらわれず柔軟に指導が可能である旨を明示的に示す
- 国語においても、発達段階を踏まえた学年区分は引き続き一定示しつつも、学年を超えた指導時期の前倒し・後ろ倒しを認めることにより、ある程度まとまった時間をつくりだすことが容易になり、その時間で、定着に課題のある内容の学び直しなどを実施することができる。なお、適切な学年区分の示し方や領域等に配当する時数の目安の示し方については、告示文を整理する中で検討する。
- 高等学校については、今般の教育課程の柔軟化の仕組み（単位の倍化、増単・減単をきめ細かく可能とする等）の下で、国語科の諸科目の取扱いについては、多様性の包摂の観点も含め、総則・評価特別部会での議論を踏まえ、告示文での示し方を検討する。

(5) 学習評価の在り方

補足イメージ⑬参照

- 〔思考力、判断力、表現力等〕の事項については、児童生徒が学習に取り組んでいる過程では、関連する〔知識及び技能〕の学習状況に留意しつつ、形成的評価を行い、児童生徒の学習改善等に生かすことが重要である。その上で、児童生徒が単元の学習の成果として思考・判断・表現しているパフォーマンスについて、〔思考力、判断力、表現力等〕の事項の要素が総合的に発揮されているかどうかという視点から、総括的評価を行うことなどが考えられる。
- 〔知識及び技能〕(1)運用しながら深める事項については、各領域の単元における思考・判断・表現の過程で活用できているかという点から形成的評価を行うことに重点を置き、その単元や別の単元での学習の改善に生かせるようにすることが重要である。その上で、それらの複数の単元での学習を経た後、総括的評価を行う場面を設けることなどが考えられる。
- 〔知識及び技能〕(2) 教養として深める事項については、それぞれの知識や技能を機械的に習得する学習に偏らないようにし、試行錯誤を伴う学習活動や、実際にその知識や技能を使う場面を想定した学習活動を設定し、学習活動の過程で形成的評価を行い、児童生徒に対して理解の深まりを促すことが重要である。その上で、単元の終末や学期末等に評価場面を設け、総括的評価を行うことなどが考えられる。

※上記は、基本的な考え方のイメージであり、総括的な評価の実施の仕方については、児童生徒の発達段階や学校の実態に応じて様々な実践上の工夫が考えられる。

国語科における目標や内容の全体構造（改訂後のイメージ）

目標

①

国語科で育成したい資質・能力の趣旨を学校種共通で端的に示す

①目標の柱書（p.20、21参照）

②

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
資質・能力の柱ごとの目標（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）は、発達段階に応じて学校種ごとに系統的に示す		

②資質・能力の柱ごとの目標（p.20、21参照）

③見方・考え方（p.20参照）

④高次の資質・能力（p.22～30参照）

⑤個別の資質・能力（p.22～28参照）

（見方・考え方）

③

●●（当該教科で扱う事象や対象）を●●（当該教科固有の物事を捉える視点）の視点から捉え（に着目して捉え）、●●（当該教科固有の考え方や判断の仕方）すること。

※「B書くこと」、「C読むこと」の領域も同様に、「思考力、判断力、表現力等」と「知識及び技能(1)」の内容をひとまとまりとして示し、その下に「知識及び技能(2)」の内容を示す。
※話や文章の機能、事項のまとまりのそれぞれの名称は仮称。

内容

④

思考力、判断力、表現力等	A話すこと・聞くこと 思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
	相手や状況、目的に応じて、「話や文章の機能」ごとに位置付けた思考・判断・表現の力を総合的に発揮している状態を示す
知識及び技能	(1)運用しながら深める事項 知識及び技能に関する統合的な理解
	言葉の知識を、相手や状況、目的に応じて使うことで、理解・思考・表現の質が高まることを生徒が理解している状態を示す
知識及び技能	(2)教養として深める事項 知識及び技能に関する統合的な理解
	言葉や文字の仕組み、読書、伝統的な言語文化を学ぶ意義や価値を生徒が理解している状態を示す

⑤

	第1学年相当	第2学年相当	第3学年相当
話や文章の機能 (p.31参照)	・XXXXXXXX	・XXXXXXXX	
	・XXXXXXXX	・XXXXXXXX	
	・XXXXXXXX	・XXXXXXXX	
事項のまとまり (p.36、37参照)	・XXXXXXXX		
	・XXXXXXXX		
	・XXXXXXXX		
⋮			
事項のまとまり (p.36、37参照)	・XXXXXXXX	・XXXXXXXX	
	・XXXXXXXX		
	・XXXXXXXX		

※目標（①②）、見方・考え方（③）、内容（④⑤）については、WGでの議論を踏まえ、告示までに文部科学省において引き続き一層分かりやすいものになるよう検討する。

国語科における教科の目標、見方・考え方（案）

目標

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
柱書	国語で理解し、考え、表現する資質・能力について、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことを通して、次のとおり育成することを目指す。		
小学校	日常生活に必要な国語の特質を理解し適切に使うとともに、我が国の言語文化に触れながら親しむことができるようにする。	国語で筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における他者との関わりの中で、互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し、伝え合う過程に気を付けながら、学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を育み、我が国の言語文化に触れ、国語を尊重する態度を養う。
中学校	社会生活に必要な国語の特質を理解し適切に使うとともに、我が国の言語文化に親しみながら理解できるようにする。	国語で論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を養い、社会生活における他者との関わりの中で、互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し、伝え合う過程を確かめながら、学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重する態度を養う。
高等学校	生涯にわたる社会生活に必要な国語の特質を深く理解し適切に使うとともに、我が国の言語文化を理解できるようにする。	国語で論理的に考える力、深く共感したり豊かに想像したりする力、生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で、互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し、伝え合う過程を吟味しながら、学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、国語を尊重する態度を養う。

見方・考え方

自分や他者の言葉を、意味や働き、使い方や表現の意図に着目して多面的・多角的に吟味し、多様な立場や考えを理解して、丁寧に言葉を選び、よりよく伝え合うこと

（修正案）

様々な事象を表す言葉を、その意味や働き、使い方に着目して吟味し、多様な立場や考えを理解して、よりよく伝え合おうとすること

※具体の文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

国語科の目標（※小中高共通）

柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
生涯にわたる社会生活に必要な国語の特質を深く理解し適切に使うとともに、我が国の言語文化を理解できるようにする。	国語で論理的に考える力，深く共感したり豊かに想像したりする力，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。	①考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。 ②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。

現代の 国語Ⅰ （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け、適切に使えるようにする。	国語で論理的に考える力や，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高める。
現代の 国語Ⅱ （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け、効果的に使えるようにする。	国語で論理的に考える力や，生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を高め、発揮する。
論説と 批評 （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	学術的な学びの基礎に係る事柄に関する国語の知識や技能を身に付け、効果的に使えるようにする。	国語で論理的に考える力を高め，他者や自己の思考の妥当性を吟味する力を養う。
対話と 表現 （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，話すこと・聞くこと，書くことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	多様な他者との多角的な関わりに必要な国語の知識や技能を身に付け、効果的に使えるようにする。	生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で互いの立場や考えを尊重しながら伝え合う力を発揮し，様々な媒体を通して言葉で他者と協働する力を養う。
言語 文化Ⅰ （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け適切に使うとともに，我が国の言語文化を広く理解できるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力を高め，先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を養う。
言語 文化Ⅱ （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け効果的に使うとともに，我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力や，先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を高める。
文学と 創作 （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，書くこと，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	創作に係る事柄に関する国語の知識や技能を身に付け、効果的に使えるようにする。	国語で深く共感したり豊かに想像したりする力を高め，創造的に考える力を養う。
古典と 文化 （仮称）	目標の柱書：国語で理解し，考え，表現する資質・能力について，読むことを通して，次のとおり育成することを目指す。	
	古典の文章の理解や表現に関する国語の知識や技能を身に付け使うとともに，我が国の言語文化を深く理解できるようにする。	先人のものの見方，感じ方，考え方との関わりの中で古典の意義や価値について考える力を高め，現代における価値を創出する力を養う。

①様々な文章に触れて考えたり感じたりしたことを自ら進んで表現し，理解や解釈、考え、表現の工夫を伝え合う過程を吟味しながら，学びの質を高めようとする態度を養う。
②言語感覚を磨き，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，国語を尊重する態度を養う。

資質・能力全体構造（案）

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごとの
の思判表と一体的に示す

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごとの
の思判表と一体的に示す

A 話すこと・聞くこと			
小学校	思考力・判断力・表現力等	総合的な発揮	
		相手や状況、目的に応じて、話し方・聞き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えとともに、他者とのやり取りを通して自分の考えを捉え直し、広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解／考えや主張の理由付けと吟味
			・紹介や説明、報告などをする ・主張や提案などをする ・説明や報告、主張などを聞いて、感想を伝えたり自分の考えをもったりする
		協働による深化や合意	
		・尋ねたり応答したり、話し合いの進行を工夫したりするなどして、互いの発言を関連付けて考えをまとめる	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解
			事項のまとめ
			内容項目例
			日常生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
			話や文章の構造
			・話の構成や展開、話の種類とその特徴 ・段落の役割、場面の設定
			表現の仕方
			・音節と文字との関係、アクセントや抑揚、間の取り方 ・比喩や反復などの表現の工夫 ・引用の仕方 ・描写の仕方、図表の用い方
			情報と情報との関係
			・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方
			情報の信頼性
			・発信元や発信時期の確認、初歩的な情報の信頼性の確かめ方

B 書くこと			
小学校	思考力・判断力・表現力等	総合的な発揮	
		相手や状況、目的に応じて、文章の書き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えることができる。	事実や知識の整理と理解
			・記録や説明、報告などの文章を書く
			考えや主張の理由付けと吟味
			・理由に基づいて意見を述べる文章を書く
		思いや経験の表出と想像	
		・経験や想像したことを基に思いや感動を伝える文章を書く	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解
			事項のまとめ
			内容項目例
			日常生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。
			話や文章の構造
			・文章の構成や展開、文章の種類とその特徴 ・段落の役割、場面の設定
			表現の仕方
			・比喩や反復などの表現の工夫 ・引用の仕方 ・描写の仕方、図表の用い方
			情報と情報との関係
			・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方
			情報の信頼性
			・発信元や発信時期の確認、初歩的な情報の信頼性の確かめ方

資質・能力全体構造（案）

				C 読むこと		
小学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例	領域ごとに示す 共通の内容を、領域ごと の思判表と一体的に示す
			状況や目的に応じて、文章の読み方を工夫することにより、理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解／考えや主張の理由付けと吟味	・説明や解説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ	
				思いや経験の表出と想像	・文学的な文章の内容を理解して自分の考えをもつ	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	
			日常生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、状況や目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	文字や単語の同定（音読）	・音読、朗読	
				話や文章の構造	・文章の構成や展開、文章の種類とその特徴 ・段落の役割、場面の設定	
				表現の仕方	・音節と文字との関係 ・比喻や反復などの表現の工夫、引用の仕方 ・描写の仕方、図表の用い方	
				情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方	
				情報の信頼性	・発信元や発信時期の確認、初歩的な情報の信頼性の確かめ方	
	知識及び技能	(2)教養として深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	共通の内容を、各領域とは別に全体を支える形で示す
			幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値に気付くことが、自己の形成、日常生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。	言葉のきまりや使い方	・言語が共通にもつ言葉の働き ・書き言葉と話し言葉 ・漢字を読む、漢字を書く、漢字の構成 ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにする ・敬語の働き、相手や場に応じた言葉遣い ・時代による言葉の違い、地域や世代による言葉の違い	
				伝統的な言語文化	・伝統的な言語文化に親しむ ・古典に表れたものの見方や考え方	
				書写	・文字の書き方、姿勢、筆記具の持ち方、選び方、筆順 ・文字文化を親しむ	
				読書	・選書の仕方、読書の意義や効用の実感 ・読書計画の立て方、読書記録の取り方	

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごとの
思判表と一体的に示す

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごと
の思判表と一体的に示す
24

A 話すこと・聞くこと

		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例
中学校	思考力・判断力・表現力等	相手や状況、目的に応じて、話し方・聞き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えるとともに、他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し、広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解	・説明や解説などをする
			考えや主張の理由付けと吟味	・説明や解説、主張などを聞いて自分の考えをもつ
				・根拠に基づいて主張などを述べる
			協働による深化や合意	・進行を工夫し互いの発言を関連付けて考えをまとめる
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	
			社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	事項のまとめ
			話や文章の構造	・文の成分の順序や照応など文の構成 ・話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴 ・段落の構造 ・場面の設定
			表現の仕方	・分かりやすく明瞭な話し方 ・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果（古典等の一節の引用を含む） ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・図表の用い方や効果
			情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方
			情報の信頼性	・情報の信頼性の確かめ方

B 書くこと

		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例
中学校	思考力・判断力・表現力等	相手や状況、目的に応じて、文章の書き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えることができる。	事実や知識の整理と理解	・説明や解説などの文章を書く
			考えや主張の理由付けと吟味	・根拠に基づいて主張する文章などを書く
			思いや経験の表出と想像	・経験や想像したことを基に思いや感動を伝える文章などを書く
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	
			社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	事項のまとめ
			話や文章の構造	・文の成分の順序や照応など文の構成 ・話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴 ・段落の構造 ・場面の設定
			表現の仕方	・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果（古典等の一節の引用を含む） ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・図表の用い方や効果
			情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方
			情報の信頼性	・情報の信頼性の確かめ方

				C 読むこと		
中学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例	領域ごとに示す
			状況や目的に応じて、文章の読み方を工夫することにより、理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解	・説明や解説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ	
				考えや主張の理由付けと吟味	・論説などの文章の内容を理解して自分の考えをもつ	
				思いや経験の表出と想像	・文学的な文章の内容を理解して自分の考えをもつ	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	共通の内容を、領域ごと の思判表と一体的に示す
			社会生活に必要な言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、状況や目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造	・文の成分の順序や照応など文の構成 ・話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴 ・段落の構造 ・場面の設定	
				表現の仕方	・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果（古典等の一節の引用を含む） ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・図表の用い方や効果	
				情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方	
				情報の信頼性	・情報の信頼性の確かめ方	
中学校	知識及び技能	(2)教養として深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	共通の内容を、各領域とは別に全体を支える形で示す
			幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を捉えることが、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。	言葉のきまりや使い方	・言語が共通にもつ言葉の働き ・書き言葉と話し言葉 ・漢字の読み方・書き方、漢字の構成 ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにする ・単語の類別、単語の活用、助詞や助動詞などの働き ・敬語の働き、相手や場に応じた言葉遣い ・時代による言葉の違い、地域や世代による言葉の違い	
				伝統的な言語文化	・音読するなどして言葉の響きや伝統的な言語文化の世界に親しむ ・古典に表れたものの見方や考え方	
				書写	・楷書や行書の書き方 ・文字言語の豊かさに触れながら効果的に文字を書く	
				読書	・選書の仕方、自らの興味・関心等に応じた自立的な読書	

資質・能力の全体構造 (案)

		A 話すこと・聞くこと			
高等学校	思考力・判断力・表現力等	総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例	
		相手や状況、目的に応じて、話し方・聞き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えるとともに、他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し、広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解	・説明や解説などをする	
			考えや主張の理由付けと吟味	・説明や解説、主張などを聞き、質問したり反論したりする	
				・根拠に基づいて意見や主張を述べる	
	協働による深化や合意	・実社会の中から話題を決め、話し合いの種類や目的に応じて結論の出し方を工夫する ・論点を共有し、考えを広げたり深めたりする			
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例
			実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造	・文、話、文章の構成や特徴 ・段落の構造
				表現の仕方	・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果 ・図表の用い方や効果
情報と情報との関係				・情報と情報との関係・情報の整理	
情報の信頼性	・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方				

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごと
の思判表と一体的に示す

B 書くこと				
高等学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能 内容項目例
			相手や状況、目的に応じて、文章の書き方を工夫することにより、考えを論理的に伝えることができる。	事実や知識の整理と理解 ・説明や解説を述べる文章を書く
			考えや主張の理由付けと吟味	・意見や考えを論述する
			統合的な理解	事項のまとめ 内容項目例
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造 ・文、話、文章の構成や特徴 ・段落の構造
			表現の仕方	・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果 ・図表の用い方や効果
			情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理
			情報の信頼性	・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごと
の思判表と一体的に示す

資質・能力の全体構造（案）

			C 読むこと		
高等学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例
			状況や目的に応じて、文章の読み方を工夫することにより、理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。	事実や知識の整理と理解	・説明や解説が述べられている文章の内容を理解して、自分の考えをもつ
				考えや主張の理由付けと吟味	・主張や意見が述べられている文章の内容を理解して、自分の考えをもつ
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとまり	内容項目例
			実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、状況や目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造	・文、話、文章の構成や特徴 ・段落の構造
				表現の仕方	・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果 ・図表の用い方や効果
				情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理
				情報の信頼性	・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方

領域ごとに示す
共通の内容を、領域ごと
の思判表と一体的に示す

高等学校	知識及び技能	(2)教養として深める事項	統合的な理解	事項のまとまり	内容項目例
			幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。	言葉のきまりや使い方	・言語が共通にもつ言葉の働き ・話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色 ・漢字の読みと書き ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにする ・敬語を含め広く相手や場に応じた表現や言葉遣い ・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化
				読書	・選書の仕方、自らの興味・関心等に応じた自立的な読書

共通の内容を、各領域とは別に全体を支える形で示す

資質・能力の全体構造（案）

				A 書くこと		
高等学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例	
			相手や状況、目的に応じて、文章の書き方を工夫することにより、思いを感性豊かに伝えることができる。	思いや経験の表出と想像	・自分の知識や経験を基に、思いや経験、想像したことを伝える文章を書く	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	
			我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、相手や状況、目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造 表現の仕方	・文、話、文章の構成や特徴 ・場面の設定 ・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・情景や心情、行動などの描写の仕方	
				B 読むこと		
高等学校	思考力・判断力・表現力等		総合的な発揮	話や文章の機能	内容項目例	
			状況や目的に応じて、文章の読み方を工夫することにより、理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。	思いや経験の表出と想像 伝統的な言語文化の継承と創造	・経験や想像したこと、感じたことを表した文章を読み、自分の考えをもつ ・古典としての古文や漢文、我が国の伝統や文化に関連する文章を読み、我が国の言語文化について自分の考えをもつ	
	知識及び技能	(1)運用しながら深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例	
			我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き、使い方等を身に付け、状況や目的に応じて使うことにより、理解や思考、表現の質が高まることを理解している。	話や文章の構造 表現の仕方 古典を読むための言葉のきまり	・文、話、文章の構成や特徴 ・場面の設定 ・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・文語のきまりや訓読、古典特有の表現	
	高等学校	知識及び技能	(2)教養として深める事項	統合的な理解	事項のまとめ	内容項目例
幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが、自己の形成、社会生活の向上、文化の創造と継承につながることを理解している。				言葉のきまりや使い方 伝統的な言語文化 読書	・言語が共通にもつ言葉の働き ・話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色 ・漢字の読みと書き ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにする ・敬語を含め広く相手や場に応じた表現や言葉遣い ・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化 ・我が国の文化と外国の文化との関係 ・我が国の文化・言語文化の特質 ・作品の歴史的・文化的背景 ・伝統的な言語文化に親しむ ・選書の仕方、自らの興味・関心等に応じた自立的な読書	

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごとの一体的に示す

領域ごとに示す

共通の内容を、領域ごとの一体的に示す

共通の内容を、各領域とは別に全体を支える形で示す

※ 具体的な文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

			話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語Ⅰ（仮称）	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いをよりよく伝えとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えを論理的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項（１）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項（２）	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
現代の国語Ⅱ（仮称）	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，考えや思いを効果的に伝えとともに，他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し，広げ深めることができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えを論理的かつ効果的に伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解したことを踏まえて自分の考えを吟味し再考することができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項（１）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	実社会で必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項（２）	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		
論説と批評（仮称）	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮			相手や状況，目的に応じて，考えや意見を効果的に論述することができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，他者の思考の妥当性を吟味し，自分の考えを省察することができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項（１）		学術的な学びの基礎に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	学術的な学びの基礎に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項（２）		幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
対話と表現（仮称）	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，話し方・聞き方を工夫することにより，効果的に対話し他者と協働することができる。	相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより，考えや思いを効果的に表現することができる。	
	知識及び技能の統合的な理解	事項（１）	多様な他者との多角的な関わりが必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	多様な他者との多角的な関わりが必要となる言葉の様々な意味や働き，使い方を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。（再掲）	
		事項（２）	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。		

※ 具体的な文言は今後告示文を検討する中で引き続き精査

			書くこと	読むこと
言語文化Ⅰ (仮称)	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより， 思いを感性豊かに 伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを 広げ深める ことができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項(1)	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項(2)	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
言語文化Ⅱ (仮称)	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて，文章の書き方を工夫することにより， 思いを感性豊かにかつ効果的に 伝えることができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて 批評し ，自分の考えを 広げ深める ことができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項(1)	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	我が国の言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項(2)	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
文学と創作 (仮称)	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮		相手や状況，目的に応じて， 思いをもとに言葉で豊かに創作 することができる。	状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて 批評し ，自分の考えを 吟味し再考 することができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項(1)	創作に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，相手や状況，目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。	創作に係る事柄に関する言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項(2)	幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。	
古典と文化 (仮称)	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮			状況や目的に応じて，文章の読み方を工夫することにより，理解や解釈したことを踏まえて 古典の価値を見出し ，自分の考えを 広げ深める ことができる。
	知識及び技能の統合的な理解	事項(1)		我が国の伝統的な言語文化に関わる言葉の様々な意味や働き，使い方等を身に付け，状況や目的に応じて使うことにより，理解や思考，表現の質が高まることを理解している。
		事項(2)		幅広く多様な言葉に触れ蓄えながら我が国の言語文化のもつ意義や価値を深く捉えることが，自己の形成，社会生活の向上，文化の創造と継承につながることを理解している。

「話や文章の機能」による整理イメージ

- 高次の資質・能力である「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」の育成に当たっては、児童生徒が複数の単元で出会う様々な話や文章を、社会的な文脈の中で果たす主な機能という観点から捉えられるようにすることが重要。
- 話や文章の種類の整理を、社会的な文脈の中で果たす主な機能という観点から捉え直し、「話や文章の機能」として整理する。

話や文章の機能	社会的な文脈の中で果たす主な機能	話や文章の種類（例）	話や文章の機能を踏まえた思考・判断・表現の要素（イメージ）
事実や知識の整理と理解 （仮称）	事物や事象の構造・しくみ・意味・特徴・因果関係などを整理し、筋道立てて分かりやすく示すことを通して、理解を促す機能	・説明や解説をする話（紹介、報告、説明、解説など） ・説明や解説をする文章（報告文、記録文、説明文、解説文など）	・相手や目的に応じて重要な情報を見極めて関係を整理し、構成や表現の仕方を工夫して伝える。 ・内容を理解し、既存の知識や経験と関係付けながら意味付けたり考えたりする。
考えや主張の理由付けと吟味 （仮称）	考えや主張を、理由や根拠と結び付けて筋道立てて示すことを通して、判断や納得を促し、必要に応じて考えや行動に働きかける機能	・主張や提案を述べる話（主張、提案など） ・意見、主張や提案を述べる文章（論説、批評など）	・考えや主張を支える理由や根拠を組み立て、相手や目的に応じて構成や表現の仕方を工夫して伝える。 ・考えや主張と理由・根拠との関係を捉え、その妥当性を判断し、納得したり批判的に検討したりする。
思いや経験の表出と想像 （仮称）	経験や想像した出来事・情景、思いや心情などを多様な表現の工夫によって描き出すことを通して、想像し、感じたり考えたりすることを促す機能	・経験や想像したこと、感じたことを表す文章（詩、短歌、俳句、随筆、物語、小説など）	・経験や思い、想像した世界を、目的に応じて、構成、語り方、描写、技法などを工夫して描き出す。 ・目的に応じて、表現された内容を想像し、意味付けたり考えたりするとともに、解釈や評価を深める。
協働による考えの深化や合意 （仮称）	他者と協働して互いの考えや情報を出し合い、吟味・調整することを通して考えを深め、必要に応じて合意形成や意思決定に向かうことを促す機能	・質疑応答、議論や討論などの話し合い	・自分の考えや情報を伝え合うとともに、他者とやり取りしながら考えを修正・補強して深める。 ・互いの考えの共通点や相違点を捉えて整理し、折り合いを付けたり方向付けたりする。
伝統的な言語文化の継承と創造 （仮称）	時代を越えて先人の知や洗練された言語感覚を伝えることを通して、その重要性を理解し、意義や価値を現代に生かすことを促す機能	・近世までに書かれた文章（古文・漢文など）	・作品の内容や解釈を踏まえ、自分の考えを深め、伝統的な言語文化について自分の考えをもつ。 ・古典の意義や価値を理解し、現代における新たな価値の創出について考える。

※「話や文章の種類（例）」は、現行学習指導要領の〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の(2)で示している言語活動例を基に概略のみを示している。

※実際の話や文章は、それぞれが上記の機能を複合的に果たしている場合も考えられる。一方、ここでの「話や文章の機能」は、児童生徒が学習で扱う話や文章について、その主な機能を示すものであり、これらの「話や文章の機能」と関連付けながら学習指導要領の内容項目を整理・構造化することをねらいとしている。

各領域の学習過程の再整理

- 各領域の学習過程を相互に関連付けて再整理し、共通する要素や異なる要素を意識しやすいよう構造的に示すことにより、各領域で学ぶ内容が複数の領域で活用されていくことを促し、思考・判断・表現を深める指導につなげる。

現行



再整理

領域	理解				表現
	読むこと	話すこと・聞くこと			書くこと
		聞くこと	話し合うこと	話すこと	
学習過程	構造と内容の把握	話題の設定 情報の収集	話題の設定 情報の収集	話題の設定 情報の収集	題材の設定 情報の収集
	精査・解釈	構造と内容の把握	内容の検討	内容の検討	内容の検討
	考えの形成	精査・解釈 考えの形成	話合いの進め方の検討 考えの形成	構成の検討 考えの形成	構成の検討 考えの形成
	共有	共有	共有	表現 共有	記述 推敲 共有

領域	読むこと	話すこと・聞くこと			書くこと
		聞くこと	話し合うこと	話すこと	
学習過程	構造と内容の理解・解釈 ・構造を理解する ・内容を解釈する	構造と内容の理解・解釈 ・構造を理解する ・内容を解釈する	考えの形成 ・情報を収集する ・情報を整理する	考えの形成 ・内容を検討する ・構成を検討する	考えの形成 ・内容を検討する ・構成を検討する
	考えの形成 ・内容を評価し熟考する ・形式を評価し熟考する	考えの形成 ・内容を評価し熟考する ・形式を評価し熟考する		表現・推敲 ・発話する ・発話を調整する	表現・推敲 ・記述する ・文章を推敲する

「話や文章の機能」と事項のイメージの関係について

- 「話や文章の機能」ごとに、「①話や文章の種類」、「②学習過程で働かせる資質・能力」の要素に基づき、事項を作成することを想定している（※中学校2年相当を例示）。

話すこと・聞くこと

〈話すこと〉

話や文章の機能	①話や文章の種類	②学習過程で働かせる資質・能力の要素	
		考えの形成	表現・推敲
事実や知識の整理と理解（仮称）	説明や解説をする	- 社会生活の中から話題を決め、伝えたい事実や事柄を整理する - 整理した事実や事柄の意味や関係が明確になるように論理的な構成や展開を考える	- 聞き手が理解できるように表現を工夫する - 聞き手の反応に応じて表現を調整する
考えや主張の理由付けと吟味（仮称）	主張や提案を述べる	- 社会生活の中から題材を決め、自分の主張や提案を明確にする - 自分の主張や提案と根拠、異なる立場との違いが明確になるように論理的な構成や展開を考える	- 目的や状況に応じて聞き手が納得できるように表現を工夫する - 聞き手の反応に応じて表現を調整する

〈聞くこと〉

話や文章の機能	①話や文章の種類	②学習過程で働かせる資質・能力の要素	
		構造と内容の理解・解釈	考えの形成
事実や知識の整理と理解（仮称）	説明や解説をする	情報同士の関連、論理の展開などに注意して記録したり質問したりしながら話の内容を理解する	- 話の内容に対する自分の考えを広げたり深めたりする - 論理の展開や表現の仕方を評価する
考えや主張の理由付けと吟味（仮称）	主張や提案を述べる		

〈話し合うこと〉

話や文章の機能	①話や文章の種類	②学習過程で働かせる資質・能力の要素
		※「話し合うこと」は、「話すこと」と「聞くこと」の学習過程がほぼ同時に往還していると考えられるため、詳細な学習過程は示していない。
協働による考えの深化や合意（仮称）	合意形成に向けた話し合い	- 社会生活の中から話題を決める。 - 異なる立場や意見の背景を理解しながら合意形成に向けて話し合いを進める。 - 考えをまとめたり広げたり深めたりする。

※表中の「①話や文章の種類」「②学習過程で働かせる資質・能力の要素」は現時点でのイメージであり、告示文を整理する中で検討。

※学校種・学年ごとに示す「話や文章の種類」は、対象とする話題や題材等の内容が発達段階に適したものとなるように事項の文言で示すことや「指導計画の作成と内容の取扱い」等で例示することが考えられる。

書くこと

話や文章の機能	①話や文章の種類	②学習過程で働かせる資質・能力の要素	
		考えの形成	表現・推敲
事実や知識の整理と理解 (仮称)	説明や解説をする文章	- 社会生活の中から題材を決め、伝えたい事実や事柄を整理する - 整理した事実や事柄の意味や関係が明確になるように論理的な構成や展開を工夫する	- 読み手が理解できるように表現を工夫して記述する - 相手や状況、目的に応じた表現になるように整える
考えや主張の理由付けと吟味 (仮称)	意見を述べる文章	- 社会生活の中から題材を決め、自分の意見を明確にする - 自分の意見と根拠、異なる立場との違いが明確になるように論理的な構成や展開を工夫する	- 読み手が納得できるように表現を工夫して記述する - 相手や状況、目的に応じた表現になるように整える
思いや経験の表出と想像 (仮称)	経験や想像したこと、感じたことを表す文章	- 自分が伝えたい思いや経験、想像したことを明確にする - 内容を効果的に伝えるために場面の展開や構成などを工夫する	- 読み手が実感をもって想像できるように表現を工夫して記述する - 相手や状況、目的に応じた表現になるように整える

読むこと

話や文章の機能	①話や文章の種類	②学習過程で働かせる資質・能力の要素	
		構造と内容の理解・解釈	考えの形成
事実や知識の整理と理解 (仮称)	説明や解説が述べられている複数の文章	文章の構成を踏まえ、それぞれの要旨を捉える	- それぞれの文章の内容を関連付けながら自分の考えを広げたり深めたりする - 論理の展開や表現の仕方を評価する
考えや主張の理由付けと吟味 (仮称)	主張や提案が述べられている文章	論理の展開や表現の仕方を捉える	- 主張や提案の信頼性や妥当性について考える - 論理の展開や表現の仕方を評価する
思いや経験の表出と想像 (仮称)	経験や想像したこと、感じたことを表す文章	場面の展開と関連付けて登場人物の相互関係、心情の変化などを捉える	- 人物や書き手のものの見方や考え方について考える - 話の展開や表現の仕方を評価する

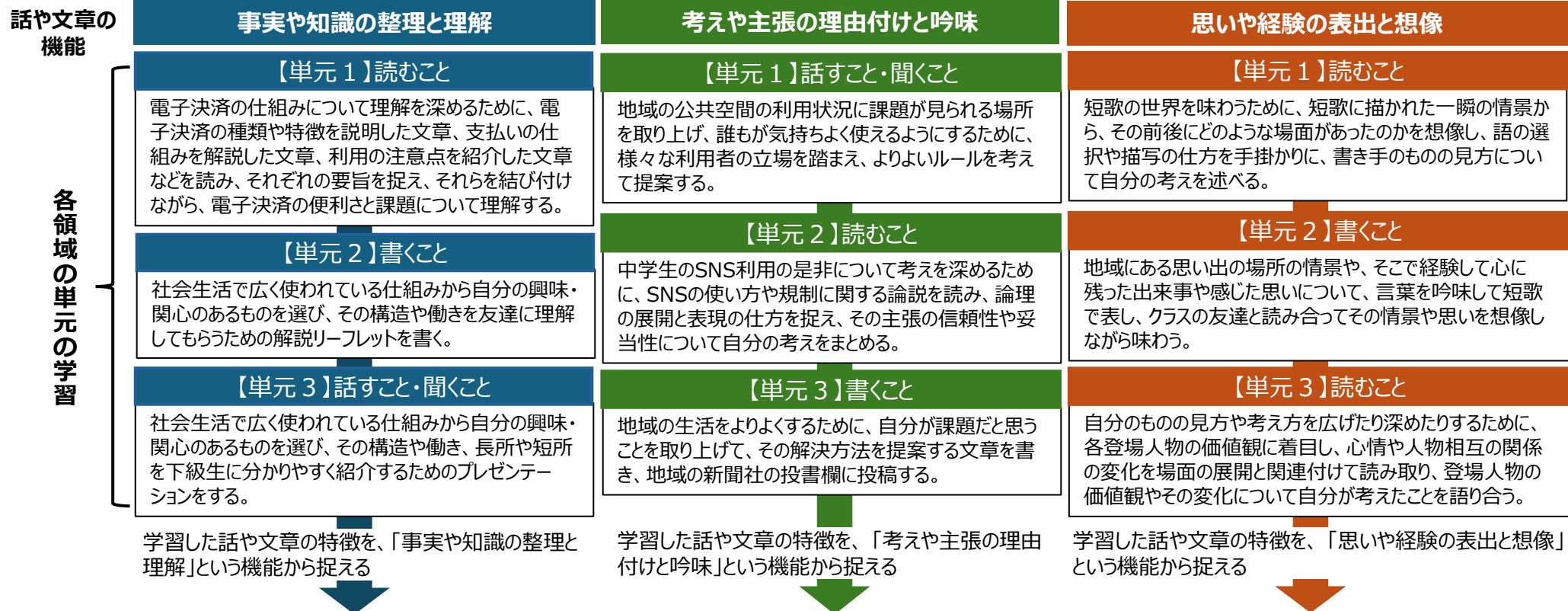
※表中の「①話や文章の種類」「②学習過程で働かせる資質・能力の要素」は現時点でのイメージであり、告示文を整理する中で検討。

※学校種・学年ごとに示す「話や文章の種類」は、対象とする話題や題材等の内容が発達段階に適したものとなるように事項の文言で示すことや「指導計画の作成と内容の取扱い」等で例示することが考えられる。

「話や文章の機能（仮称）」と高次の資質・能力との関係のイメージ（中学校第2学年の例）

- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域の学習指導を「話や文章の機能」に応じて相互に関連付けて配列することで、複数の単元の学習で出合う様々な話や文章の特徴について、社会的な文脈の中でどのような機能を果たしているかという観点から捉え、それぞれの機能に応じた思考・判断・表現の力を総合的に高めていくことが期待される。

※下図で「話や文章の機能」ごとに単元を並べ矢印でつないでいるのは、各単元の関連を表すためであり、指導の順序性を表すためではない。



それぞれの「話や文章の機能」に対する認識の深まり

相手や状況、目的に応じて、「話や文章の機能」を踏まえて思考・判断・表現することができる。

- 相手や状況、目的に応じて、話し方・聞き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えるときに、他者とのやり取りを通じて自分の考えを捉え直し、広げ深めることができる。
- 相手や状況、目的に応じて、文章の書き方を工夫することにより、考えや思いをよりよく伝えることができる。
- 状況や目的に応じて、文章の読み方を工夫することにより、理解や解釈したことを踏まえて自分の考えを広げ深めることができる。

〔知識及び技能〕を「事項のまとまり」で整理したイメージ①

- 「事項のまとまり」は、いずれの側面においても、「知識及び技能の統合的な理解」につながる主な性質に応じ、それぞれの内容を構造化して示すために設ける。その際、各側面の「事項のまとまり」は側面①では、各領域の思考・判断・表現の過程で、その知識・技能を、何のために働かせるのかを見えやすくする役割、側面②では、各領域の学習を支える言葉や言語文化に関する基盤的な知識・技能を、どのような意義や価値と結び付けて身に付け、深めていくのかを見えやすくする役割を果たせるように設定することが重要。その際、「事項のまとまり」は、次のような知識・技能の主な性質を示すものとして整理する。※事項のまとまりについては、告示文を整理する中で検討。

(1)運用しながら深める事項

事項のまとまり	知識・技能の主な性質（概略）
文字や単語の同定 (音読) (小)	「読むこと」：文字や語句を正確に捉え、声に出して流暢に読むことを通して、文や文章の内容を確かに理解するための基盤として働かせる知識・技能
話や文章の構造	「読むこと」「聞くこと」：段落や場面、構成や展開を手掛かりに内容を理解・解釈するために働かせる知識・技能 「書くこと」「話すこと」：考えや内容を筋道立てて組み立てるために働かせる知識・技能
表現の仕方	「読むこと」「聞くこと」：文の組立て、語句の選択、描写、表現の技法、引用、図表などの効果を捉えるために働かせる知識・技能 「書くこと」「話すこと」：意味や意図が伝わるようにそれらの表現を工夫するために働かせる知識・技能
情報と情報との関係	「読むこと」「聞くこと」：話や文章に含まれる情報同士の関係を整理して内容を理解するために働かせる知識・技能 「書くこと」「話すこと」：根拠と主張、原因と結果、具体と抽象などの関係を明確にして考えを形成するために働かせる知識・技能
情報の信頼性	「読むこと」「聞くこと」：情報の根拠や出典、発信元などを確かめて内容を吟味するために働かせる知識・技能 「書くこと」「話すこと」：信頼できる情報を根拠として用い、妥当な考えや内容を伝えるために働かせる知識・技能
古典を読むための言葉のきまり（高）	「読むこと」：古典作品の解釈や内容理解のために働かせる知識・技能

(2)教養として深める事項

事項のまとまり	知識・技能の主な性質（概略）
言葉のきまりや使い方	言葉の働き、書き言葉と話し言葉、漢字、語彙、単語の類別や活用、助詞や助動詞などの働き、言葉遣い、時代・地域・世代による言葉の違いなどについて理解し、我が国の言葉がもつ体系性や変化、多様性への理解を深めるとともに、適切で豊かな言語使用の基盤を形成するための知識・技能
伝統的な言語文化	音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむとともに、そこに表れたものの見方や考え方について歴史的・文化的背景を踏まえながら理解することを通して、我が国の言語文化の特質や価値を捉えるための知識・技能
読書	自らの興味・関心や目的に応じて本や資料を選び、様々な文章や作品に継続的に親しむとともに、読書経験を通して考えたこと、感じたことなどを伝え合い、読書の意義や効用を実感することを通して、自立的な読書習慣を形成するための知識・技能
書写 (小・中)	姿勢、筆記具の扱い、点画、筆順、字形、文字の配列、楷書・行書などの書き表し方を理解し、読みやすく整った文字を、相手や目的に応じて効果的に書くとともに、文字文化への理解を深めるための知識・技能

- (注) ・「文字の同定」や「単語同定」を進めるための方略として、「音読」は重要であり、読むことの思考・判断・表現の過程で繰り返し働かせる知識・技能として小学校段階に設ける。なお、単に声に出して読むことを指導するのではなく、音読をするねらいを明確にした上で学習活動を展開することが必要である。
- ・「書写」は、文字の正しい認識や正確な書字の能力の習得に加え、我が国の文字文化に対する実感を伴った理解を発達段階に応じて深めていくという観点からも、引き続き手書きによる知識・技能として小・中学校段階に設けている。
- ・「話し合うこと」は「話すこと」「聞くこと」の双方の往還であるため、上表では「話すこと」「聞くこと」の双方に含まれるものとする。
- ※「内容の取扱い」において、(1)の内容については、「必要に応じて、特定の事項を取り上げたりまとめたりして指導するなど、指導の効果を高める工夫に留意すること」、(2)の内容については、「必要に応じて思考・判断・表現の過程で活用できるよう指導するなど、指導の効果を高めること」に留意すべきであることを示す。

- 前頁における整理をもとに、具体的な事項を「事項のまとまり」ごとに分類して構造化したイメージは以下のとおり。

※事項のまとまりについては、告示文を整理する中で検討。

【小・中学校段階】

(1) 運用しながら深める事項

事項のまとまり	知識・技能の内容（概略）
文字や単語の同定 (音読)(小学校のみ)	・音読や朗読（小学校のみ）
話や文章の構造	・話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴 ・段落の構造 ・場面の設定
表現の仕方	・分かりやすく明瞭な話し方 ・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・文の成分の順序や照応など文の構成 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果、古典の一節などの引用 ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・図表などの用い方や効果
情報と情報との関係	・情報と情報との関係 ・情報の整理の仕方
情報の信頼性	・情報の信頼性の確かめ方

(2) 教養として深める事項

事項のまとまり	知識・技能の内容（概略）
言葉のきまりや使い方	・言語が共通にもつ言葉の働き ・文字と音声との対応や語の認識、書き言葉のきまり ・漢字の読み方・書き方、漢字の構成 ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにすること（ことわざや慣用語、故事成語などを含む） ・単語の類別、単語の活用、助詞や助動詞などの働き ・敬語の働き、相手や場に応じた言葉遣い ・時代による言葉の違い、地域や世代による言葉の違い
伝統的な言語文化	・音読するなどして言葉の響きや伝統的な言語文化の世界に親しむこと ・古典に表れたものの見方や考え方
書写	・姿勢、筆記具の持ち方、点画や一文字の書き方、筆順、文字の集まりの書き方、楷書や行書の書き方、文字言語の豊かさに触れながら効果的に文字を書くこと
読書	・選書の仕方、自らの興味・関心等に応じた自立的な読書

【高等学校（必修）段階】

(1) 運用しながら深める事項

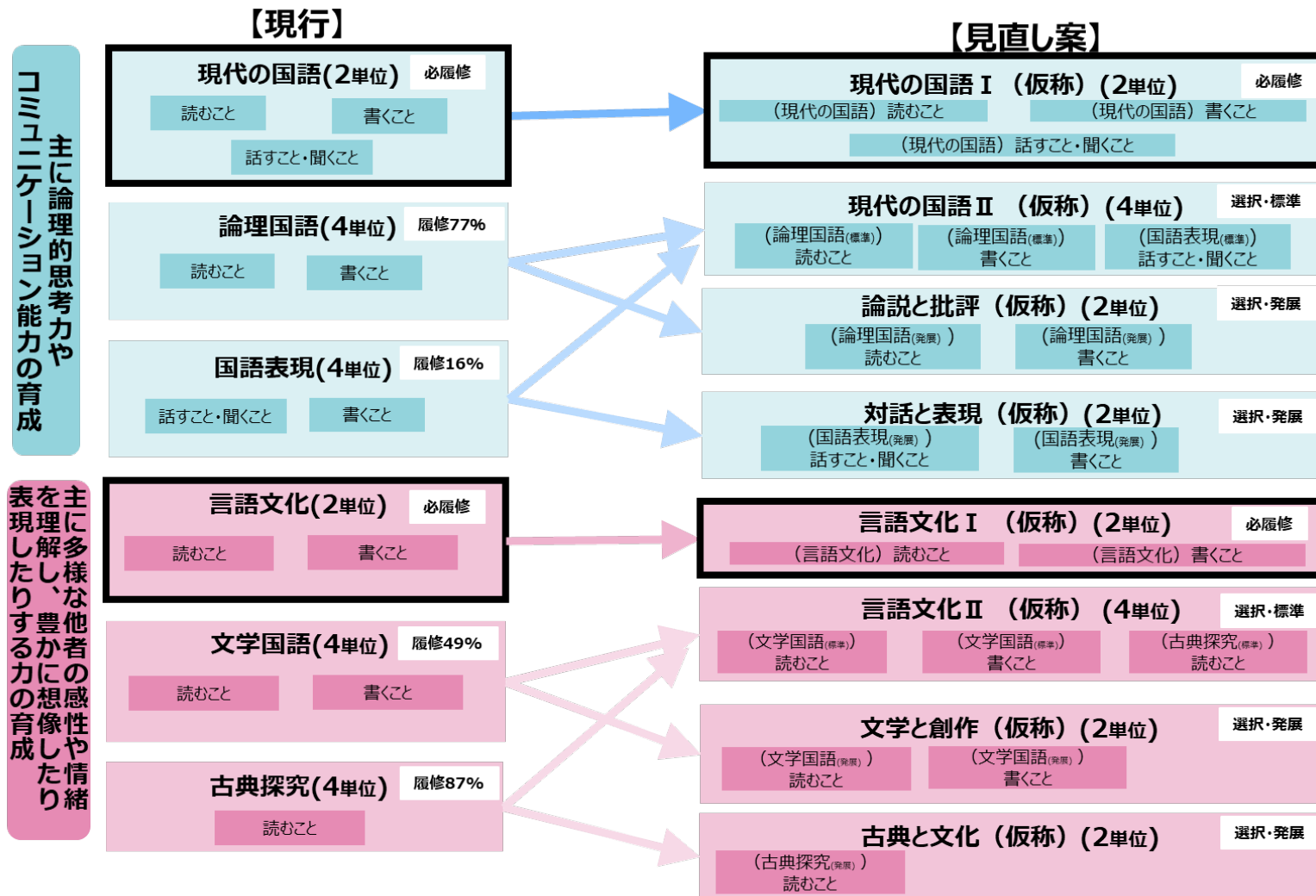
事項のまとまり	知識・技能の内容（概略）
話や文章の構造	・話、文章の構成や特徴 ・段落の構造 ・場面の設定
表現の仕方	・文の効果的な組立て方 ・文脈の中での語句の意味理解、文脈に応じた語句の選択 ・表現の技法の種類とその特徴 ・引用の仕方や効果 ・情景や心情、行動などの描写の仕方 ・図表などの用い方や効果
情報と情報との関係	・情報と情報との様々な関係 ・情報の整理
情報の信頼性	・情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方
古典を読むための言葉のきまり	・文語のきまりや訓読、古典特有の表現

(2) 教養として深める事項

事項のまとまり	知識・技能の内容（概略）
言葉のきまりや使い方	・言語が共通にもつ言葉の働き ・話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色 ・漢字の読みと書き ・語句同士の関係を理解し、語彙を豊かにすること ・敬語を含め広く相手や場に応じた表現や言葉遣い ・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化 ・歴史的な文体の変化
伝統的な言語文化	・我が国の文化と外国の文化との関係 ・我が国の文化・言語文化の特質 ・作品の歴史的・文化的背景 ・伝統的な言語文化に親しむこと
読書	・選書の仕方、自らの興味・関心等に応じた自立的な読書

※「図表などの用い方や効果」については、現代の多様なメディア活用の状況に応じて、「写真」「映像」などの要素を含めることも検討することが重要。一方で、他教科等におけるメディア活用に関する内容との関連を踏まえつつ、国語科として必要な内容を精選できるよう慎重な配慮が必要であることに留意。

- 現行の趣旨は維持しつつ、論理的思考力、情緒・感性の両面について、バランスよく統合的かつ効果的に育成する方向で見直し、必修科目（現代の国語、言語文化）は科目構成を維持しつつ、選択科目の構成や単位数を見直す。
 - 選択科目の中から、標準的な内容項目を抽出し、大多数の生徒の履修を想定した選択科目（現代の国語Ⅱ（仮称）、言語文化Ⅱ（仮称））を設定。
 - その上で、上記「Ⅱ」科目の履修を前提に、より発展的な内容を学ぶ選択科目群（論説と批評（仮称）、対話と表現（仮称）、文学と創作（仮称）、古典と文化（仮称））を設定。



※ 現行の「%」は教科書の必要数を基に推計した履修率

(1) 必修科目**現代の国語Ⅰ（仮称）（2単位）**

実社会に必要な国語の知識・技能を身に付けて適切に使えるようにするとともに論理的に考える力や他者との関わりの中で伝え合う力を育成する。

※現行の必修科目「現代の国語」の枠組みを維持。

(2) 選択科目**現代の国語Ⅱ（仮称）（4単位）****標準**

- ・ 現行の「論理国語」「国語表現」の標準的な内容を組み合わせ、「現代の国語」の内容を深化させて学ぶ科目。
- ・ 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域の資質・能力を「事実や知識の整理と理解」「考えや主張の理由付けと吟味」の「話や文章の機能」に応じて働かせ、論理的に思考することや他者との対話を通して、主として、実社会で必要とされる国語による諸活動に必要な力を育成する。

論説と批評（仮称）（2単位）**発展**

- ・ 現行の「論理国語」の発展的な内容を再整理し、「現代の国語Ⅱ」（仮称）の「書くこと」「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- ・ 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、批判的に読んだり自らの考えを論述したりすることを通して、主として、論理的に思考し表現する力を育成する。

対話と表現（仮称）（2単位）**発展**

- ・ 現行の「国語表現」の発展的な内容を再整理し、「現代の国語Ⅱ」（仮称）の「話すこと・聞くこと」「書くこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- ・ 多様な他者との関わりの中で文章・口頭の双方において論理的・説得的に対話や表現をしたり、様々な媒体を通して他者との対話を重ね新たな価値を創出したりすることで、主として、多様な他者との多角的なコミュニケーションを図る力を高める。

言語文化Ⅰ（仮称）（2単位）

古典や近現代の文章を通して我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を身に付け、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。

※現行の必修科目「言語文化」の枠組みを維持。

言語文化Ⅱ（仮称）（4単位）**標準**

- ・ 現行の「文学国語」「古典探究」の標準的な内容を組み合わせ、「言語文化Ⅱ」の内容を深化させて学ぶ科目。
- ・ 「書くこと」「読むこと」の2領域の資質・能力を「思いや経験の表出と想像」「伝統的な言語文化の継承と創造」の「話や文章の機能」に応じて働かせ、作品を多様な考えや価値観を踏まえて解釈したり、時代を超えた連続性の中で我が国の言語文化への理解を深めたりすることを通して、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。

文学と創作（仮称）（2単位）**発展**

- ・ 現行の「文学国語」の発展的な内容を再整理し、「言語文化Ⅱ」（仮称）の「書くこと」「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- ・ 文学作品などを読んでその解釈の多様性について考察したり批評したりすること、独創的な表現を工夫して想像したことや思いを伝えたりすることを通して、様々な事柄を多面的に捉え、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像したり表現したりする力を育成する。

古典と文化（仮称）（2単位）**発展**

- ・ 現行の「古典探究」の発展的な内容を再整理し、「言語文化Ⅱ」（仮称）の「読むこと」を発展させた内容を学ぶ科目。
- ・ 古典を主体的に読み進めたり、我が国の伝統と文化の基盤として古典を学び、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の価値や意義について考えたりすることを通して、主として、多様な他者の感性や情緒を理解し、豊かに想像する力を育成する。

教育課程全体で育む「言語能力」が働くイメージ

- AIによる大量の言語生成が可能となり、それをSNS等で容易に発信可能な時代だからこそ、自らの意思や考えの形成・表現や、他者の経験・感情の理解といった人間ならではの言語能力を重視する。

理解

内容を正確に理解するとともに、発信者の経験・感情・意図を掴みながら、自己の考えを豊かに形成

構造と内容の理解・解釈

➤ 言語情報の正確な把握

理解のための方略を工夫しながら、受け取った言語情報の構造や内容を正確に把握

➤ 自分なりの意味の理解・解釈

正確な把握と同時に、既有の知識と結びつけたり多様な視点から検討したりしながら、自己にとっての深い意味理解・解釈の形成

考えの形成

➤ 発信者の経験・感情等を踏まえた考えの形成

発信者の経験・感情・思考・意図を推察したり、それらを踏まえ自らの意思をもち考えを形成するなど、自他の経験や感情、意思と結びつける

表現・推敲

➤ 表現の過程での柔軟な調整

表現した後や表現の過程においても、他者の受け取りを推察しながら、表現の内容や方法を柔軟に調整し、必要に応じて修正する

➤ 表現の前の省察や吟味

表現しようとする内容や構成・表現形式が、真に表現の目的を達成するか、意図しない結果を招かないか等の視点から省察し、表現を吟味する

考えの形成

➤ 目的・場面・相手を踏まえた内容・構成の検討

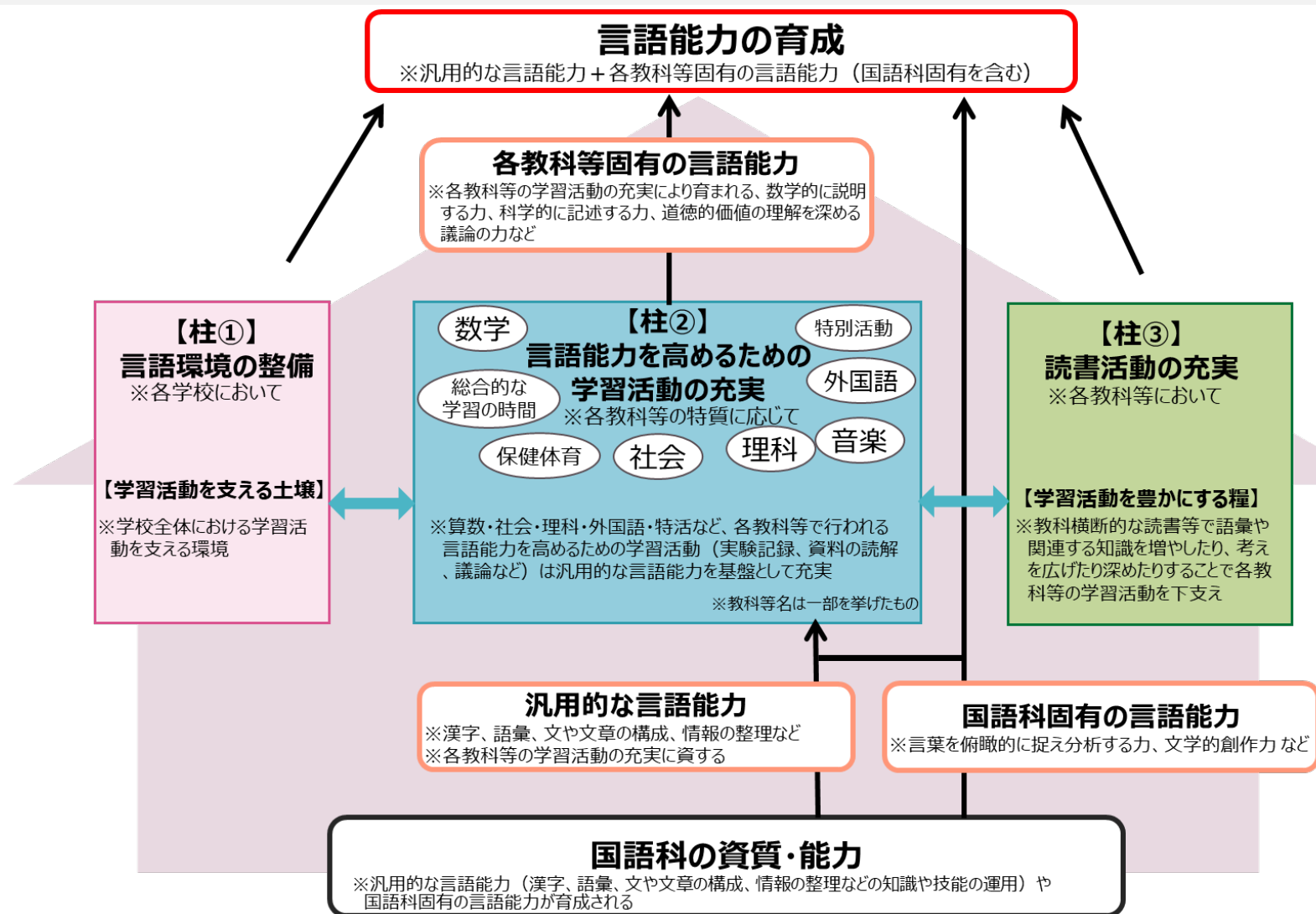
自らの意思をもち考えを形成するとともに、形成した自らの考えや意図が目的に沿ったものか、相手に正確に伝わるかなどの視点から内容や構成、表現形式を検討

相手にどう受け取られるかを想像しつつ、自己の考えが伝わるよう工夫しながら豊かに表現

表現

「言語能力」の育成イメージ

- 三つの柱の関係を分かりやすく示すことで、言語能力育成の実効性を高め、言語能力の育成を一層推進。
- 各教科における「教科書等を読み解く力」の確実な育成に向けては、育まれる各教科固有の言語能力に加え、各教科固有の用語や概念の理解などとの相乗効果を図ることが重要。
- 国語科の学びと各教科等の学習活動の充実との関係を整理することにより、各教科等における言語能力を高めるための学習活動の充実を一層推進するとともに、言語能力を確実に育成。



- 資質・能力の育成に当たって、効果的かつ過度な負担が生じにくい国語科の評価への見直しを図るため、形成的評価（学習改善等に生かす評価）と総括的評価の意義を踏まえ、実質的な評価場面を精選。

※下記は、基本的な考え方のイメージであり、総括的な評価の実施の仕方については、児童生徒の発達段階や学校の実態に応じて様々な実践上の工夫が考えられる。

(1) 現行の学習評価のイメージ
(中学校第2学年を想定)

※国語科は、思考力、判断力、表現力等の系統性が明確で、知識及び技能の内容のまとまりに対応した固有の思考力、判断力、表現力等が想定しにくく、知識及び技能が全体として思考力・判断力・表現力等の深まりを助ける構造をもつことから、下の表では「思・判・表」を「知・技」の上に示している。

1 学期						1 学期		学年末	
	単元 1（書くこと）					観点別	評価	観点別	評価
学習過程	題材の設定、情報の収集、内容の検討	構成の検討	考えの形成、記述	推敲	共有				
事項	(1)ア	(1)イ	(1)ウ	(1)エ	(1)オ				
思・判・表		B	B			総括		B	
知・技	(2)イ A					B	3	B	3
主態	B					B		B	

(2) 改訂後の学習評価のイメージ
(中学校第2学年を想定)

※評価への総括は課程の修了認定を行う学年末にのみ行うことが可能であることから、学期ごとの評価への総括は学校の実態に応じて工夫して実施すべきものである。そのため、下の表では、学期・学年末の区別を示していない。

	単元 1（書くこと）		単元 2	単元 3	知技①の評価場面	単元 4	観点別	評価
学習過程	考えの形成		表現・推敲					
単元の学習活動のイメージ	社会生活で広く使われている仕組みから自分の興味・関心のあるものを選び、その構造や働きを友達に理解してもらうための解説リーフレットを書く。							
思・判・表	① B		A	B	③ -	④ -	B	
知・技	② -		-	-	①の事項 A,B,B…	②の事項 B	B	3
学びに向かう力・人間性等	総則・評価特別部会において、当該評価期間における「思・判・表」の学習過程全体を通じて、「見取る姿（仮称）」に示す行動の「継続的な発揮」を見取ることができたことをもって「○」をつけ、「思・判・表」の観点別評価を介して、評価に影響を与えるものと整理する方向で検討（参考：総則・評価特別部会資料）							

① 学習の過程で形成的評価を行いつつ、単元の学習の成果として思考・判断・表現しているパフォーマンス（書き上げた文章など）についての総括的評価を実施

② 関連する〔知識及び技能〕①の事項について形成的評価を行うことに重点を置き、総括的評価は実施しない

③ 単元 1 ～ 3 の各学習過程で指導した関連する〔知識及び技能〕①の事項についての総括的評価を実施

④ 〔知識及び技能〕②の事項について、学習活動の過程で形成的評価を行いつつ、単元末に総括的評価を実施



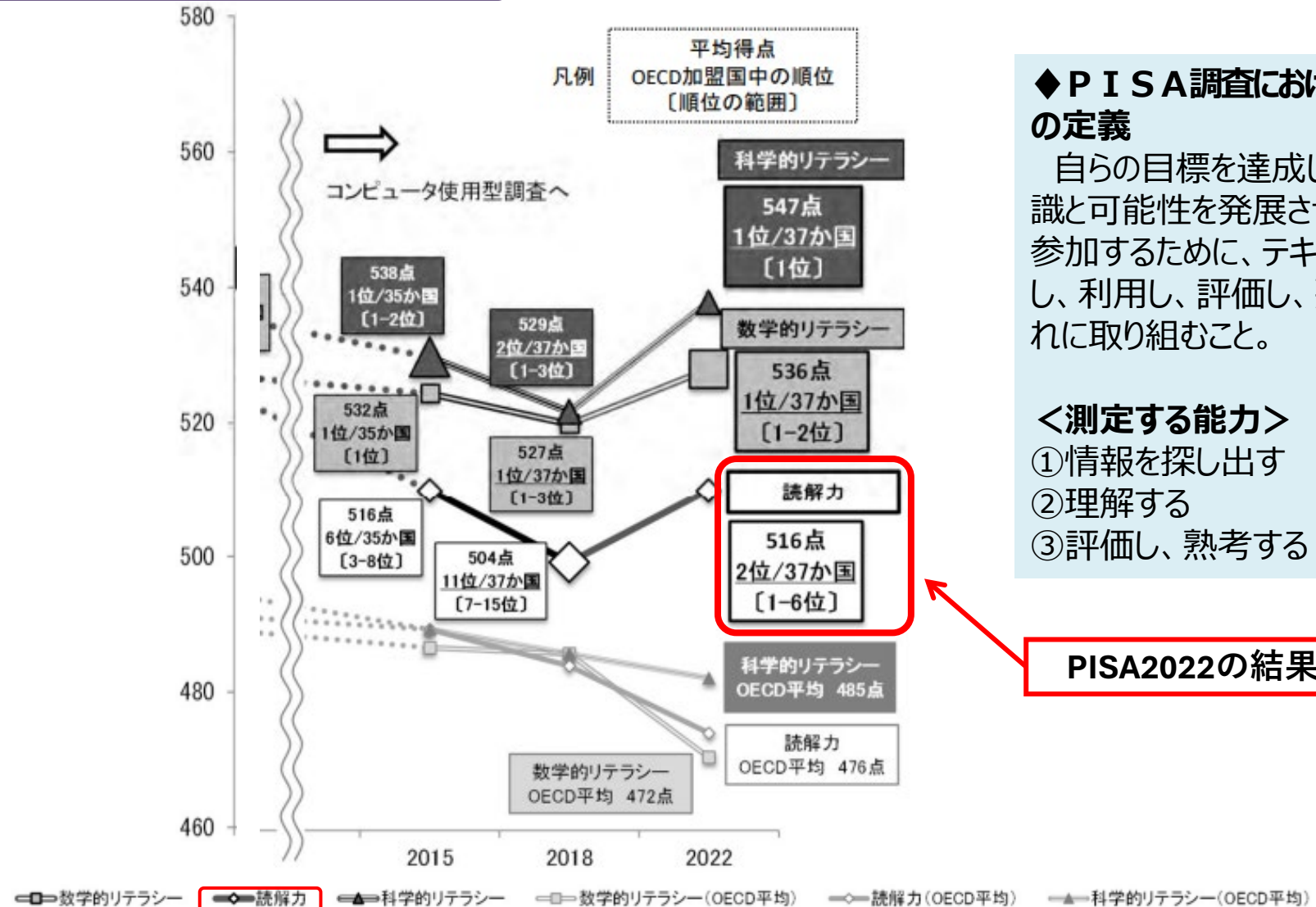
参考資料・データ集

学力の状況

読解力の平均得点は、OECD加盟国中2位（PISA2022）

PISA2015以降の平均得点及び順位の推移

※PISA2015からコンピュータ使用型調査に移行



◆PISA調査における読解力の定義

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。

＜測定する能力＞

- ①情報を探し出す
- ②理解する
- ③評価し、熟考する

PISA2022の結果

自由記述形式の問題では、「根拠を示して自分の考えを説明すること」に課題がある（PISA2018）

日本の正答率

48.6%

【具体的な設問例】（公開問題「ラパヌイ島」問7）

三つの資料を読み、資料から根拠となる情報を挙げて、自分の考えを説明する問題。

PISA2018

自由記述形式の問題において、自分の考えを根拠を示して説明することに、引き続き課題がある。

誤答には、自分の考えを他者に伝わるように記述できず、問題文からの語句の引用のみで説明が不十分な解答となるなどの傾向が見られる。

※PISA2018は重点的に調査する分野が読解力であったため、読解力に関する詳細な分析を行っている。

（PISA2022は重点的に調査する分野が数学的リテラシーであったため、読解力に関しては詳細な分析が行われていない。）

「OECD生徒の学習到達度調査PISA2018のポイント」
（文部科学省・国立教育政策研究所）

ブログ 書評 サイエンス ニュース

www.sciencenews.com/Polynesian_rats_Rapa_Nui

サイエンス ニュース

ラパヌイ島の森を破壊したのはナンヨウネズミか？

科学レポーター 木村 真

2005 年、ジャレド・ダイヤモンド氏の『文明崩壊』が出版されました。この本の中で、彼はラパヌイ島（別名イースター島）に人が定住した様子を描いています。

本書は出版と同時に大きな議論を呼びました。多くの科学者が、ラパヌイ島で起こったことについてのダイヤモンド氏の説に疑問を抱いたのです。科学者たちは、18 世紀にヨーロッパ人がその島に初めて上陸した時には巨木が消滅していた点については同意しましたが、消滅した原因についてのジャレド・ダイヤモンド氏の説には同意しなかったのです。

そして、二人の科学者カール・リボ氏とテリー・ハント氏による新しい説が発表されました。彼らはナンヨウネズミが木の種を食べたために、新しい木が育たなかったと考えています。そのネズミはラパヌイ島の最初の移住者である人間が上陸するために使ったカヌーに偶然乗っていたか、または、この島に意図的に連れてこられたのだと、彼らは述べています。

ネズミの数は、47 日間で二倍に増えるという研究結果があります。それほど数のネズミが育つには多くのエサが必要です。リボ氏とハント氏はこの説の根拠として、ヤシの実の残骸にネズミがかじった跡が残っている点を指摘しています。もちろん彼らも、ラパヌイ島の森の破壊に人間が加担したことは認めています。しかし、一連の経緯の元凶は主にナンヨウネズミの方にあったというのが、彼らの主張なのです。

経年変化分析調査でのスコアの低下

小学校

平均スコアの推移（小学校）



表1 スコアの標本統計量

実施年度	平成28年度	令和3年度	令和6年度
スコア平均	505.8	505.8	489.9
児童数	11,122	16,321	15,767
標準偏差	123.7	120.8	126.8

中学校

平均スコアの推移（中学校）

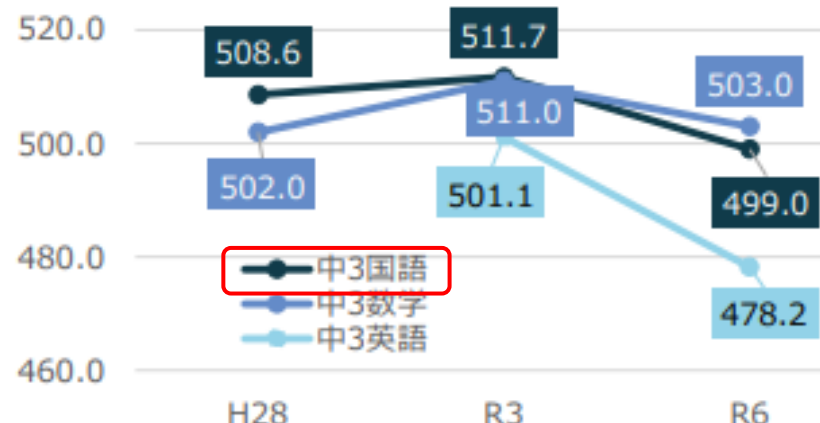


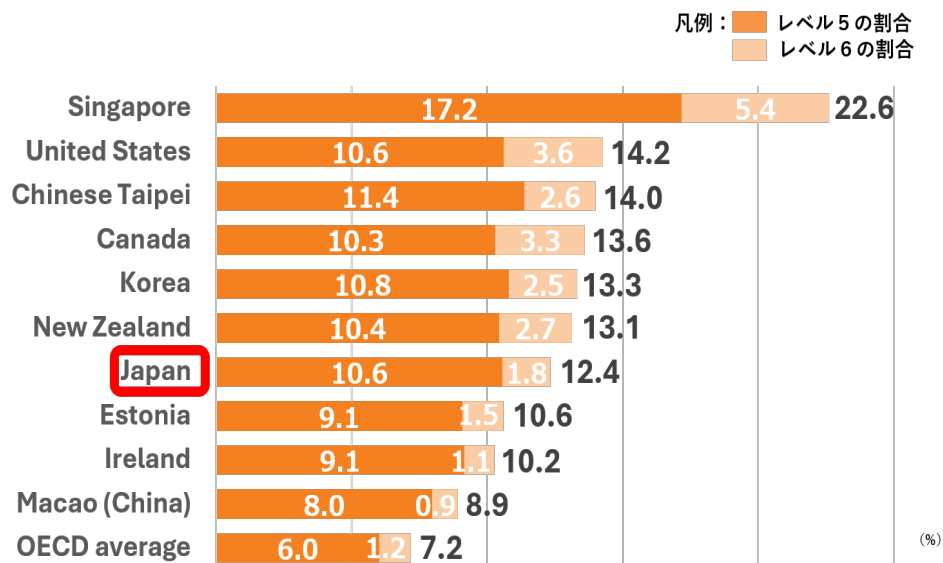
表1 スコアの標本統計量

実施年度	平成28年度	令和3年度	令和6年度
スコア平均	508.6	511.7	499.0
生徒数	27,029	25,206	23,457
標準偏差	128.0	121.3	122.8

※平成28年度、令和3年度、令和6年度（PBT実施校）の結果を比較。なお、全国の本調査のスコア分布の状況に関する変化の有無は中長期的に継続して分析する必要があり、次回（令和9年度予定）以降の結果もあわせて引き続き分析が必要。

読解力(中3)

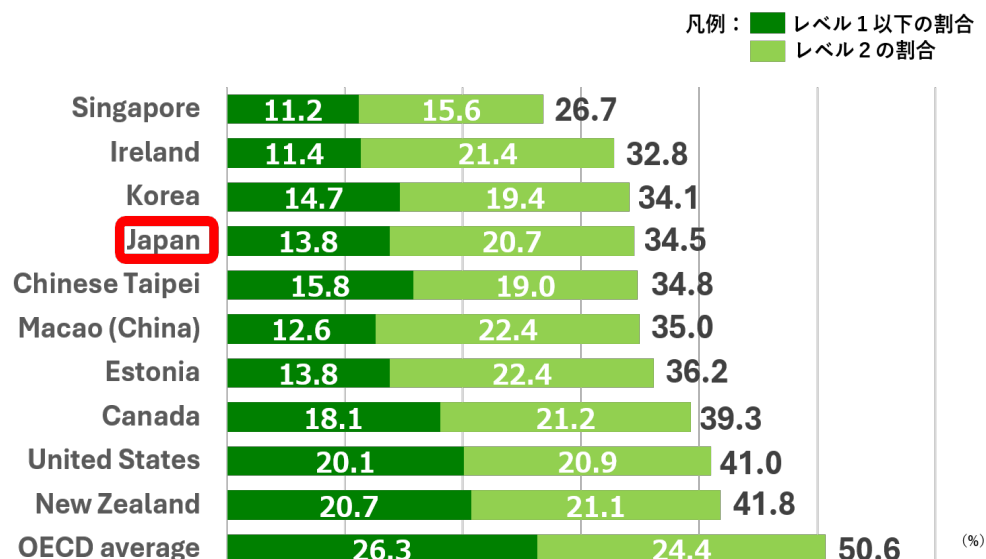
成績上位10か国における高得点層
(習熟度レベル5及び6)の割合



【出典】

PISA2022報告書より作成（PISA2022の試験の結果読解力の習熟度がレベル5及びレベル6であった生徒の割合）

成績上位10か国における低得点層
(習熟度レベル1以下及び2)の割合



【出典】

PISA2022報告書より作成（PISA2022の試験の結果読解力の習熟度がレベル1位か及びレベル2であった生徒の割合）

学習内容に関する状況

言葉で思考を整理したり深めたりすることに課題

○語彙を豊かにしたり、適切な語句を用いて思いや考えを表現すること

	概要	通過率・正答率		調査等
小	思考に関わる語句の理解		51.7%	R4状況調査
中	表現の効果を考えた描写		49.8%	R6学力調査

○話や文章の内容や既有的知識等を整理して結び付け、考えをまとめること

	概要	通過率・正答率		調査等
小	情報の整理の仕方の理解・使用		59.0%	R4状況調査
			63.2%	R7学力調査
	文章の内容理解に基づく考えの形成		40.4%	R4状況調査
			56.4%	R5学力調査
中	文章の内容と既有的知識を結び付けた考えの形成		32.5%	R5状況調査
高	文章の内容と背景・他作品との関係を踏まえた深い解釈		21.9%	R6状況調査

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必履修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。

目的や場面に応じたコミュニケーションに課題

○目的や場面に応じて適切に話したり聞いたりして考えをまとめること

	概要	通過率・正答率		調査等
小	話の中心を捉えて考えを形成		57.5%	R4状況調査
	話合いの流れを踏まえた質問		52.4%	
	立場を明確にして話し合い、考えを形成		47.8%	R4学力調査
中	話し手の考えと比較して自分の考えを形成		41.6%	R5状況調査
	話の内容を評価		42.7%	
	話題や展開を捉え、互いの発言を結び付けて考えを形成		28.8%	R5状況調査
			45.1%	R6学力調査
高	話の論理の展開等を評価		41.1%	R6状況調査

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修教科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。

目的や場面に応じたコミュニケーションに課題

○自分の思いや考えを適切に伝えられるように工夫して文章を書き、整えること

	概要	通過率・正答率	調査等
小	資料を活用した記述の工夫	57.0%	R4状況調査
	簡単な記述と詳細な記述の工夫	27.3%	
	理由・事例を明確にした記述の工夫	61.4%	R7学力調査
	根拠を明確にした記述の工夫	37.5%	R4状況調査
中	資料を適切に引用した記述の工夫	31.2%	R7学力調査
	叙述の仕方を確かめて推敲	49.6%	R5状況調査
	表現の効果を確かめて推敲	40.8%	
	目的や意図に応じた表現かを確かめて推敲	26.7%	
	話の構成や展開の工夫	37.9%	R6状況調査
高	根拠の示し方等を工夫した記述	41.4%	
	文章の種類、構成、展開等を工夫した記述	45.4%	

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

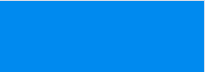
※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。

目的に応じた文章理解、情報の評価・熟考に課題

○目的に応じて文章を読み、自分の考えをもつこと

	概要	通過率・正答率	調査等
小	目的に応じた必要な情報の取り出し	 38.7%	R4状況調査
中	目的に応じて必要な情報に着目して要約	 43.3%	R6学力調査
		 39.5%	R5状況調査
	目的に応じて複数の情報を整理して解釈	 39.3%	
	観点を明確にして文章の構成を考える	 32.7%	
	文章の構成や表現の仕方を評価	 23.6%	

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

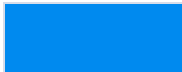
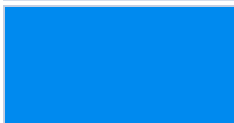
※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」、「学力調査」は「全国学力・学習状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修教科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象児童生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。また、異なる調査で出題した問題でも趣旨が同じである場合には、「概要」を一つにまとめて表している。

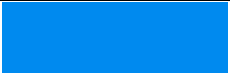
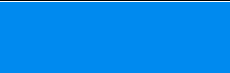
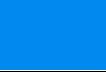
目的に応じた文章理解、情報の評価・熟考に課題

○話や文章に含まれる情報の信頼性や情報同士の関係の妥当性を確かめること

	概要	通過率・正答率	調査等
中	意見と根拠の関係の理解	 31.4%	R5状況調査
	情報の信頼性の確かめ方の理解・使用	 35.3%	
高	目的や意図に応じて情報の妥当性や信頼性を吟味	 45.1%	R6状況調査

PISA2018、2022

ある商品について、販売元の企業とオンライン雑誌という異なる立場から発信された複数の課題文を読んで答える問題のうち、次のような問題の正答率が低い。

概要	正答率		調査等
	日本	OECD	
必要な情報を探し出す	 56.1%	 59.2%	PISA2018
	 56.8%	非公表	PISA2022
双方の主張や情報の質と信ぴょう性を評価し対処を説明する	 8.9%	 27.0%	PISA2018
	 14.3%	非公表	PISA2022

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

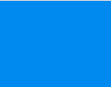
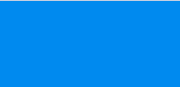
※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。

我が国の言語文化を継承・発展させる態度の形成に課題

○我が国の言語文化の特質を理解し、その担い手として継承・発展させる態度

	概要	通過率・正答率		調査等
小	古典の言葉の響きやリズムに親しむ		56.8%	R4状況調査
中	古典の一節を引用して使用		40.6%	R5状況調査
高	時代背景等を踏まえた古典の解釈		21.9%	R6状況調査
	我が国の言語文化としての古典の理解		35.4%	

※各調査結果は、特に課題が見られたものを取り上げている。

※表中の「状況調査」は「学習指導要領実施状況調査」を表す。学力調査は小学校6学年及び中学校3学年を対象、状況調査は小学校4学年及び6学年、中学校全学年、高等学校第3学年（必修科目で実施）を対象としている。なお、中学校及び高等学校の状況調査の結果は速報値であり確定値ではない。

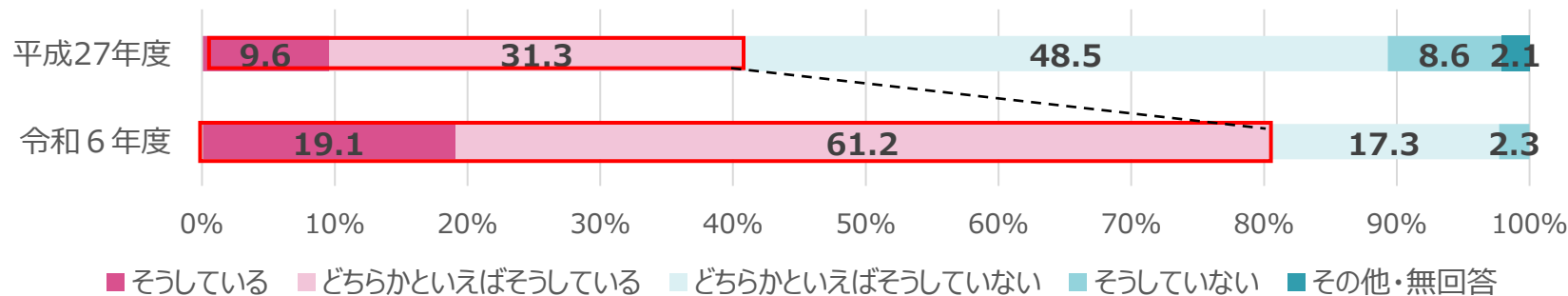
※各種調査結果の通過率・正答率はそれぞれの実施年度、対象生徒、問題の内容、出題形式が異なるため、単純に比較することはできない。

※「通過率・正答率」は、「概要」に関する問題の平均通過率・平均正答率を表す。



質問項目：

「話すこと・聞くこと」の指導で、発表や討論に向けて、話題について検討して構成や展開を工夫したり、言葉遣いを工夫したりするなど、意図的、計画的な指導を行っている



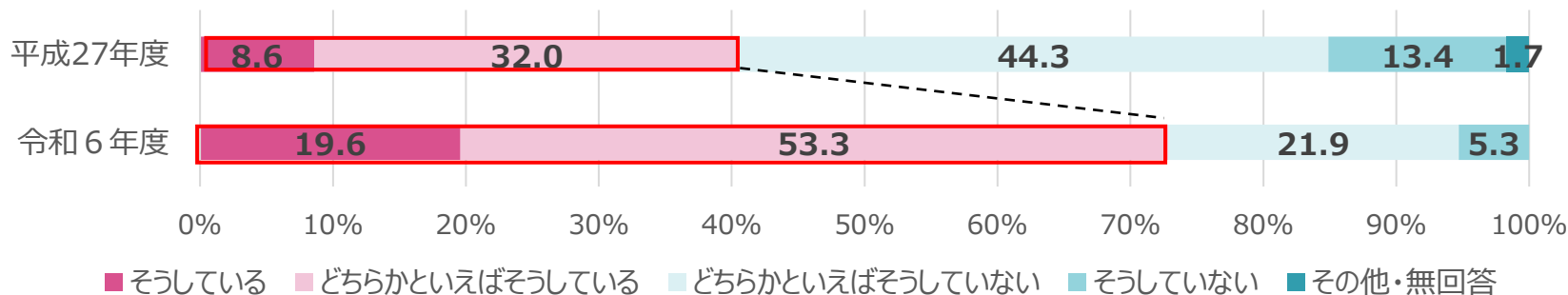
肯定的な回答は40.9%→80.4%

⇒「話すこと・聞くこと」の指導に対する高校教師の意識は改善されたと考えられる



質問項目：

「書くこと」の授業で、課題を示して書かせるだけでなく、自ら題材を決めたり、取材したりするための指導の工夫をしている



肯定的な回答は40.5%→72.9%

⇒「書くこと」の指導に対する高校教師の意識は改善されたと考えられる

※平成27年度調査は、教師質問紙調査（国語総合）による。令和6年度調査は、教師質問調査（現代の国語）による。

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

※同趣旨の質問項目を経年比較したものであり、質問項目の文言は多少異なる。（令和6年度調査の質問項目を掲載。）

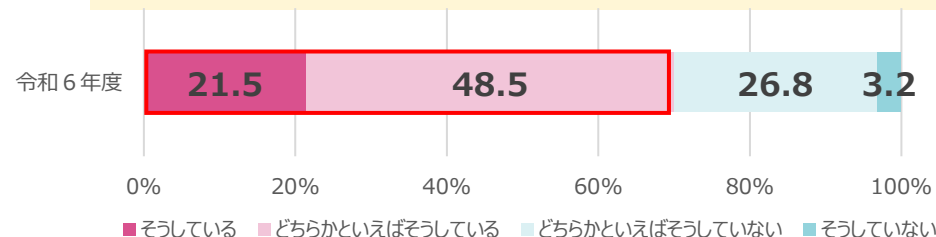
※各回答の数値は、少数第1位までの概数で表示。肯定的な回答を求める際は、少数第2位以下も含めて計算するため、それぞれの数値は一致しない場合がある。

【教師用】

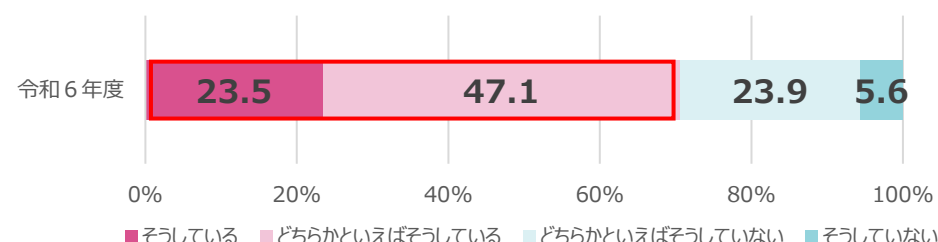
我が国の言語文化への理解を深めるという観点が弱い



質問項目（令和6年度調査）：
「読むこと」の近代以降の文章に関する指導については、我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫している



質問項目（令和6年度調査）：
「読むこと」の古典に関する指導については、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導している

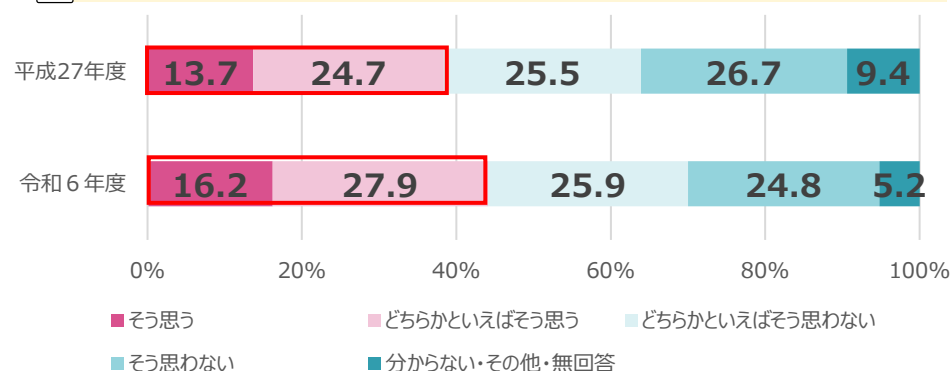


【生徒用】

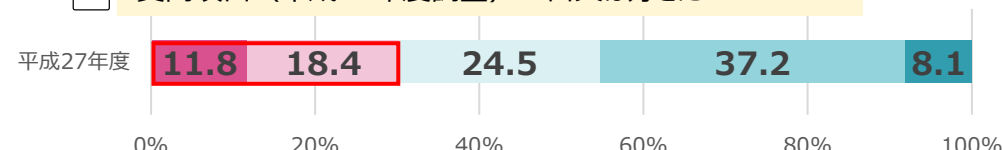
古典への学習意欲が高まらない生徒が多い



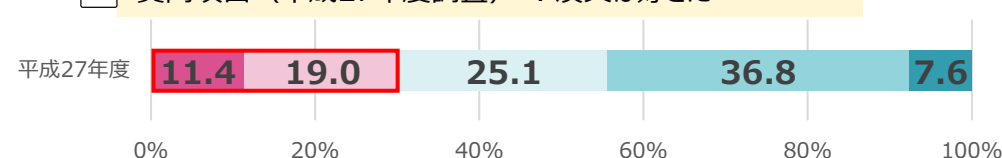
質問項目：古文や漢文の学習は大切だ



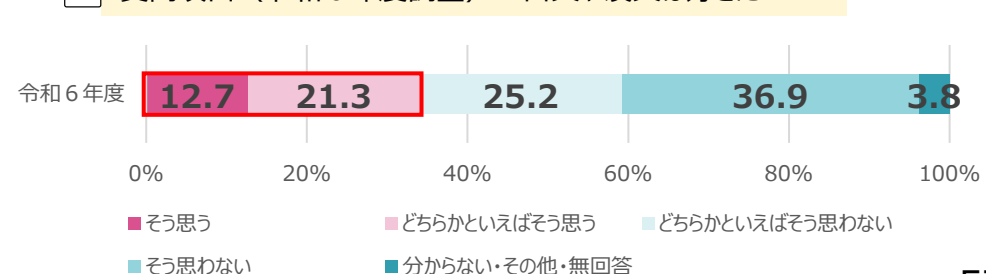
質問項目（平成27年度調査）：古文は好きだ



質問項目（平成27年度調査）：漢文は好きだ



質問項目（令和6年度調査）：古文や漢文は好きだ



※平成27年度調査は、生徒質問紙調査（国語総合）による。令和6年度調査は、生徒質問調査（言語文化）による。

※生徒質問調査は、平成27年度、令和6年度ともに高等学校第3学年（必修教科目で実施）を対象としている。

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

令和6年度 高等学校学習指導要領実施状況調査結果 抜粋

現代の国語	領域等	出題のねらい	R6調査通過率	
	話すこと・聞くこと	自分の考えが的確に伝わるよう、話しの構成や展開を工夫している。 学習指導要領該当項目 A話すこと・聞くこと(1)イ	37.9%	
		論理の展開を予想しながら聞き、話しの内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価している。 学習指導要領該当項目 A話すこと・聞くこと(1)エ	41.1%	
	書くこと	目的や意図に応じて、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。 学習指導要領該当項目 B書くこと(1)ア	45.1%	
		自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えとともに、文体、語句などの表現の仕方を工夫している。 学習指導要領該当項目 B書くこと(1)ウ	41.4%	
		目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、自分の文章の課題を捉え直したりしている。 学習指導要領該当項目 B書くこと(1)エ	61.3%	
言語文化	領域等	出題のねらい	H27調査通過率	R6調査通過率
	知識及び技能(2)	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまり、古典特有の表現などについて理解している。 学習指導要領該当項目 知識及び技能(2)ウ	91.5%	93.8%
		時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。 学習指導要領該当項目 知識及び技能(2)エ	48.2%	49.6%
	読むこと	作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。 学習指導要領該当項目 B読むこと(1)エ	38.8%	45.3%
		作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもととしている。 学習指導要領該当項目 B読むこと(1)オ	12.8%	35.4%

※令和6年度調査結果は速報値であり確定値ではない。

※令和6年度調査の「言語文化」については、平成27年度調査の「国語総合」との経年変化をみるため、同様の問題を出題している。

「自分の考え」を書くことが苦手

<R3～R5 全国学力・学習状況調査>

小学校・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無回答率
「ごみ拾い」か「花植え」かのどちらかを選んで、 でどのように話すかを書く（R4）	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、 自分の考え をまとめる	47.8%	3.0%
【川村さんの文章】の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く（R5）	図表やグラフなどを用いて、 自分の考え が伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	26.8%	7.0%
資料を読み、運動と食事の両方について分かったことをもとに、自分ができそうなことをまとめて書く（R5）	文章を読んで理解したことに基づいて、 自分の考え をまとめることができるかどうかをみる	56.4%	8.4%

中学校・国語

問題の概要	出題の趣旨	正答率	無回答率
参加者の誰がどのようなことについて発言するとよいかと、そのように 考えた理由 を書く（R3）	話合いの話題や方向を捉えて、 話す内容を考える	57.5%	3.3%
農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える（R4）	自分の考え が伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く	46.5%	8.8%

読書活動、学習時間等に関する状況

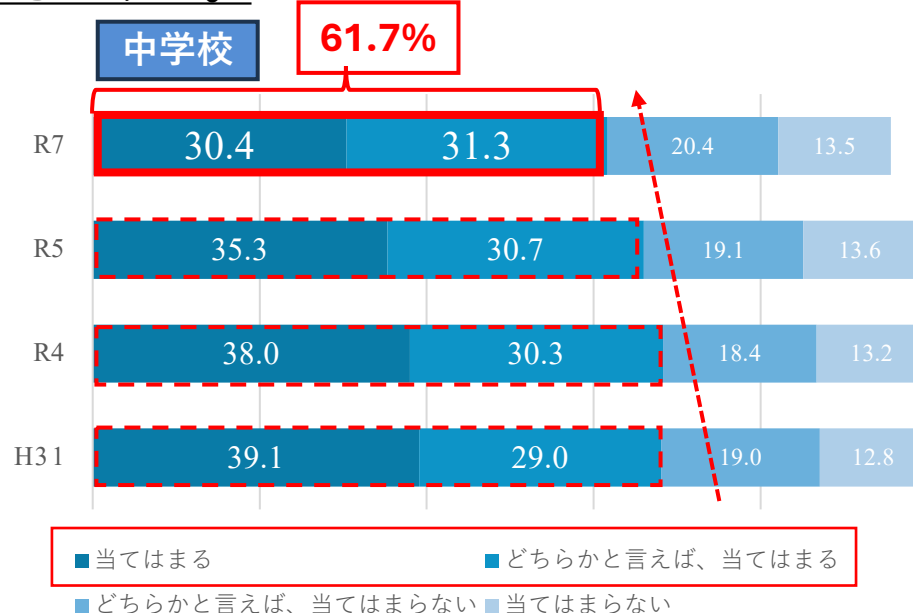
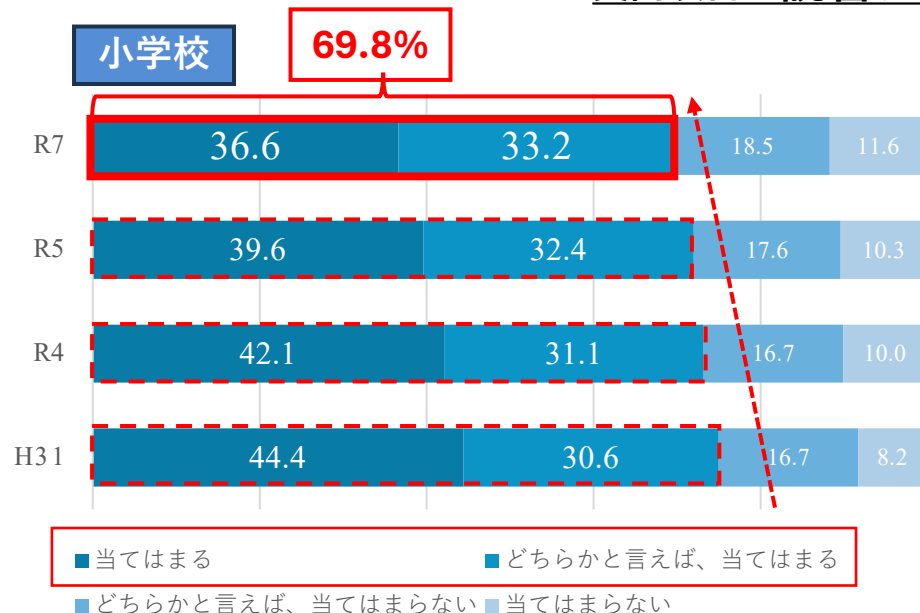
読書習慣の形成に課題

○読書により考えを広げたり深めたりする習慣の定着

	概要	通過率・正答率		調査等
中	読書の意義と効用の理解		39.8%	R5状況調査

読書が好きな児童生徒の割合が減少傾向

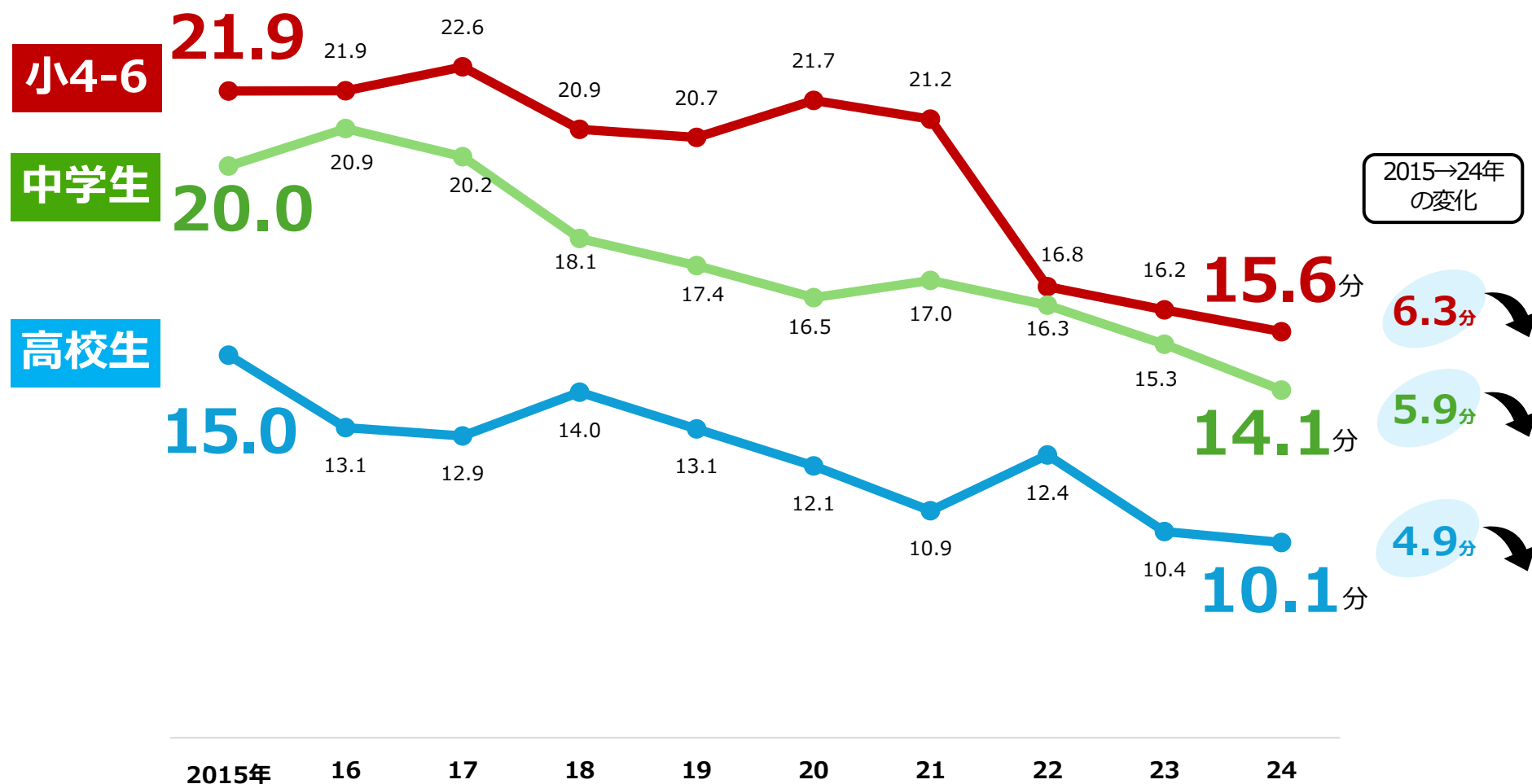
質問項目：読書は好きですか。



H31～R7の学力調査の質問調査の結果

※R2～R3はこの項目について質問していない。

いずれの学校段階でも読書時間は減少傾向

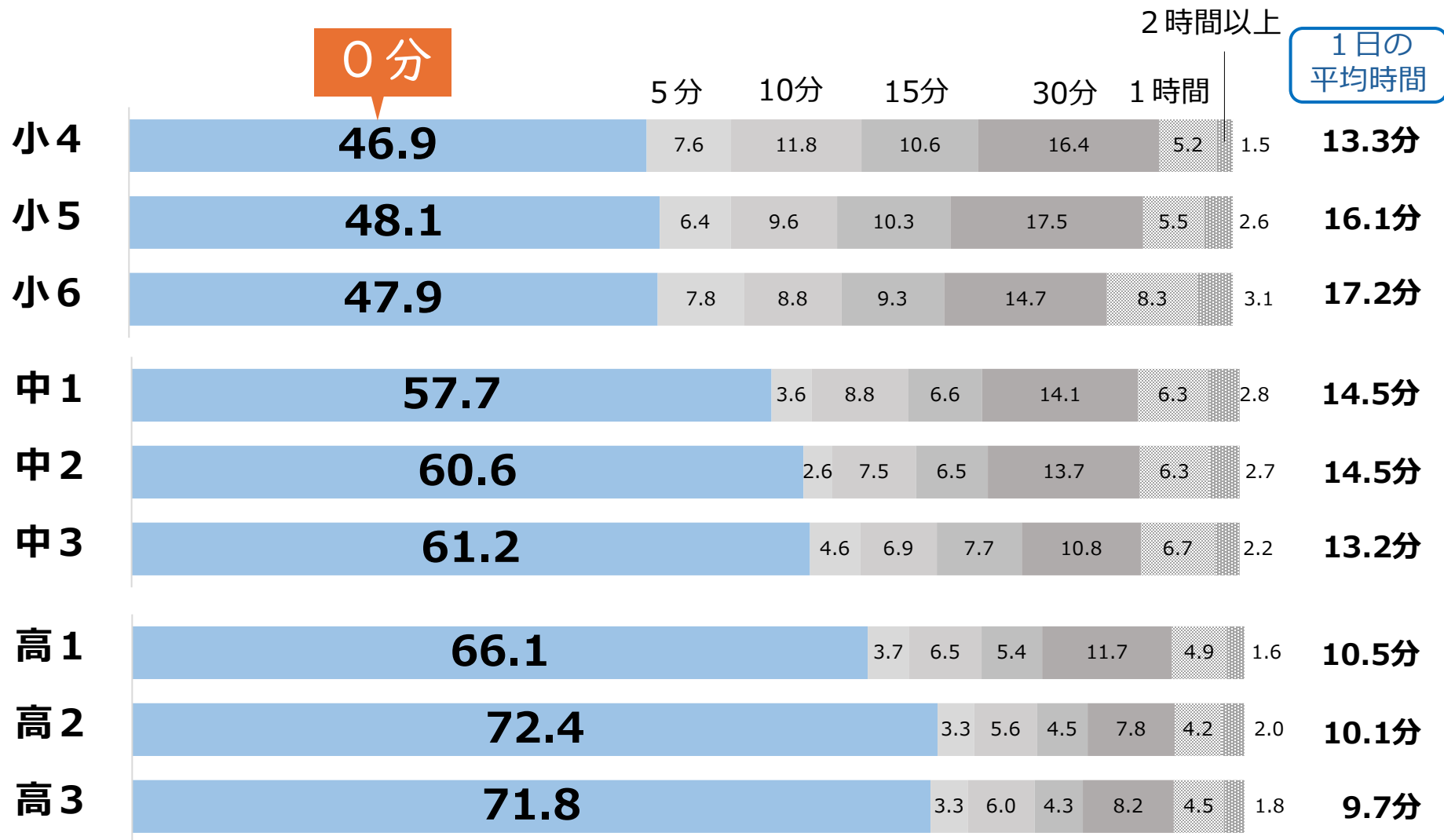


(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015－2024」

*「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「本を読む」に対する回答（％）。2023年以降は「本を読む（電子書籍を含む）」。

*「しない」は0分、「5分」から「4時間」はそれぞれ、5分から240分、「4時間以上」は300分を割り当てて平均値を算出した。

1日の読書時間が0分、半数以上



(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2024」

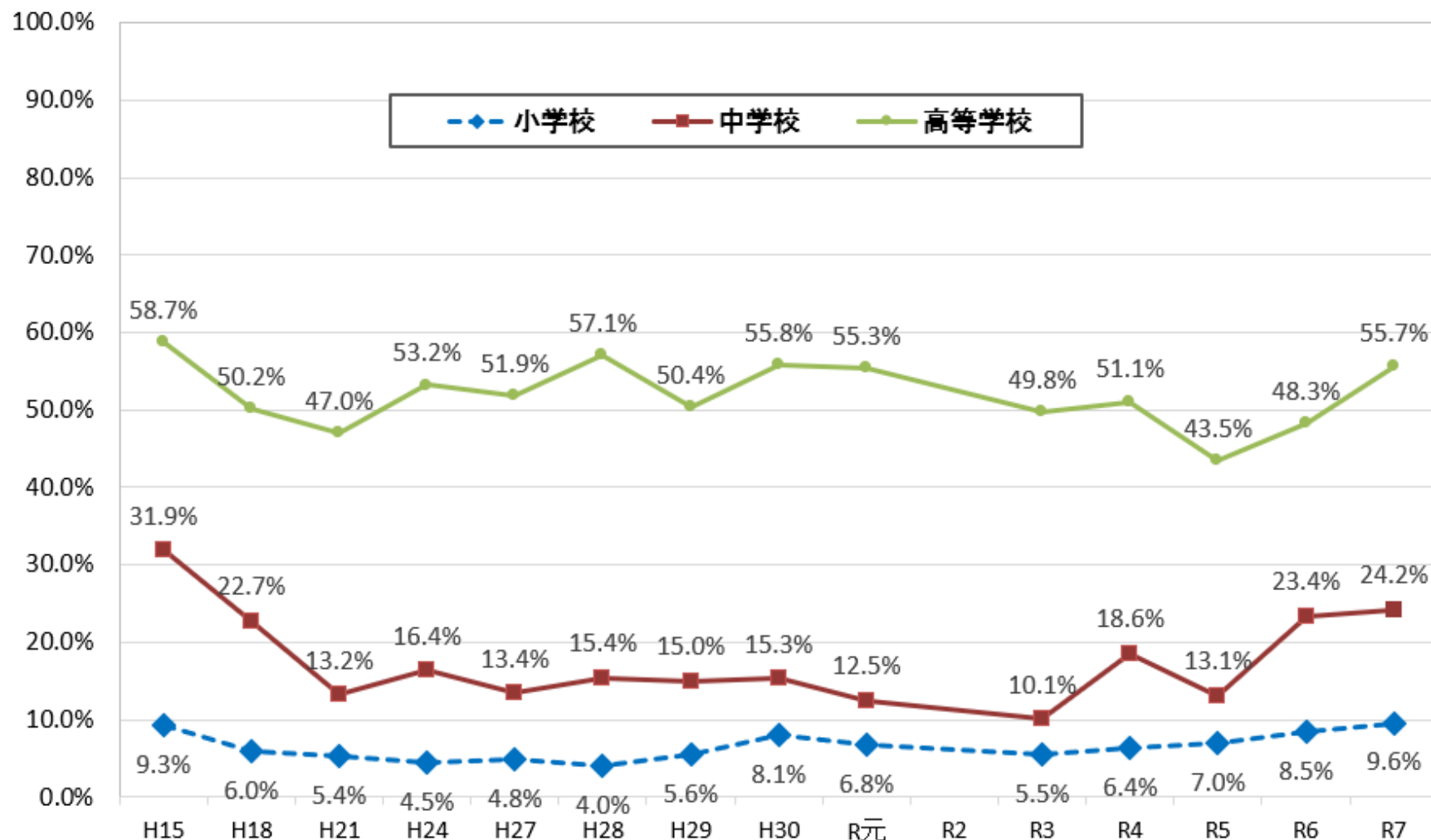
*「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「本を読む」に対する回答（％）。

*「2時間以上」は、「2時間」「3時間」「4時間」「4時間以上」の合計。*平均時間は「しない」を0分として算出。

いずれの学校段階でも不読率が上昇傾向

不読率（0冊回答者）の推移

※「不読率」：1か月に1冊も本を読まなかった者の割合



出典：学校読書調査（公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞社）

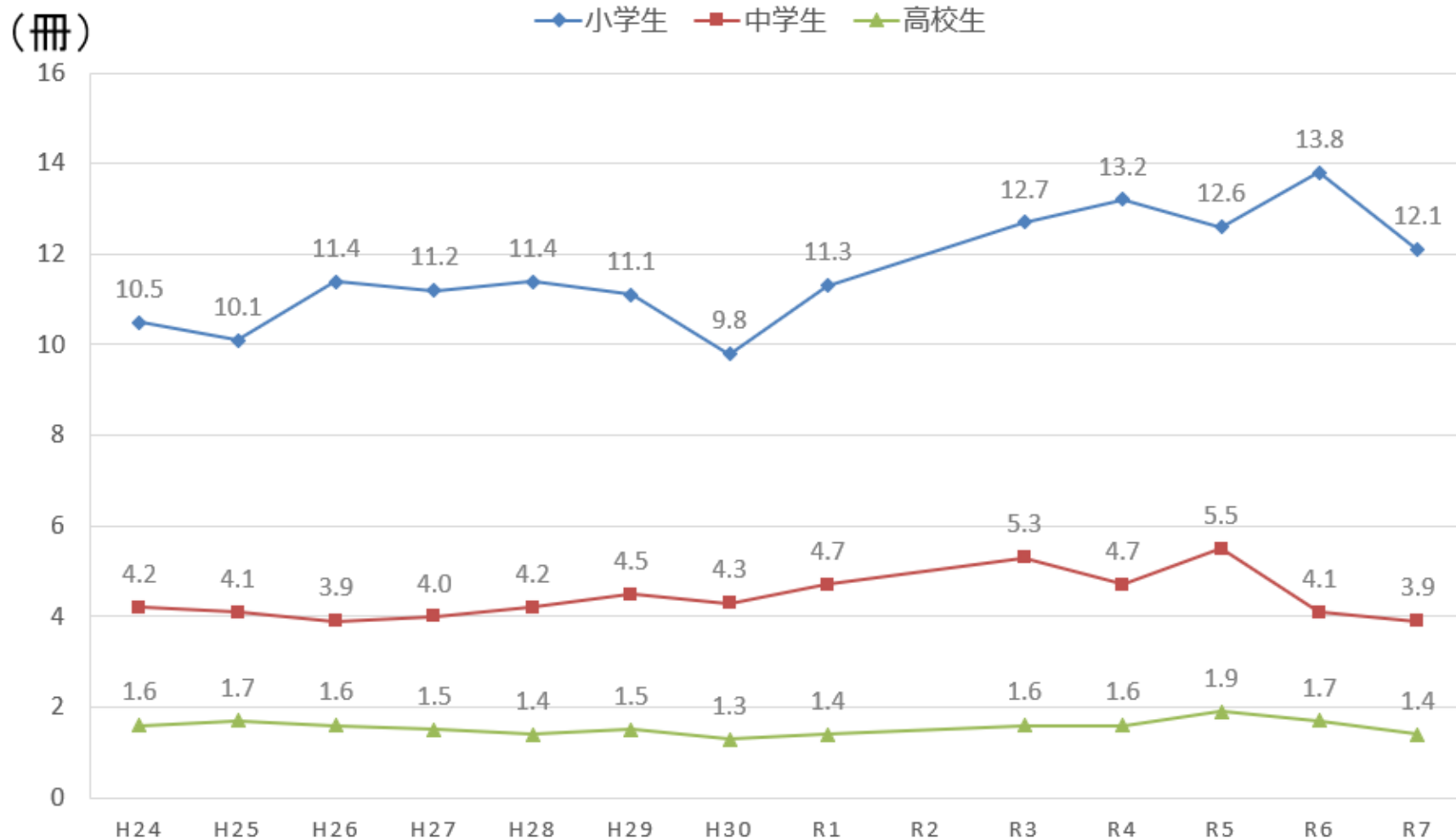
※令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調査未実施

子供の読書習慣に格差が生じている可能性

※直近の12年間で、1人当たりの読書冊数（冊／月）は、ほぼ横ばい。

一方、不読率は上昇していることから、子供の読書習慣に格差が生じている可能性が考えられる。

1人当たり読書冊数（冊／月）

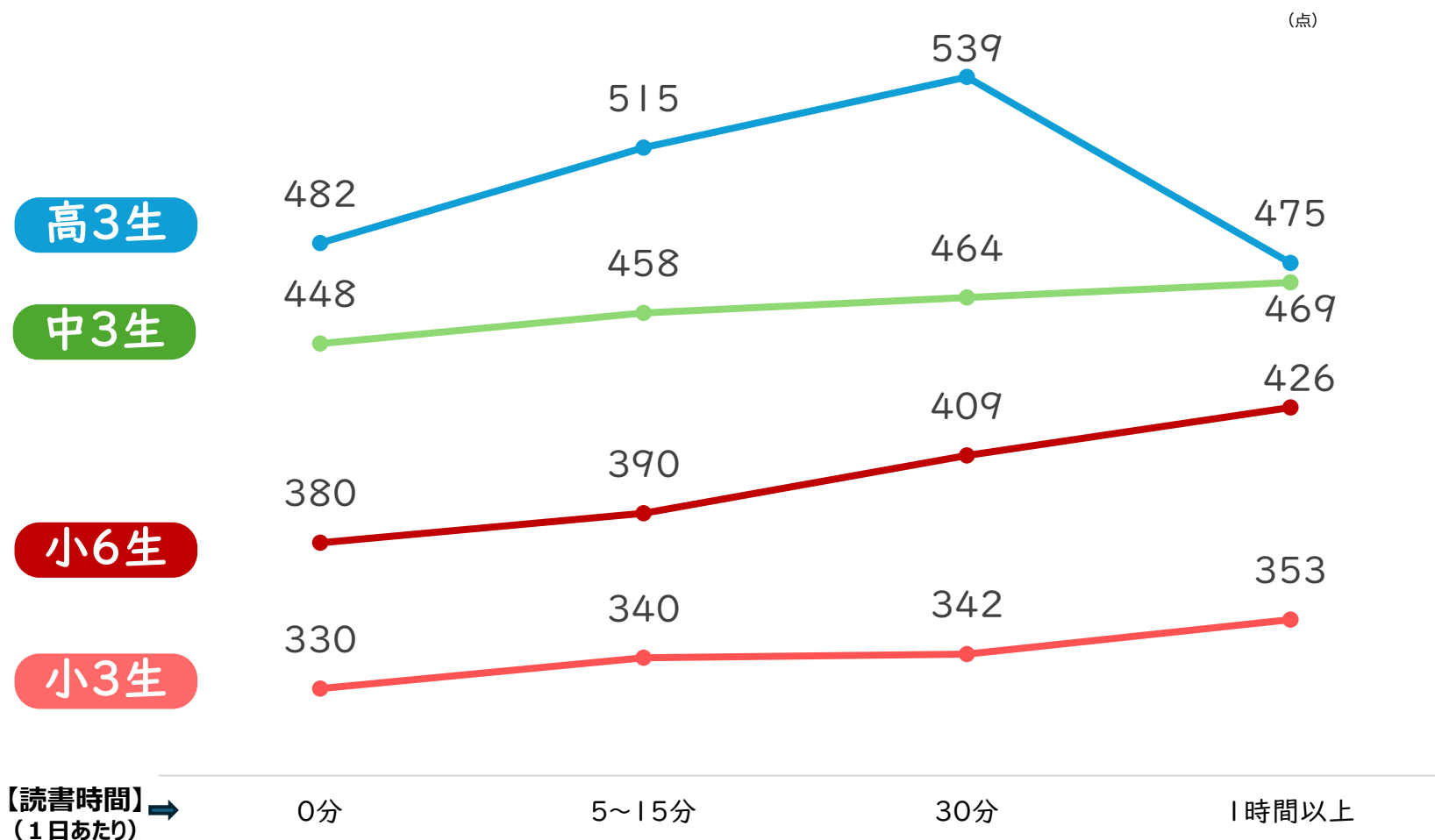


出典：学校読書調査（公益社団法人全国学校図書館協議会・株式会社毎日新聞社）

※令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、調査未実施

小中は読書時間が長いほど語彙力が高い

読書時間別の語彙力



(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「語彙力・読解力調査2019、2022」

* 語彙力を測定するテストを実施。項目反応理論 (IRT) を用いることで異なる学年間での比較を可能にしている。得点は、高3生の平均が500点になるように標準化した。

* 読書時間は、「しない」は「0分」、「5~15分」は「5分」「10分」「15分」の合計、「1時間以上」は「1時間」「2時間」「3時間」「4時間」「4時間以上」の合計。

* 語彙力は、小3生と小6生は2019年調査の結果 (2022年調査は未実施)、中3生と高3生は2022年調査の結果を示した。

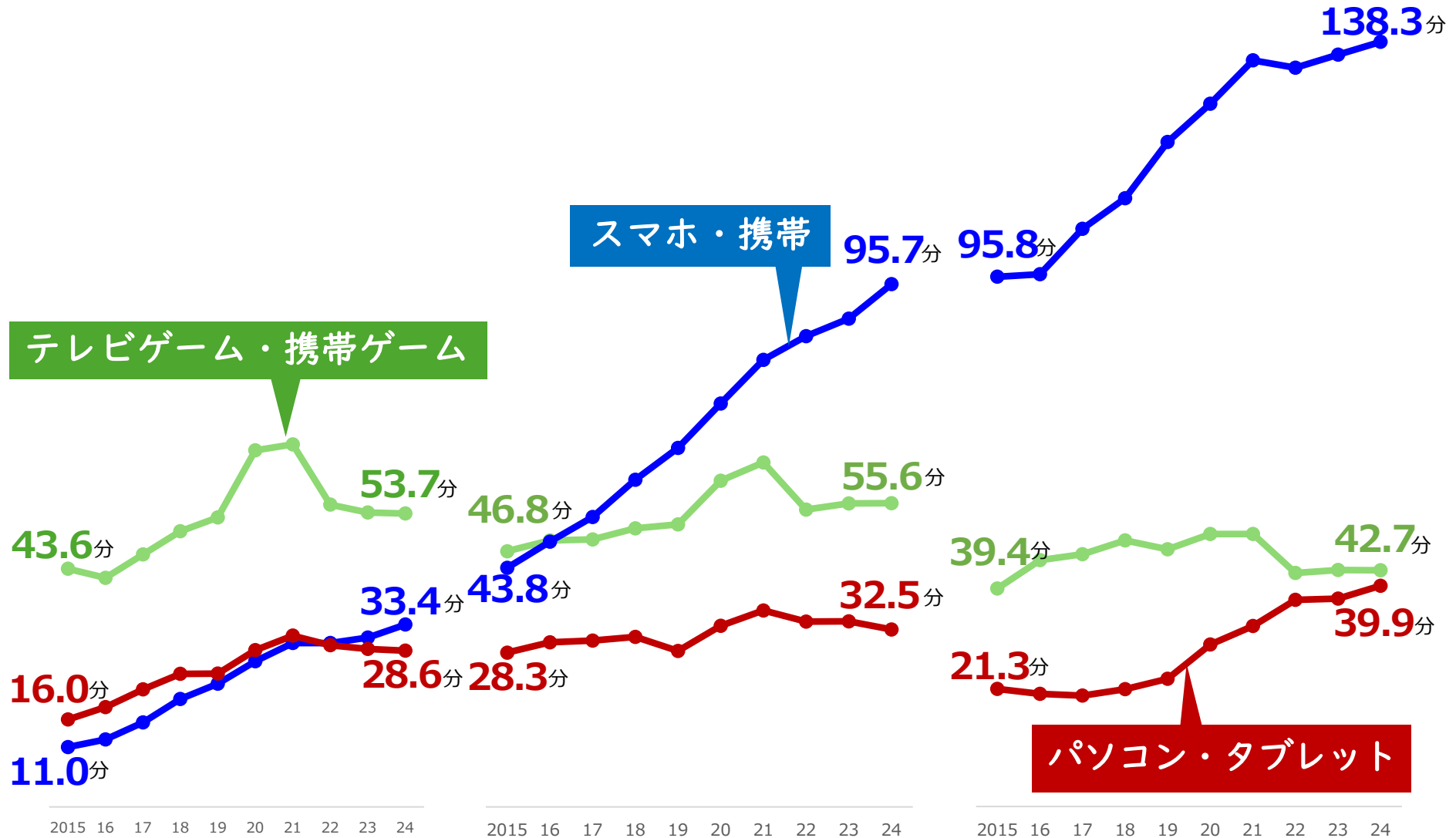
* 小3生 $p < 0.05$ 、小6生 $p < 0.001$ 、中3生 $p < 0.1$ 、高3生 $p < 0.001$ (いずれも分散分析)。

家庭でのスマホ・ゲーム、増加の一途

小4～6

中学生

高校生

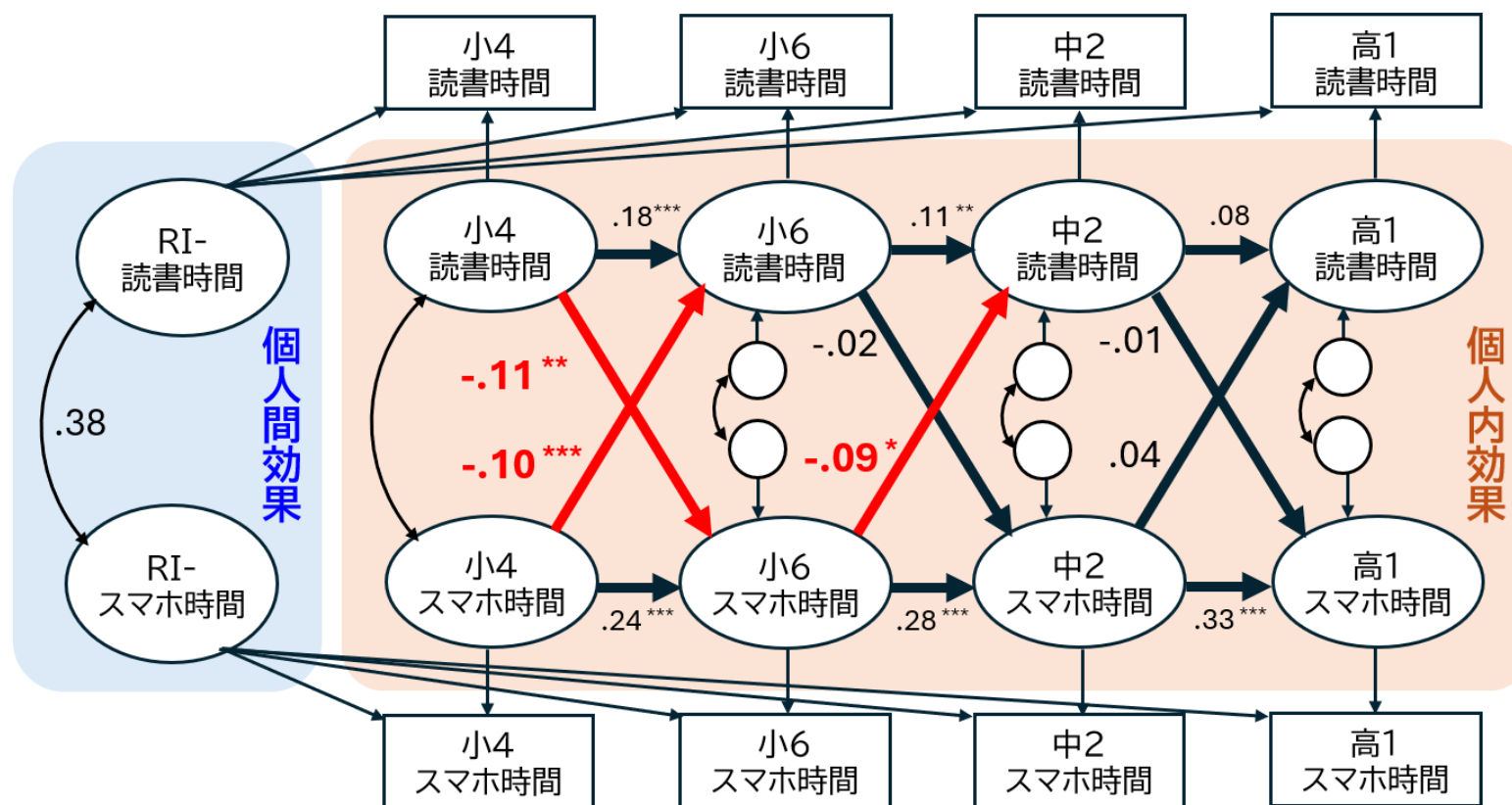


(出典)東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2024」

*「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか」という設問の「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ」、「携帯電話やスマートフォンを使う」、「パソコンやタブレットを使う」に対する回答。「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて平均時間を算出。

発達段階に応じて変化する読書時間とスマホ時間の関連

- ・小学生のうちは、読書とスマホは「時間の取り合い」になりやすい。
- ・中学生や高校生など上の学年に行くほど、読書とスマホの相互の影響は弱まる



(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2018-2024」。木村治生氏 (ベネッセ教育総合研究所) による分析。

* RI-CLPM (ランダム切片交差遅延パネルモデル) による分析結果。2018年に小4だった1,836名を2024年の高1まで追跡した。数値は、標準化回帰係数。*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 。

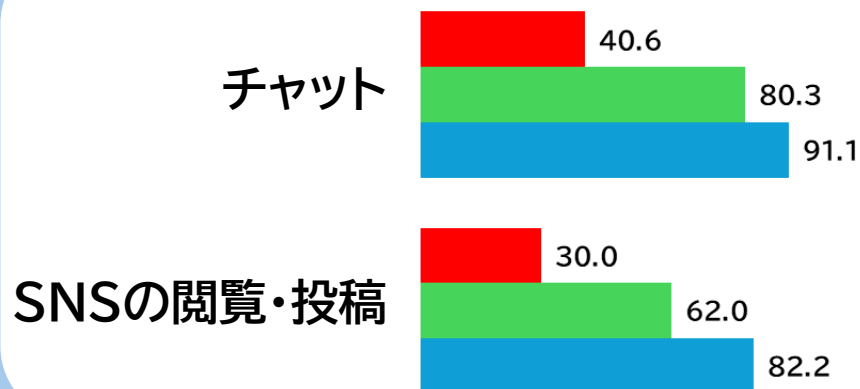
* $\chi^2(9) = 17.55$, $p = .041$; CMIN/DF = 1.95, CFI = .984; TLI = .935, RMSEA = .023 (90%CI [.005, .039], PCLOSE = .999)

インターネットは多様な用途に利用

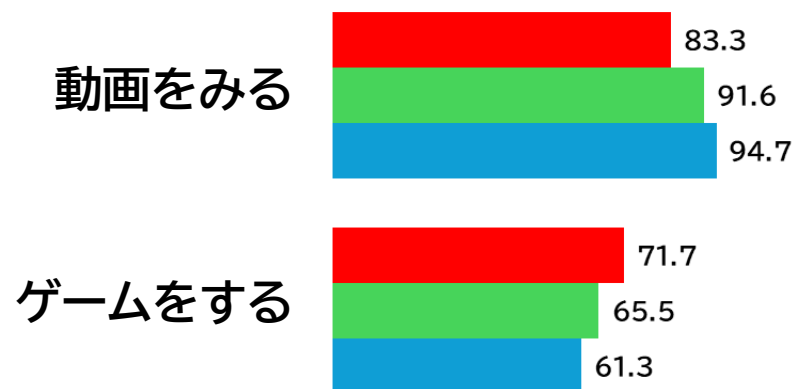
「週に1日以上」使用する比率

■ 小4～6生 ■ 中学生 ■ 高校生

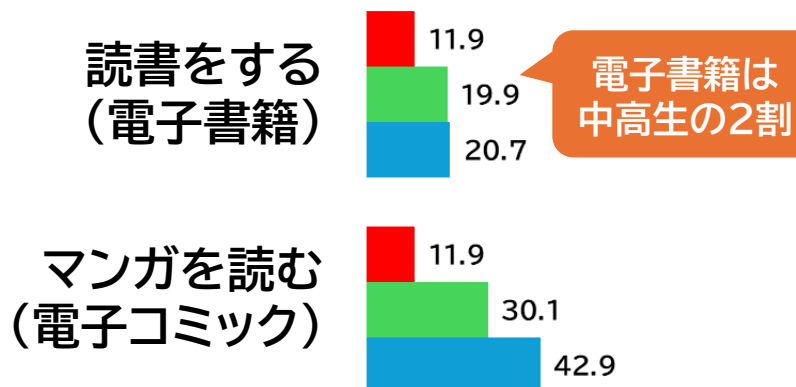
交流



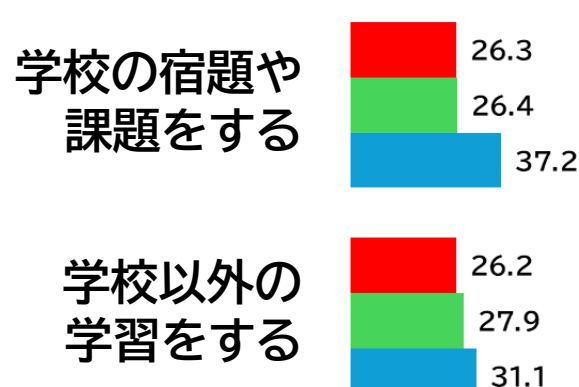
余暇



読書・マンガ



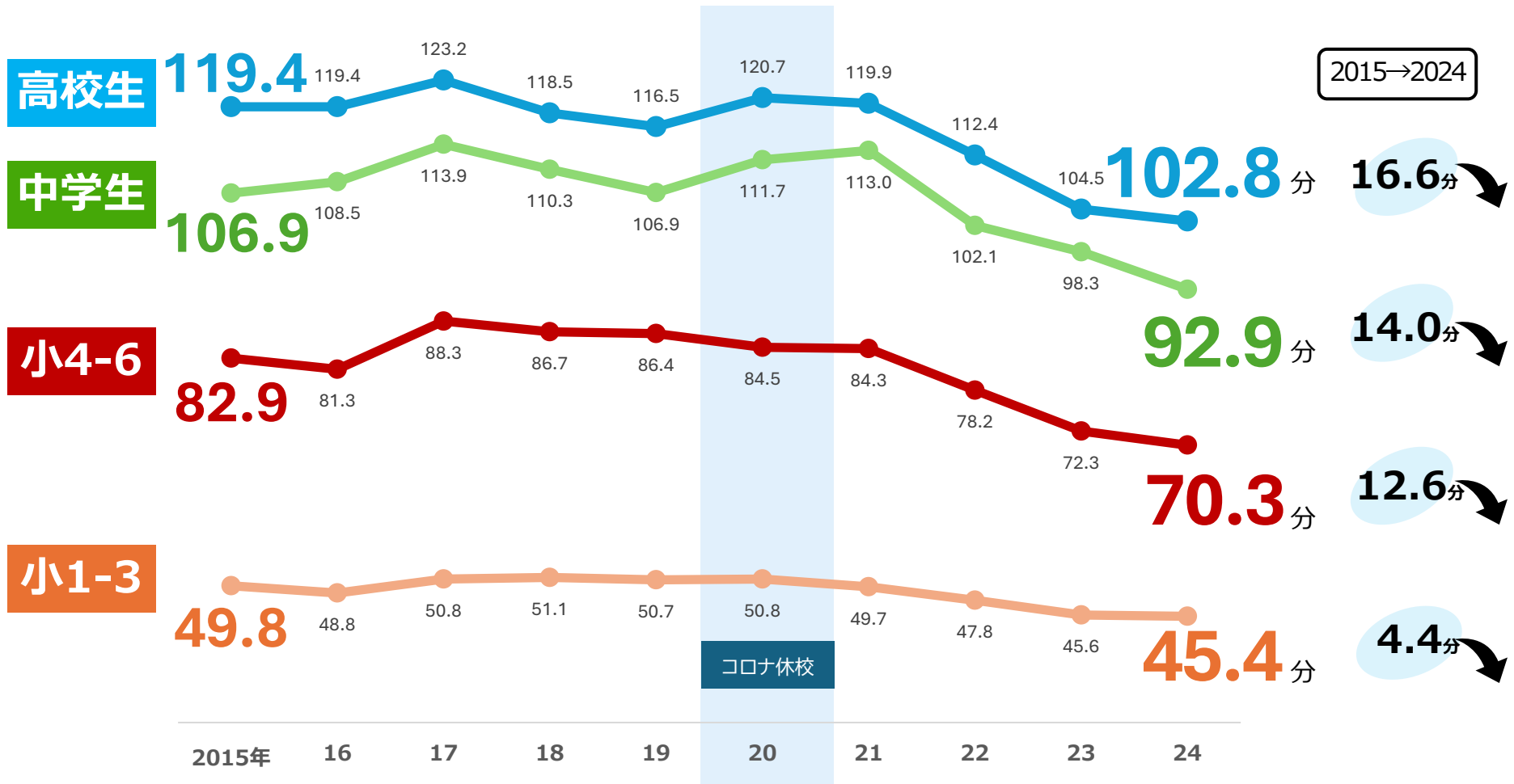
学習



(出典) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもICT利用に関する調査2023」

* 調査では、インターネットを使って次のことをどれくらいしているかをたずねた。数値は、「週1～2日」「週3～4日」「週5～6日」「ほぼ毎日(7日)」の合計。

小4～高3の学習時間は1日10～20分減少



(出典)東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2024」

「あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、一日にどれくらいの時間やっていますか。学校の中でやる時間は除いてください。」という設問の「学校の宿題をする時間」、「学校の宿題以外の勉強をする時間（学習塾の時間を除く）」、「学習塾での勉強時間」に対する回答。 学習時間は、「宿題」+「家庭学習」+「塾での学習」の1日あたりの平均時間。「学校の宿題」「家庭学習（学校の宿題以外の勉強をする時間）」の平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて算出。「塾での学習」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを0分、「通っている」と回答した子どものうち「1回にどれくらいの時間、学習塾で勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「1時間」を60分、「4時間」を240分、「4時間以上」を270分のように置き換え、週当たりの通塾回数をかけあわせて7で割って算出。

学校図書館における司書教諭及び学校司書について

【司書教諭の発令状況】

小学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	92.6% (100.0%)	92.6% (100.0%)
公立	69.9% (67.9%)	99.4% (99.4%)
私立	61.8% (64.3%)	87.8% (89.2%)
特区	0.0% (50.0%)	0.0% (100.0%)
合計	69.9% (68.0%)	99.2% (99.3%)

中学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	71.0% (72.6%)	95.7% (95.9%)
公立	64.3% (64.6%)	98.9% (98.9%)
私立	46.7% (68.4%)	66.7% (88.0%)
特区	- (-)	- (-)
合計	63.0% (65.0%)	97.0% (98.3%)

高等学校	全体の状況	12学級以上の学校 における発令状況
国立	64.7% (64.7%)	100.0% (100.0%)
公立	86.2% (87.0%)	98.5% (99.3%)
私立	70.9% (79.6%)	80.6% (88.2%)
特区	12.5% (10.5%)	100.0% (100.0%)
合計	81.5% (84.5%)	93.2% (96.1%)

【学校司書の配置状況】

小学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	40校 (42校)	58.8% (58.3%)
公立	13,051校 (11,561校)	69.1% (58.8%)
私立	109校 (115校)	46.8% (51.3%)
特区	2校 (2校)	100.0% (100.0%)
合計	13,202校 (11,720校)	68.8% (58.8%)

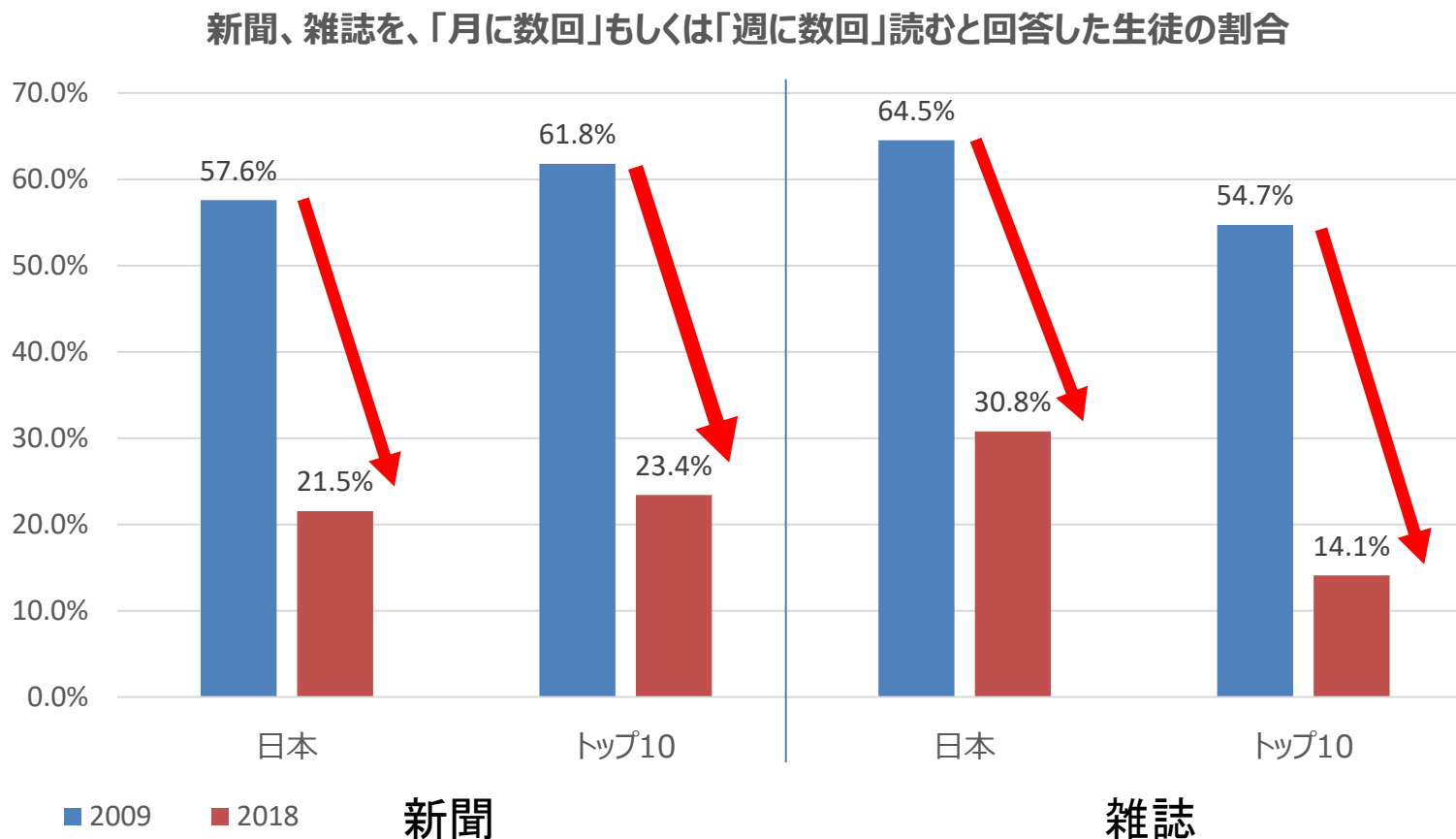
中学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	38校 (40校)	55.1% (54.8%)
公立	6,027校 (5,392校)	65.9% (57.1%)
私立	310校 (521校)	42.0% (70.4%)
特区	- (-)	- (-)
合計	6,375校 (5,953校)	64.1% (58.0%)

高等学校	配置学校数	全体に占める 割合
国立	13校 (13校)	76.5% (76.5%)
公立	2,290校 (2,349校)	66.4% (66.9%)
私立	775校 (915校)	55.2% (66.4%)
特区	1校 (2校)	6.3% (10.5%)
合計	3,079校 (3,279校)	63.0% (66.6%)

ボランティアとの連携状況

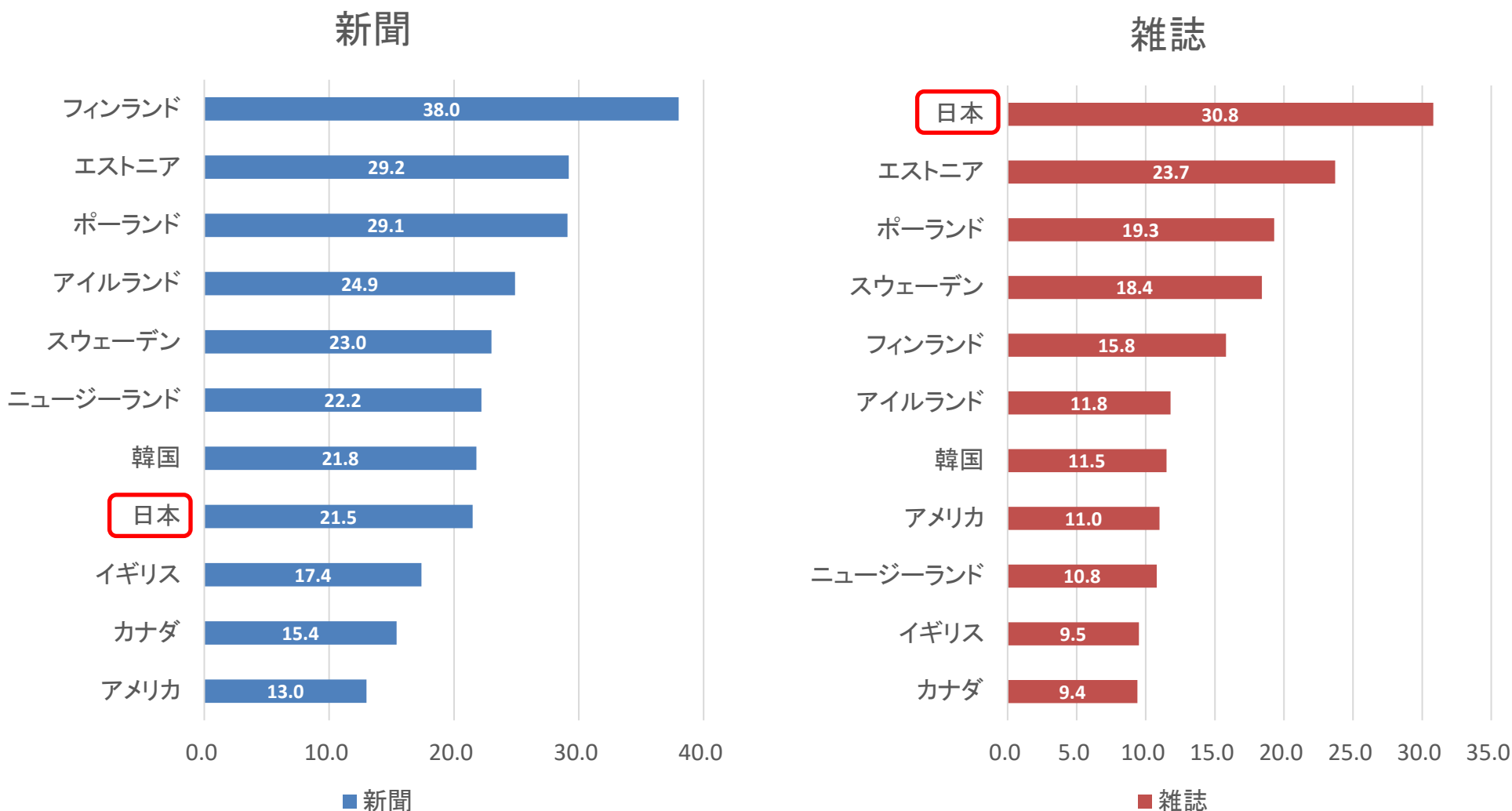
	ボランティアと連携している学校の割合	内訳（複数回答可）		
		配架や貸出・返却業務等、図書館サービスに係る支援	学校図書館の書架見出し、飾りつけ、図書の修繕等施設の整備に係る支援	読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援
小学校 (18,849校)	78.7% (14,843校)	13.8% (2,055校)	42.1% (6,254校)	91.3% (13,546校)
中学校 (9,120校)	27.9% (2,547校)	25.2% (643校)	49.9% (1,272校)	51.1% (1,302校)
高等学校 (3,436校)	2.5% (86校)	29.1% (25校)	27.9% (24校)	55.8% (48校)

新聞、雑誌を読む生徒の割合は国際的に大幅に減少している。



「トップ10」：OECD加盟国中、2018PISA調査における読解力の平均得点が高かった上位10か国（※）。

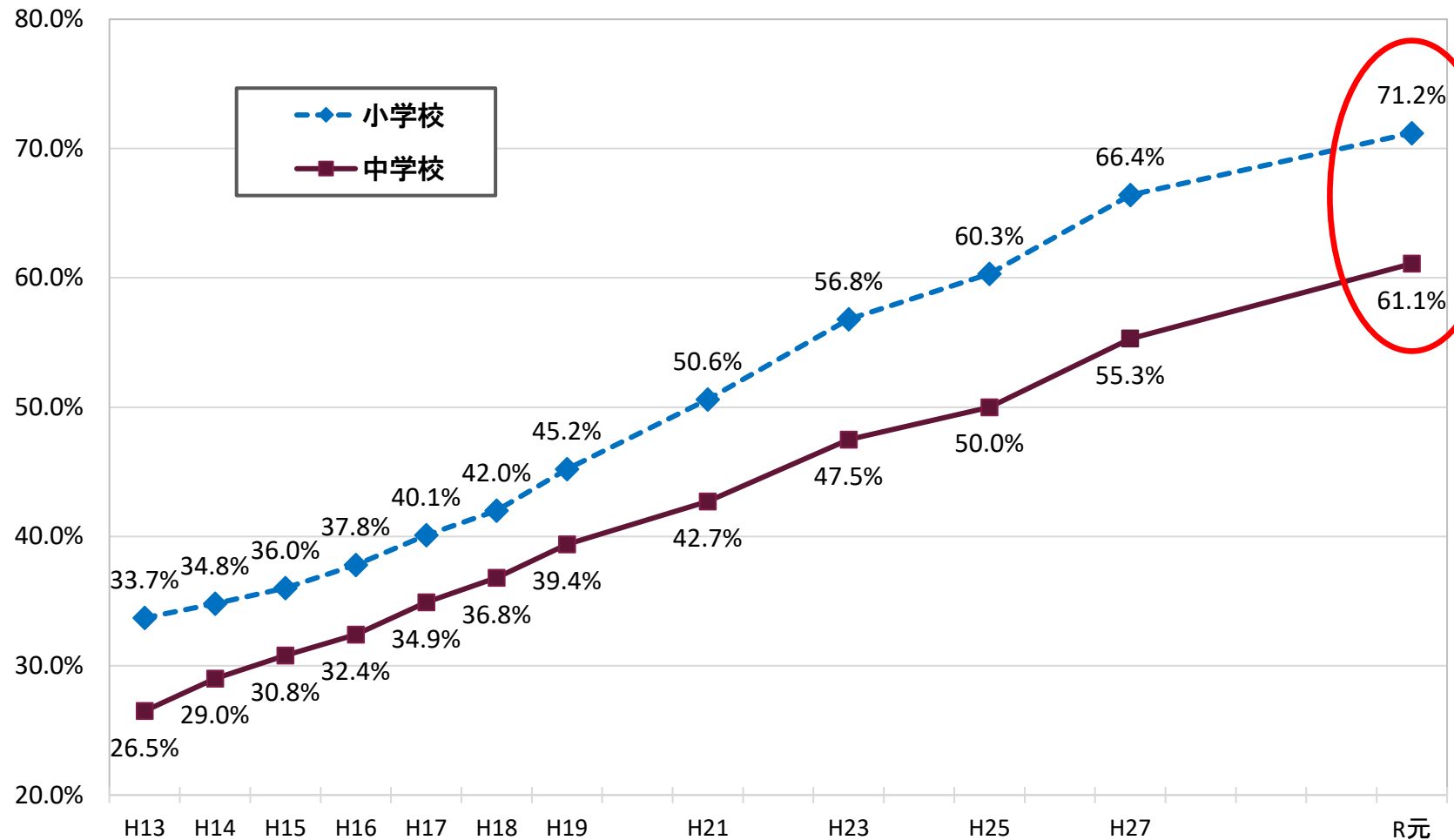
（※）2009年と2018年の上位10か国は異なるため、2018年の上位10か国を抽出して算出。



※「次のものについて、自分から進んで読むことはどのくらいありますか」と尋ね、「新聞」、「雑誌」の項目それぞれについて、「月に数回」「週に数回」読むと回答した生徒の割合について、2018PISA調査における読解力の平均得点が高かった上位10か国（OECD加盟国中）と日本を比較。（PISA2018報告書より作成。）

学校図書館図書標準の達成状況の推移 (達成している公立小・中学校の割合)

学校図書館図書標準：公立義務教育諸学校の学校図書館に整備すべき蔵書冊数の標準を、学級数に応じて定めたもの



※平成19年（調査年：平成20年）～27年（同：28年）は隔年、その後令和元年（同：令和2年）に実施

出典：文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」

学校図書館（公立）における新聞配備率の推移

		学校数 (A)	新聞配置学校		新聞配備紙	
			学校数 (B)	割合 (B／A)	新聞紙数 (C)	平均 (C／B)
小学校	平成22年	21,188	3,588	16.9%	4,697	1.3
	平成27年	19,604	8,061	41.1%	10,284	1.3
	令和元年	18,849	10,729	56.9%	16,809	1.6
中学校	平成22年	9,837	1,423	14.5%	2,861	2.0
	平成27年	9,427	3,557	37.7%	6,100	1.7
	令和元年	9,120	5,177	56.8%	13,925	2.7
高等学校	平成22年	3,681	3,313	90.0%	9,290	2.8
	平成27年	3,509	3,194	91.0%	8,914	2.8
	令和元年	3,436	3,269	95.1%	11,551	3.5

※第5次5か年計画（H29～R3）で、小学校等1紙、中学校等2紙、高等学校等に4紙配置されるよう地方財政措置（150億円）

（平成22年度は5月1日現在、平成27年度・令和元年度は年度末実績）

出典：文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」

言語能力、学習方略について

学習語・学習言語について

【学習語とは】

語彙のタイプ	意味範囲	使用範囲	例
一般語	特化せず	分野を超えて使用される	学校、動く
専門語	特化した意味	分野限定	光合成、為替、蒸散
学習語	特化される場合もある されない場合もある	分野を超えて使用される	比較、分析

バトラー後藤裕子 (2011).『学習言語とは何かー教科学習に必要な言語能力』三省堂 P.122をもとに作成

【学習語・学習言語の特徴】

- 学習、手順に関わる語が多い
 - ・ 解決、学習、観察、記録、計算、作成、参照、実験、使用、証明、体験、調査、比較、表現、予想、理解
- 同じ語でも教科によって意味や使い方が違うものも少なくない
 - ・ 「てこの動き」(理科)と「社会の動き」(社会)
 - ・ 「和のことば」(国語)、「和をもとめなさい」(算数)
 - ・ 「能のお面」(国語)、「球の面」(算数)、「情報技術の発展における良い面と悪い面」(社会)、「葉の表面に現れた水滴」(理科)

令和7年5月26日外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議【資料2】バトラー委員発表資料より引用して作成

- 一般に使われる言葉でも、学習言語では意味が異なることがある
 - ・ 力(理科)
 - ・ 仕事(理科)
 - ・ 点や線(算数・数学)
 - ・ 傾き(数学)

新井紀子・国立情報学研究所教授 発表資料「学習言語のマルチリンガルを目指す」
(@2024.12.01第4回リーディングスキルフォーラム2024)より引用して作成

方略を意識した指導の例

【例】読解方略

理解補償	意味明確化	難しい文は自分の言葉でかみ砕いて言い直す
	コントロール	分からないところはゆっくり読む
内容理解	要点把握	大切なところに線を引く
	記憶	難しい言葉や内容を暗記する
	質問生成	自分がどのくらい分かっているかチェックする質問をする
理解深化	構造注目	接続詞に注目する
	既有知識活用	知っていることと内容を結び付けようとする

第2回国語WG（令和7年10月24日）【資料3】犬塚委員提出資料より引用

【元の文献】

- ・犬塚美輪（2002）説明文読解方略の構造. 教育心理学研究, 50, 152-162.
- ・犬塚美輪（2013）読解方略の指導. 教育心理学年報, 52, 162-172.

国語科における学習指導要領の変遷等

小・中・高等学校国語の目標及び内容の構成（平成29年,30年告示）

	目標	内容の構成
高等学校	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。 (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。 (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。	〔知識及び技能〕 〔(1) 言葉の特徴や使い方に 関する事項〕 〔(2) 情報の扱い方に関する事項〕 〔(3) 我が国の言語文化に関する 事項〕 と 〔思考力、判断力、表現力等〕 〔 A 話すこと・聞くこと〕 〔 B 書くこと〕 〔 C 読むこと〕
中学校	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。 (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。 (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。	
小学校	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。 (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。 (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。	

現行学習指導要領における国語の改善等

【目標の構成の改善】

- 資質・能力を3つの柱に整理するとともに、領域ごとに示していた目標を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱で整理

【内容構成の改善】

- 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕に再構成

【学習内容の改善・充実】

〔語彙指導の改善・充実〕

- 各学年において、語句への理解を深める指導事項を系統化し、語彙の量と質の充実

〔情報の扱い方に関する指導の改善・充実〕

- 「情報の扱い方に関する事項」を新設し、「情報と情報との関係」と「情報の整理」の二つの系統に整理

〔学習過程の明確化、「考えの形成」の重視、探究的な学びの重視〕

- 思考力、判断力、表現力等の各領域において、学習過程を一層明確化、各指導事項を位置付け
- 全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、指導事項に位置付け
- 探究的な学びの要素を含む指導事項を、全ての選択科目に位置付け（高）

〔我が国の言語文化に関する指導の改善・充実〕

- 「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「書写」、「読書」に関する指導事項を「我が国の言語文化に関する事項」として整理し、小学校低学年の新しい内容として指導事項を追加

〔漢字指導の改善・充実〕

- 都道府県名に用いる漢字20字を小学校第4学年の漢字配当表に追加。小学校4～6年生の配当漢字及び字数を変更

〔「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実〕

- 共通必修教科目の〔思考力、判断力、表現力等〕における「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域に関する指導の配当時数を増加（高）

現行学習指導要領における国語の改善等

【学習の系統性の重視】

- 〔知識及び技能〕の指導事項及び〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項と言語活動例のそれぞれに、重点を置くべき指導内容を明確にし系統化

【言語活動の創意工夫】

- 従前に示していた言語活動例を言語活動の種類ごとに整理

【読書指導の改善・充実】

- 〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付け、「読むこと」の領域で、学校図書館などを利用して、情報を得て活用する言語活動例を明示

【各領域の授業時数、取り上げる教材の明確化】（高）

- 複数の領域をもつ全科目について授業時数を設定するとともに、主として「読むこと」の指導で取り上げる教材について、科目の性格に応じて、より明確に設定

【高等学校の科目構成の改善（旧→現行）】

- 中教審答申で示された高等学校の国語科の課題（※）を踏まえ、共有必修科目として「現代の国語」、「言語文化」を、選択科目として「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」、「古典探究」をそれぞれ新設。

（※）
・話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていない。
・古典の学習について、日本人として大切に生きてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという視点が弱く、学習意欲が高まらない。
【平成28年12月21日「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」より】

平成21年告示学習指導要領	平成30年告示学習指導要領
【共通必修科目】 国語総合（４）	【共通必修科目】 現代の国語（２） 言語文化（２）
【選択科目】 国語表現（３） 現代文Ａ（２） 現代文Ｂ（４） 古典Ａ（２） 古典Ｂ（４）	【選択科目】 論理国語（４） 文学国語（４） 国語表現（４） 古典探究（４） （ ）：標準単位数

(参考) 国語科の内容の構成及び高等学校の科目の変遷について

学習指導要領	小・中・高等学校国語科の内容の構成	高等学校国語の科目 (◎:必履修、○:選択必履修)	
昭和33～35年改訂 (告示)	A (聞くこと、話すこと)、(読むこと)、(書くこと) B ことばに関する事項	◎現代国語 ○古典乙Ⅰ	○古典甲 古典乙Ⅱ
昭和43～45年改訂 (告示)	A 聞くこと、話すこと B 読むこと C 書くこと (D ことばに関する事項(中))	◎現代国語 古典Ⅰ乙	◎古典Ⅰ甲 古典Ⅱ
昭和52～53年改訂 (告示)	A 表現 B 理解 〔言語事項〕 〔言語事項〕 A 表現 B 理解 (小))	◎国語Ⅰ 国語表現 古典	国語Ⅱ 現代文
平成元年改訂 (告示)	A 表現 B 理解 〔言語事項〕	◎国語Ⅰ 国語表現 現代語 古典Ⅱ	国語Ⅱ 現代文 古典Ⅰ 古典講読
平成10～11年改訂 (告示)	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔言語事項〕	○国語表現Ⅰ ○国語総合 古典	国語表現Ⅱ 現代文 古典講読
平成20～21年改訂 (告示)	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	◎国語総合 現代文A 古典A	国語表現 現代文B 古典B
平成29～30年改訂 (告示)	〔知識及び技能〕 (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項 (2) 情報の扱い方に関する事項 (3) 我が国の言語文化に関する事項 〔思考力、判断力、表現力等〕 A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと	◎現代の国語 論理国語 国語表現	◎言語文化 文学国語 古典探究

現行の高等学校国語科の科目履修状況（推計）

科目	履修率
現代の国語	100%
言語文化	100%
論理国語	77%
文学国語	49%
国語表現	16%
古典探究	87%

教科書の需要数を元に、文部科学省で推計（必履修科目の「現代の国語」「言語文化」の需要数を履修率100%（差があるため平均をとる）として、他科目の履修率を推計）R7年度の値を参照

令和7年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果

		普通科等				専門学科				総合学科
		1年次	2年次	3年次	単位制	1年次	2年次	3年次	単位制	
国語	現代の国語	95.2%	1.2%	0.9%	11.7%	83.7%	16.3%	3.6%	5.2%	100.0%
	言語文化	94.9%	3.0%	1.8%	12.0%	80.1%	21.2%	2.9%	5.2%	100.0%
	論理国語	0.0%	81.4%	85.0%	11.1%	0.0%	42.7%	48.9%	2.9%	83.6%
	文学国語	0.0%	53.8%	56.8%	8.1%	0.0%	30.6%	35.5%	2.0%	69.0%
	国語表現	0.0%	9.0%	23.7%	4.2%	0.3%	9.4%	26.1%	1.0%	49.1%
	古典探究	0.3%	79.3%	77.5%	9.6%	0.0%	22.8%	25.1%	2.0%	69.6%

高等学校国語科における教科目標の変遷

昭和35年改訂(告示) 目標

- 1 生活に必要な国語の能力を高め、言語文化に対する理解を深め、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る。
- 2 経験を広め、知識を求め、教養を高めるために、また、思想や感情を人に伝えるために、目的や場に応じて正しく的確に理解し表現する態度や技能を養う。
- 3 ことばのはたらきを理解させ、国語に関する知識を高め、国語に関する関心や自覚を深めて、国語を尊重し、その発展に寄与する態度や習慣を身につけさせる。

昭和45年改訂(告示) 目標

生活に必要な国語の能力を高め、国語を尊重する態度を育てる。

このため、

- 1 国語によつて的確に理解し表現する能力と態度を養う。
- 2 国語による理解と表現を通して、思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする。
- 3 国語による伝達を効果的にして社会生活を高める能力を伸ばし態度を養う。
- 4 言語文化を享受し創造するための基礎的な能力を伸ばし態度を養う。
- 5 国語に対する認識を深め、言語感覚を豊かにし、国語を愛護してその向上を図る態度を養う。

昭和53年改訂(告示) 目標

国語を的確に理解し適切に表現する能力を身につけさせるとともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成元年改訂(告示) 目標

国語を的確に理解し適切に表現する能力を身に付けさせるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成11年改訂(告示) 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成21年改訂(告示) 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

平成30年改訂(告示) 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

高等学校国語科における科目構成等の変遷

学習指導要領	領域構成	科目（◎：必履修、○：選択必履修）
昭和３５年改訂（告示）	A（聞くこと、話すこと）、（読むこと）、（書くこと） B ことばに関する事項	◎現代国語 ○古典乙Ⅰ ○古典甲 古典乙Ⅱ
昭和４５年改訂（告示）	A 聞くこと、話すこと B 読むこと C 書くこと ことばに関する事項	◎現代国語 古典Ⅰ乙 ◎古典Ⅰ甲 古典Ⅱ
昭和５３年改訂（告示）	A 表現 B 理解 〔言語事項〕	◎国語Ⅰ 国語表現 古典 国語Ⅱ 現代文
平成元年改訂（告示）	A 表現 B 理解 〔言語事項〕	◎国語Ⅰ 国語表現 現代語 古典Ⅱ 国語Ⅱ 現代文 古典Ⅰ 古典講読
平成１１年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔言語事項〕	○国語表現Ⅰ ○国語総合 古典 国語表現Ⅱ 現代文 古典講読
平成２１年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	◎国語総合 現代文Ａ 古典Ａ 国語表現 現代文Ｂ 古典Ｂ
平成３０年改訂（告示）	A 話すこと・聞くこと B 書くこと C 読むこと 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	◎現代の国語 論理国語 国語表現 ◎言語文化 文学国語 古典探究

現行の高等学校国語科 科目の目標

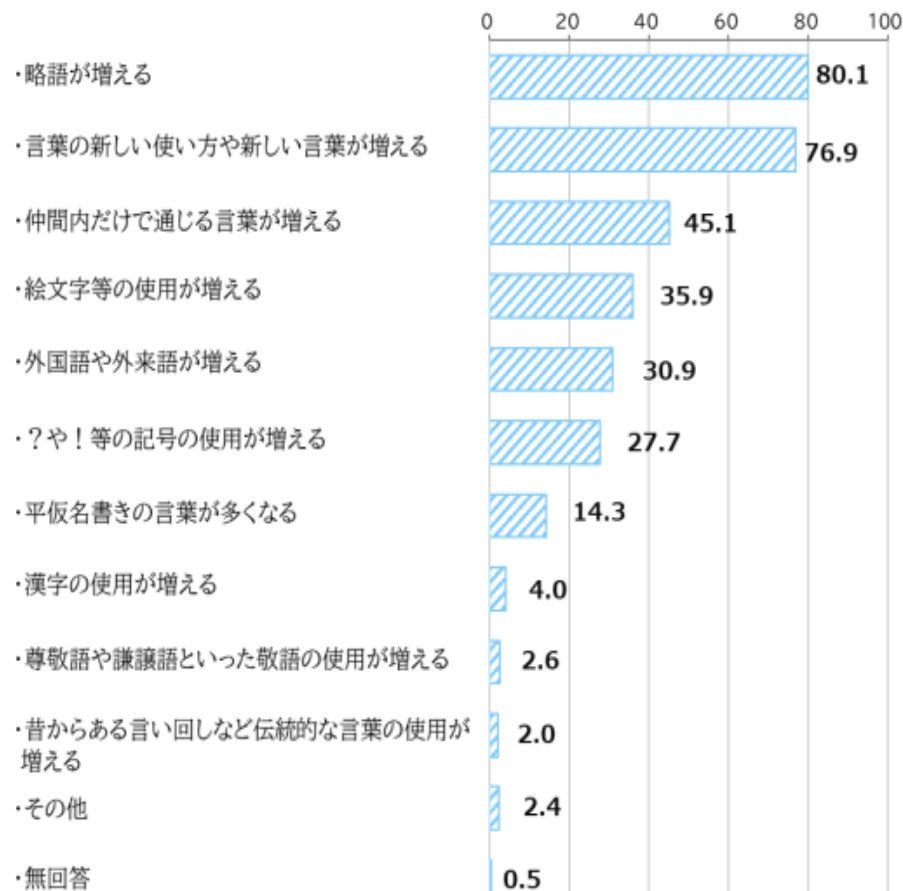
	科目名	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等
必修科目	現代の国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	言語文化	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
選択科目	論理国語	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	文学国語	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	国語表現	(1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
	古典探究	(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。	(2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通じた先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

児童生徒を取り巻く状況等

(文化庁) 令和6年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

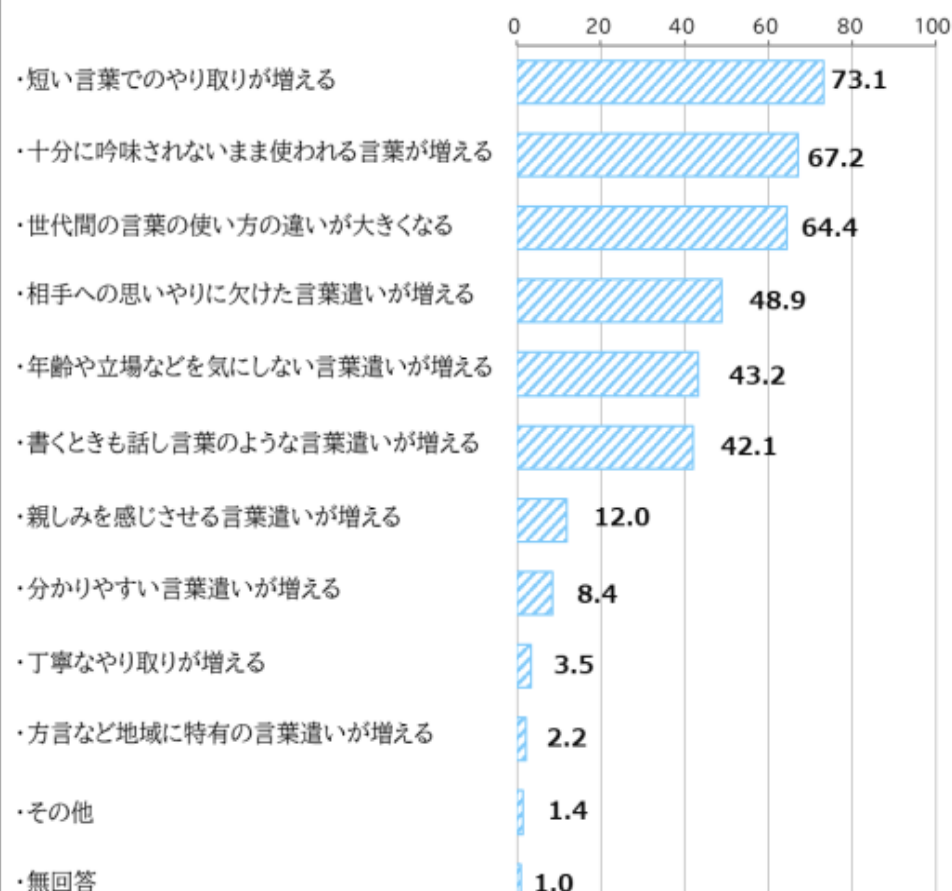
<問3付問1> SNSの普及が、社会で使われる
文字や語句に及ぼす影響 (全体)

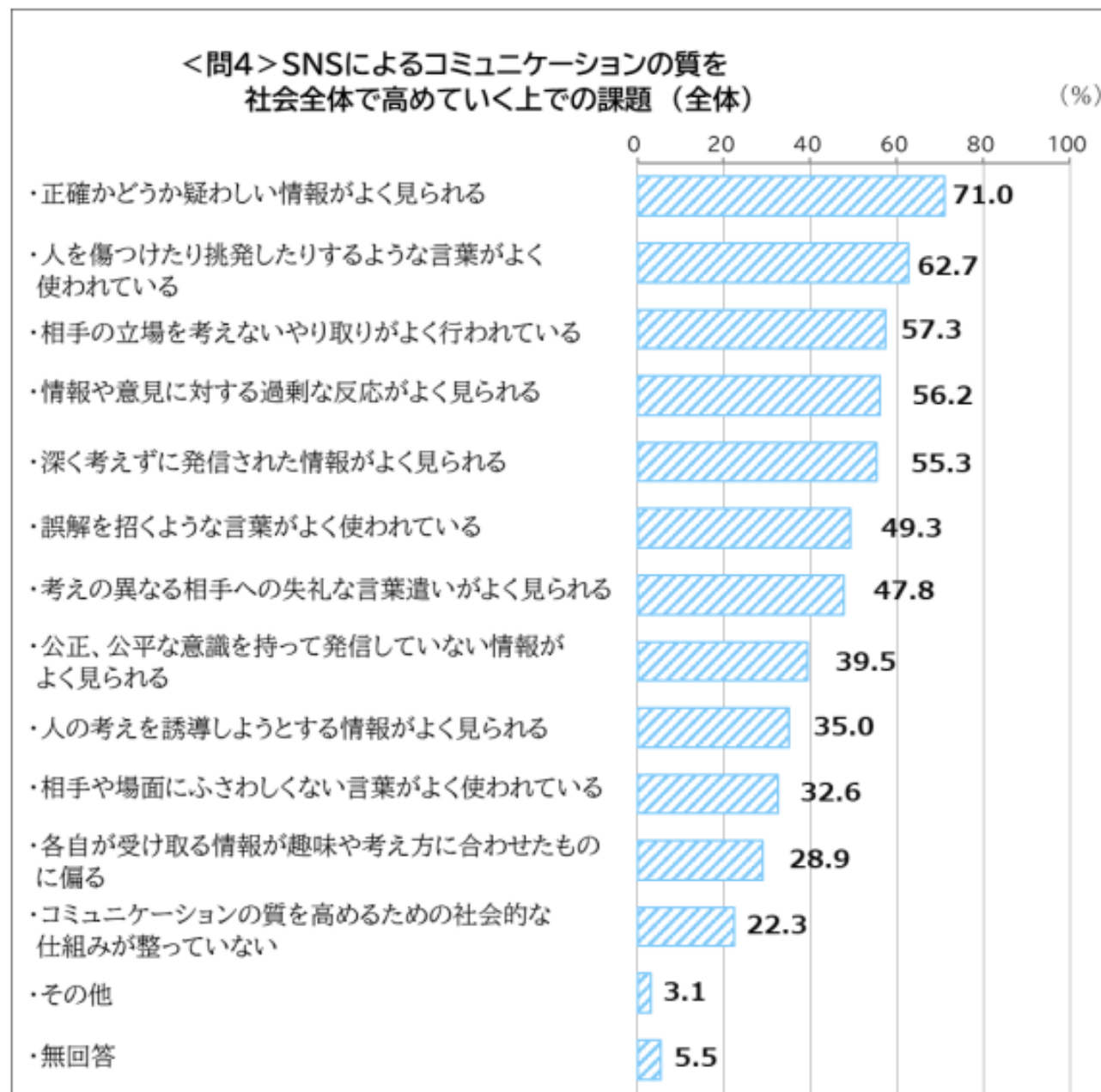
n=3,125 (%)



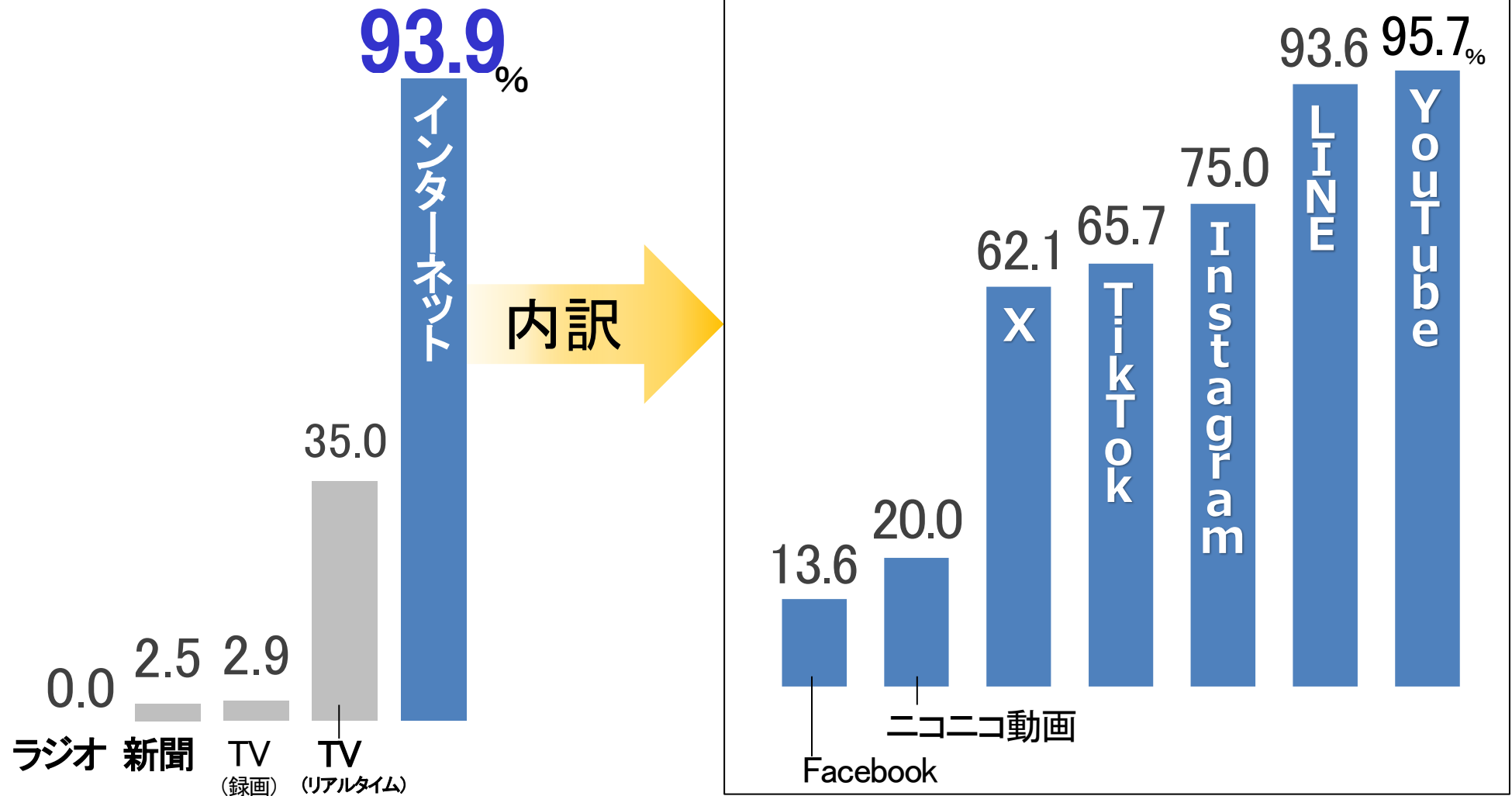
<問3付問2> SNSの普及が、社会における
言葉の使い方に及ぼす影響 (全体)

n=3,125 (%)





10代のメディア利用状況

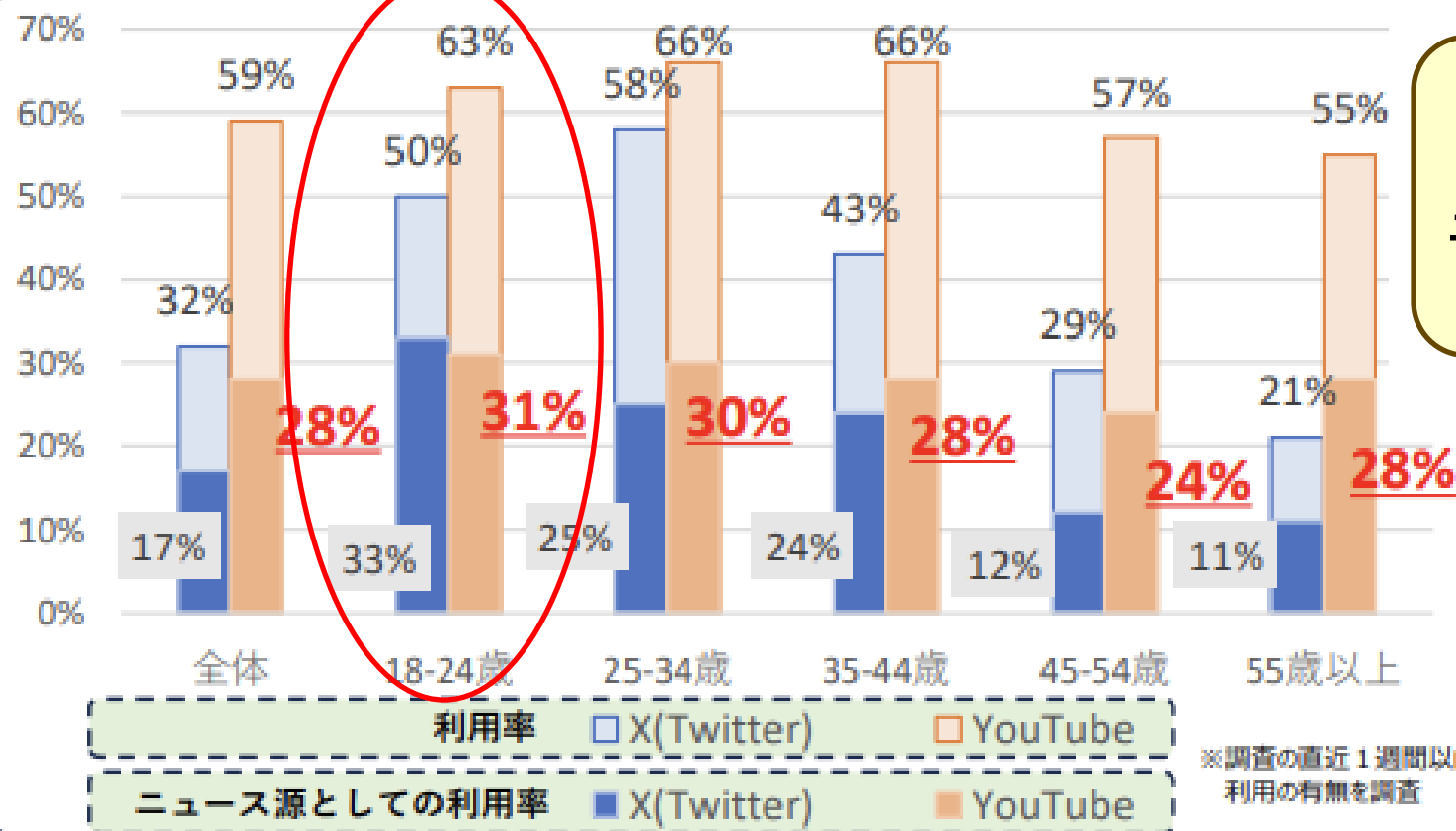


【出典】総務省情報通信政策研究所「令和6年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」図1-1-1-7、表5-1-1を基に作成。

* 本調査は、全国の13～79歳の男女1,800人を対象に実施（令和6年12月2日（月）～8日（日））。本資料では、そのうち10代のデータのみを抜粋している。* 左図は、図1-1-1-7を基に主なメディアの利用状況（平日）を示したもの（n=280）。* 数値は、行為者率（調査日に利用した人の割合）である。* 右図は、表5-1-1を基にインターネット利用の内訳のうち、主なソーシャルメディア系サービス及び動画投稿・共有サービスの利用状況を示したもの（n=140）。* 報告書では、「X」は「X（旧Twitter）」と表記されている。* 本資料は、上記調査結果を基に編集・加工して作成している。

18-24歳は、X(Twitter)、YouTube利用者の約半数が ニュース源として利用

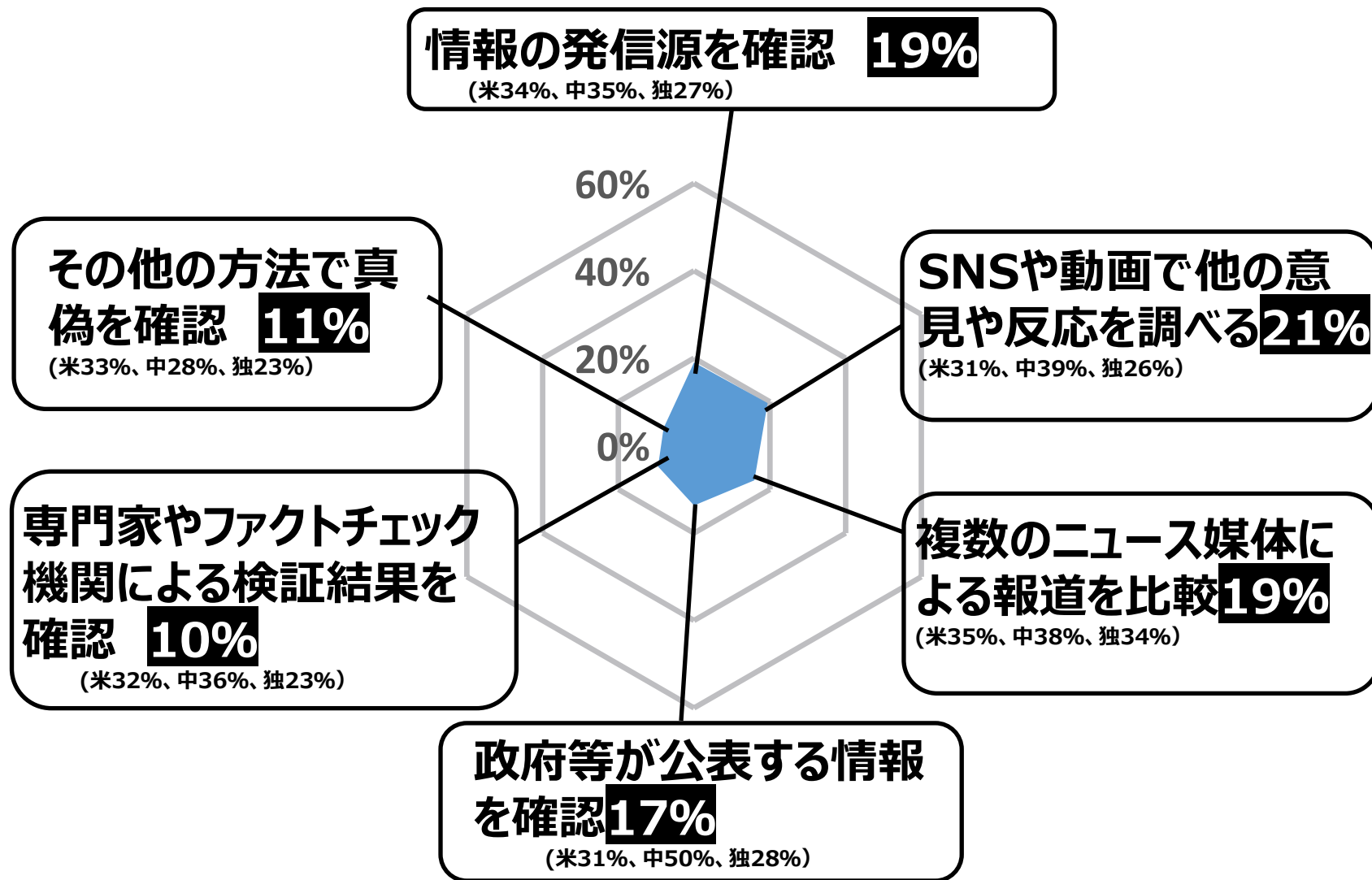
ニュース源としてのソーシャルメディア利用率(年代別、2024年)



全世代で
YouTubeが
ニュース源として
一定の存在感

(出典) Reuters Institute for the Study of Journalism「Digital News Report」(2024) を基に作成

オンライン情報の信頼性を確認する割合 他国と比べ圧倒的に低い



【出典】

「国内外における最新の情報通信技術の研究開発及びデジタル活用の動向に関する調査研究の請負成果報告書」（2025（令和 7）年 3 月 総務省情報流通行政局情報通信政策課情報通信経済室）

※アンケート対象：各対象国の居住者及び、20 代から 60 代の男女を対象 日本N=1030 米国、中国、ドイツ N=520

※オンライン情報の信頼性の確認方法：「あなたはオンライン上で最新のニュースを知りたい時に、どのように情報の信頼性を確かめますか」の問いに「ほぼ全てのニュースについて行う」あるいは「よく行う」と回答した割合

デジタルの負の側面も

① 子どもたちは常時ネット接続

● ネット利用時間の1日平均 (※1)

小学生 中学生 高校生
約**3h54m** 約**5h24m** 約**6h44m**

● 子供専用のスマホ保有率 (※2)

小学生 中学生 高校生
74.9% **95.4%** **99.1%**

【出典】

こども家庭庁 令和7年度 青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果。

(※1) ネットを利用すると回答した青少年の平均利用時間は、前年度と比べ**約25分増加**し、**約5時間27分**。目的ごとの平均利用時間は**趣味・娯楽**が最も多く、**約3時間1分**

(※2) 「小学生」の調査対象は、10歳以上

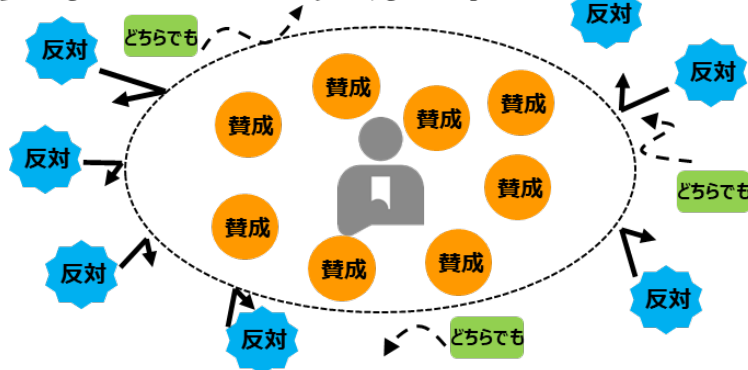
② 多様な情報から遮断されるリスク

● 検索結果・SNS、表示情報のパーソナライズ

✓ 日本は「知っている」：44.8% 他国は60%～70% 【出典】情報通信白書令和7年度版

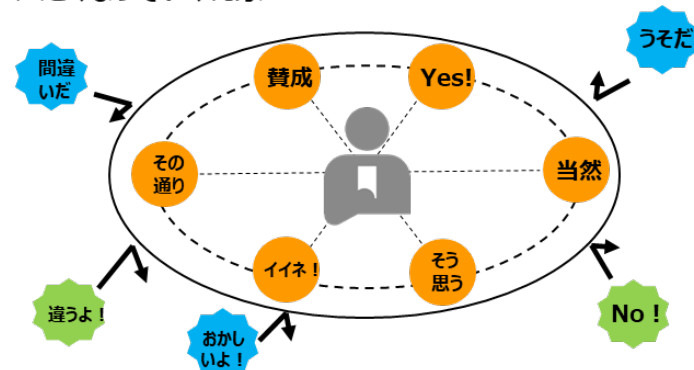
フィルターバブル現象

自分の好む情報「だけ」に囲まれ、
多様な意見から隔離されやすくなる現象。



エコーチェンバー現象

同じような意見が、閉ざされた空間の中で反響して
大きくなっていく現象



【出典】初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドラインVer.1.0

通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の全体イメージ

小・中学生全体(約892万人)

下記6領域のうち少なくとも一つの領域で一定ポイント以上をカウント
「聞く」
「話す」
「読む」
「書く」
「計算する」
「推論する」

学習面又は行動面で著しい困難^{※1}
(約8.8%)

学習面で著しい困難^{※1}
(約6.5%)

行動面で著しい困難^{※1}
(約4.7%)

聞く又は話す
に著しい困難^{※1}
(約2.5%)

読む又は書く
に著しい困難^{※1}
(約3.5%)

計算する又は推論する
に著しい困難^{※1}
(約3.4%)

通級指導^{※2}
(約2%)

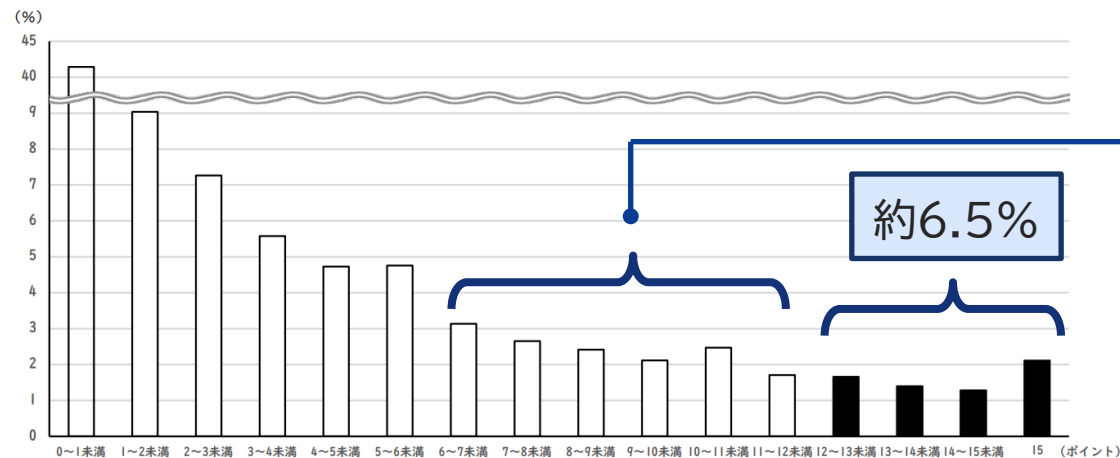
学習障害	:40,396人
注意欠陥多動性障害	:44,107人
自閉症	:41,171人
情緒障害	:28,274人
弱視、難聴、肢体不自由及び病弱・身体虚弱	:2,359人
言語障害	:47,069人

※1 令和4年度通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果より抜粋

※2 令和5年度通級による指導実施状況調査より抜粋

学習面に著しい困難を示す児童生徒の分布

<小学校・中学校>



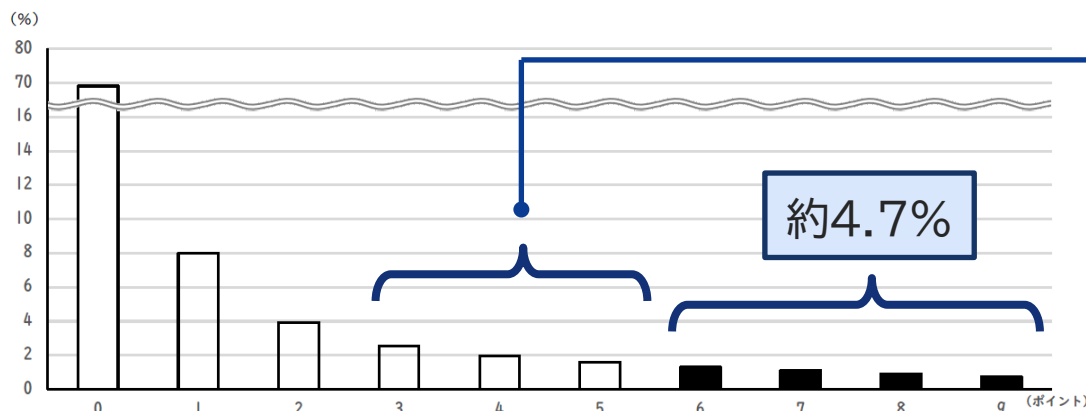
例えば「読む」領域で、

- ・「音読が遅い」
 - ・「文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返し読んだりする」
- に「よくある(3点)」がついても、その他の3つの設問で1点しかつかなかった場合はカウントされない。

数値に現れる背後にも、程度の差はあるが、学習面又は行動面で困難を抱える子供がいる

行動面に著しい困難を示す児童生徒の分布

<小学校・中学校>



※「不注意」又は「多動性-衝動性」における児童生徒全体の分布状況

例えば「不注意」「多動性-衝動性」領域で、

- ・「学業において、綿密に注意することができない、または不注意な間違いをする」
 - ・「課題または遊びの活動で注意し続けることが難しい」
 - ・「教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる」
 - ・「指示に従えず、課題や任務をやり遂げることができない」
 - ・「課題や活動に必要なものをなくしてしまう」
- に「非常にしばしばある(1点)」がついても、その他の設問で点数がつかなかった場合はカウントされない。